
絆～僕と君を結ぶ鎖～

綾瀬椎菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆〜僕と君を結ぶ鎖〜

【Nコード】

N3003I

【作者名】

綾瀬椎菜

【あらすじ】

現実世界の異空間に存在する『光の世界』と『闇の世界』がある日『闇の世界』が突然消滅し、現実世界の一部に紛れるようになり、『光の世界』の『住民』である雪代綾兎は其れを消すために現実世界に降りてきた

一方、あることから世界がつまらなく感じ始めていた氷月杏はある日闇の世界の一部に襲われ ドキドキ 異世界ファンタジースタート!!!

第一章　始まりは日常から

何もない静かな一時

そんな当たり前の事が平和だということをおまで忘れていたのかも
しれない

普通の生活

普通の出来事

朝のニュースでやっていた事件などの起きる確率は殆んど無い

異質なものなどこの世には存在しないのだから……

そんな事を思いつつ、日々の生活を少しだけ退屈に思っていた僕・
氷月杏（17歳）は当たり前前の生活を取り戻したいと願うようにな
った

そう……雪代綾兎によって……

第1章　始まりは日常から

晴々と澄んだ青空

小鳥の囀る声がとても心地よくて……と感じなくなった今日この頃

ありふれた毎日に少しずつ飽きてきた

昔からそんなに辛い人生を送ってきたわけではない

そこそこの中流家庭に生まれ、そこそこの人生を送っている

ゲームの様に、隣の家の幼なじみの女の子が窓から入ってくるという展開はないけど、男の子の幼なじみなら居るし、クラスには仲の良い女の子が居る

成績は割と良い方だし、運動も平均的に出来る

中性的な顔立ちだけど、其れで困った事といえば、良く女の子に間違えられて過去に何回か告白（同性から）された位だ

勿論断ったし、相手も分かってくれた

少しネガティブな性格だけど周りは受け入れてくれる
そんな人生が心地よくて…… っ少しだけ疎ましくて

でも、普通の生活を過ごしていれば面倒な事はない

そこそこの高校・大学を卒業して、収入の安定してる公務員になって、知り合った人と結婚して…… 其れなりの生活を送る

其れが、この世の中で一番幸せな事なのかもしれない
何時からか、そう思える様になっていた

日々の生活が疎ましくなってきたとは言えど、別にこの世から居なくなりたい、消え去りたい訳じゃない

自殺する気は無いし、つまらない人生に飽きたから何かやろうと言
って、犯罪に手を出すつもりもない

ただ……少しだけアクションやサプライズが欲しいだけ

と言っても、そこそこのレベルの私立高校に通う高二の男子高校生
が特殊な力など持っているはずは無く、学校に通う事が仕事のよう
な僕に世界を変える事など出来るはずも無く……

ただ、ひたすらつまらない毎日を送っていた

その日の朝も、起床して朝食を作って食べ、歯を磨いて顔を洗い、
用を足してから着替え、身仕度を整えてから家を出るという、いた
って普通の生活を送っていたはずだった

登校途中までは……

僕の通う私立聖桜高校は、家から徒歩5分の駅まで行き、其処から
都会に出るのは逆方向の電車に乗って3駅目で降りる

都会に向かう電車は満員なのに此方は比較的空いている方だ

乗客の多くが聖桜高校の生徒か地元の人だ

そして駅から真っ直ぐ続く桜並木の道を15分位歩くと高校に着く

桜並木の道自体が商店街になっているが其れは駅周辺だけで、少し歩くと閑静な住宅地に変わる

街灯があるからまだマシだけど、真っ暗な時には出来るだけ通りたくない場所だ

いつも通り桜並木の道を一人でてくてく歩いていると、急に辺りが暗くなった

「……………え？」

ざわざわと音を立てる木々達……………生暖かい風が身体にまとわりついて気持ち悪い

『……………此れはもしかして雨でも降るのかな……………』

通学鞆の中にはちゃんと折り畳みが入っているけど、朝から雨って嫌だなとか考えつつ桜並木の道を歩く

辺りが暗い時は自動的に街灯が灯るはずなのに何でか今日は灯りが点かなかった

故障しているのだろうか考えたが、一本なら未だしも辺り一帯の街灯が故障する事などあるのだろうか

「……………？」

何故だろう、かれこれ15分位歩いているのにどうして高校に到着しないのだろう

「道にでも迷ったかな……？」

すぐに考えを消す

一年と少し通っている高校までの間で今更迷うはずは無い

『じゃあ、僕は今何処に居るんだろう？』

思えば何でこんなにも辺りが暗いのか

時計を見ると今は8時を過ぎた位だった

何で夜じゃないのにこんなにも暗いのか

まるで大きな闇に飲み込まれた様な……

そういえば、駅周辺にはあれほど聖桜高校の学生が居たのに何で誰も居ないのか……

今、此処に居るのは僕だけ……？

だけど

『此処……違う……？』

高校の通学路だけと何かが違う

木々がざわめく音と自分の声以外は何も聴こえない

『嫌だ……此処に居たくない!!』

辺りを包んでいる闇が自分の存在を消してしまいそうで、恐怖を覚え
えた

闇がどんどん深くなる

周りにあったはずの桜並木が音も無く闇に飲み込まれていつて、無
と化していく

逃げるにも足がすくんで動かない

そして目の前に闇が迫る

抵抗なんてしても無駄

抗うことなんて出来るはずが無い

『最後に自分が異質に巻き込まれるなんて思わなかったな……』

消える覚悟を決めて僕は目を閉じた

刹那

『緋桜・封縛』

キン

落ち着いた声と共に金属がぶつかるような音が響き渡る

何事かと思い目を開けると白い光に包まれた少女が立って

「って、うわっ!？」

いや、宙に浮いていた

そりゃもうフワフワと目の前を漂っていらっしやるよ

スタッ

「ふう　っ、危ないところでしたね……彼のままだったら貴方、闇に存在を消されていましたよ？」

少女は地面に降り立ち、持っていた杖らしきものを縮小し、空間に消した

当たりの闇が消えたところを見ると、さっき唱えた呪文みたいなもので闇を消したようだ

「き、君は……?」

白い光はいつの間にか弱まり、其処には長い黒髪の女の子が居た

見た目は16〜17歳位で服装はシンプルなモノトーンの服を着ている

顔立ちは良い方でいわゆる美少女だ

「たまたま此処を通り掛かったら、人間の気配がして……こんな所で何をしてたのですか？」

僕の顔を覗き込んでくる美少女

「いや『何』って、聖桜高校に登校している最中に急に辺りが暗くなって……彼の、此処って何処ですか？」

「……ふえっ？此処を知らないんですか？……もしかして貴方……」
「え？」

「いや、其れよりも……取り敢えず、さっきからボクの事を『少女・美少女』とか考えないで下さい。気持ち悪いですよ」

「うぐっ……！」

何で口に出していないのに考えた事が読まれてるんだ……？

はっ、もしか

「君はもしかして超能力者？」

「あんな嘘っぽい連中と一緒にしないで下さい。迷惑です」

「う、ごめん……」

思った事をそのまま口に出して言うと、ギロツと睨まれた

そのせいか何故か此方が謝るはめに……何で？

「まあ、似たようなものなんですけどね」

肩をすかして言う少女　　って

「うおい」

「？　怖い顔なさっているんですけど、どうかしたのですか？」

疑問符を浮かべ、不思議そうにする少女

ああ……怒りを通り越して何か呆れてきたよ……

「はあ……」

精神的に辛くなり溜め息を付く

「むう、溜め息ばかりついてますと、幸せが逃げますよ？」

「良いよ、別に……」

「良くないですよ。良いですか？　幸せというのはですね、一人一人が持つ量は違いますが誰もが持ち合わせているもので人によって価値感も違うのです！　其れを逃がすって事は　　」

いきなり少女が語り始めた『幸せ理論』は途中から聞き流すことにした

ふと腕時計を見ると、現在8時半ってなって

「ってやばっ!？」

あと10分で遅刻になる

一応今まで無遅刻無欠席で通している身とすれば、その記録に傷が付くことになる

「どうしたのですか？」

「お願いだ、今すぐ元の世界に返してくれ」

「嫌なのです」

「はあ!？」

ツンツと顔を背ける少女

「元の世界に戻りたかったらボクと契約してください」

「はい？ 契約??」

「そうなのです」

さっきとは裏腹ににこやかに微笑む少女

「契約ってなんだよ!？」

内容を聞きだす

『契約』という言葉自体に違和感を覚える

「そもそもボクは只の人間ではありません。光の世界の人間です」

「光の世界？」

聞いたことがない……

「はい、この世には『現実世界』、『光の世界』そして今居る『闇の世界』があるのですよ。今まで貴方が居た世界は『現実世界』でした」

成る程って……『でした?』何で過去形??

「実は貴方が『闇の世界』に居るって事がちよつとイレギュラーでして……困っているんですよね」

「僕がイレギュラーな存在? 一体どういう事??」

少し考える少女

「本来、世界は中立を保つために、『光の世界』『闇の世界』は『現実世界』を支えています。しかし最近、時々今回のように『闇の世界』の一部が『現実世界』に流れ込んでしまうようになって……互いの世界に住む住民が流れ込んでしまった部分を刈り取る事にな

ったのです」

な、何か話が壮大になってきた様な気がするんだけど……

「住民と言っても『光の世界』と『闇の世界』にはそれぞれ10人しか居ません。そして住民達は元々は人間でした」

「人間が……？」

住民に？ どうして……

「昔、死ぬ直前にまだ生きたいと願った霊能力者が住民になるみたいです。対の方々は特に……」

対の方々って双子の事？

昔は双子って『忌み子』って言われていたからかなあ？

でも、少女の言っていたことが本当だとすると……少女も死ぬ直前に生きたいって願ったのかな？

こんな女の子が『光の世界』の『住民』に……

「……貴方の思っていることは大体当たっています。ボクの姉……『アリス』はボクと一緒に『現実世界』を旅立ち、『闇の世界』の『住民』になりました。それ以降は時々会って話をしていたんです。二年くらい前までは」

『二年くらい前』

その言葉に僕はドキリとする

二年くらい前……いや、僕が中学三年生の時はちょっと色々あって、
其れが理由でこの世に興味があまり無くなってしまったのだ

まさか

「あの、何か考えているところ悪いんですけど、話を進めても良い
ですか？」

「あ、うん」

ニコリと微笑み、話を聞く

「二年くらい前の冬、何時も連絡がとれていたアリスと突然連絡が
とれなくなってしまう、『光の世界』のお偉いさんに頼んで、『闇
の世界』に行つたのです。すると『闇の世界』は跡形もなく消
え去っていました……『闇の住民』は一人として残つて居なくて……
アリスは何処にも居ませんでした」

「……………」

唯一の双子の片割れが居なくなつたとき、この子は一体どんな感情
で居たのだろうか

辛かったはずだ

何処を捜しても見付からない……それでも捜し続けて……だけど見

付からなくて……

「……後で一人だけ何とか生き延びていた闇の住民を見つけ問いただした所、何らかの力の影響で、『闇の世界』が分散されたと聞きました」

「世界が分散……」

「『闇の世界』は欠片となり、こうして『現実世界』に溶け込み始めていて……このままだと『現実世界』は闇に飲まれてしまうのです」

世界を分散させるほどの力……其れは一体何処から来たのだろうか

それさえ分かれば、きっと何かが分かる気がする……

で、

「君の話は良く分かった。君自信、とても辛かったと思う……でも、其の話と『契約』は一体何の関係があるんだ？」

思った意見を率直に言う

「ボクが貴方と結びたいと思っている契約は大したものではありません。貴方の許可さえあれば平気ですから……むしろ、契約しないと貴方は……」

意味ありに呟く

「え？」

脳内に？マークしか浮かばない

「この際だから言いますが、貴方はもう……只の人間ではありません。我々『住民』と同じ特殊な力を持っているようです」

「……へ？」

少女の言っていることが良く分からない。特殊な力？ そんなの、凡人の僕には……

「力が無かったら、この世界に入れませんか……闇を視た辺りで『死んでいます』よ？」

「……はい？」

少女は『にぱーっ』と笑顔で言う……楽しそうに言われると凄く怖いんだけど……

「貴方の力の能力は今のところどういうものなのかは分かりませんが、鍛えればなんとかありますね 後は……ボクがサポートしましょう。」

「ちよっ、ちよっと待ってー!!」

「？ どうかしました？」

不思議そうに僕を見る

「その……契約しないと僕は……」

「ずっと力が覚醒しない限り、此処から出られません。力が覚醒しても力を制御出来なければ……自分の力に飲み込まれ死にます」

「……………」

もう言葉が出ない

ついさっきまで普通の高校生活を送っていたのに……勝手に巻き込まれてしまった

何で僕ばかりこんな目に……

「はぁ……………」

「さっきも言いましたけど溜め息は」

ガシツと僕は少女の肩を手をおき告げる

「少女よ、今だけは見逃してくれ。この状況について行けること自体、結構凄いだぞ」

「だから『少女』って言わないで下さいっ!!」

僕があまりにも『少女』と連呼するせいか少し涙眼になっていた

うるうるうるうる

少女は僕にうるうる目線を送る

「う、ごめん……君の名前分らないから……」

僕は俯きつつそう言う

駄目だ、うるうるした眼を直視したら危ない方向に走りそうだ

氷月杏・変態ではない……はず

「そうですね、自己紹介が遅れました。『少女』って連呼されるのはもう嫌なので、名前言いませう。ボクは雪代綾兎と言います」

「あ、僕は氷月杏。杏って呼んでくれれば良いよ」

少女……綾兎はうるうる目線を止め、自己紹介をしたからか少し落ち着きを取り戻した

「杏ですね。いい名前です……これからよろしくです」

「綾兎……此方こそよろしく」

「で、契約なんですか……ボクが詠唱するので、その後に……その……」

どうしたんだろう……綾兎の言葉の歯切れが良くない

「ボクに……く、口づけしてください」

「ああ、わかつ　　ってええっ!!」

「……あうう……」

僕が叫ぶなか、綾兎は顔を真っ赤にして俯く

「あ、綾兎……その……綾兎にキスをすれば此処から出られるの？」

口づけ「キスと言うことは分かっている

因みに僕、氷月杏は昔から恋愛感情が普通の人より乏しいらしく、ファーストキスさえもまだだ

恋愛に興味が無い訳じゃないけれど、好きという感情がよく分からない

両親は恋愛結婚では無かったということも関係してるのだろう……たぶん

思考を止め綾兎を見ると、真っ赤な顔をして『あうあう』呟いていた

『この子に僕のファーストキスを奪われるのか……』と女の子みたいなことを考えつつ、いかにも『口づけ位慣れてますよ』と態度で示そうかなと思う

その方が綾兎も僕に口づけしやすいだろう

……うん、なんか悲しくなってきたよ

僕の人生「巻き込まれ人生なのは昔からだから諦めはつくんだけど……なんだかなあ

「うーう、あうあうあう……あうう」

……うん、某な○頃にシリーズのオヤ○口様と、少女が合わさったようなキャラになってるよ

綾兎って魔女の仲間じゃないよねえ？

一種の超能力者なんだよね？

……何処かで魔女と友達になっている気がするのは僕の気のせいだよね？

……綾兎……恐ろしい子

「あつうーう……ふう、少し落ち着きました」

「そう……」

変なこと考えたのばれてないよね……？

ばれていないなら良い

「……杏、……流石に魔女の友達は居ませんよ？」

「だから勝手に心視しないで　　っ！！」

「むう、減るものじゃないし、良いじゃないですか」

「此れはプライバシーの侵害にあたるだろ、綾兎っ！！！」

裁判所に訴えたら勝てる自信があるよ

あ、でも綾兎は一種の超能力者だから難しいのかな？

「『……私の前に膝まずいて許しを乞いなさい、この駄犬がっ！！』」

「綾兎っ！！？」

「……これがアリスのボクに対する口調ですね。ちょっと真似してみました」

「……性格が歪んだ姉を持っているんだね……」

……あれ……？

何でだろう……溢れた何かで視界が歪んで綾兎がよく見えないや……
……うっ……

「杏っ！！……どうしたのですか？」

「綾兎……今までよく耐えたね。良い子だね」

あたまを撫で撫でしてやる

アリス……こんな可愛い妹に何てことを……

ぐいつと制服の袖で涙を拭い、改めて綾兎に向き直る

「綾兎……僕は覚悟が出来た。契約して良いよ」

ニコリと微笑み、そう伝える

アリス……見つけ次第、性格を直す必要があるなあ

「……そうですね。ボクも決心がつきました」

『そのまま目を閉じてください』と言われ、僕は瞳伏せる

「『……封印されし魂の力よ。今新たに力を構築せよ　我、契約者雪代綾兎により、力の構築を増幅させる　我の力の一部となれ　其の名は氷月杏　今、契約の口づけを交わす』」

ふわりと甘い香りが鼻を掠める

小声で『少ししゃがんでください』と言われ少しだけ膝を折ると、直ぐにやわらかいものが唇に触れた

「ん……………」

ドクンッ

綾兎の唇から注がれる力（？）が僕の体内を駆け巡る

身体中の血液が熱くなり、細胞が少しずつ変えられていく感覚がした

「ふ……………」

……うん、思った以上にキスが長いんだけど……空気何処から吸う

の？……やっぱり鼻から？ でもキスしてる間、鼻息が凄くなるのは嫌だなあ

そんなことを考えているうちに意識がふわふわして来た

血が熱を持ってるからのぼせたのかな……？

「……ふ……はあっ」

綾兎の唇が僕の唇から離れたとたん、全身の力が一気に抜けた

「『契約完了。此れより氷月杏は我が僕となる』」

そう綾兎が告げると、身体中の熱が引き、ふわふわした感覚が収まった

「杏……契約は終わりました。……大丈夫ですか？」

瞳を開くと綾兎が心配そうに顔を覗き込んでいた

「うん……ちょっとふらふらするけど……たぶん平気」

「そう……ですか」

ほっと胸を撫で下ろす綾兎

……契約が終わったということは、僕は完全に人間じゃなくなったんだ

仕方ないことなのかもしれない

でも、此処数年は退屈な日常に飽々してたんだ

だったら少し位サプライズがあつて、退屈しなくて済むだろう

「改めて、よろしくですよ杏」

「此方こそよろしくね、綾兎」

お互いに言葉を交わし、握手をしようと

ざざっ

「…………え？」

何故か綾兎は僕から離れていく

「杏…………すみません。ちょっと…………顔を直視出来ない…………」

「あ…………」

顔を直視出来ないのは此方もだ

「綾兎…………僕のファーストキスを奪ったんだから、責任を取ってくれるんだよね？」

「ふえっ？」

ニヤリと笑い、綾兎を見る
冗談半分で言ってる

「杏……それは無理ですよ……ボク男の子ですし」

少し俯き加減で綾兎は呟く

責任を取ってというのは冗談なのにな……でも、無理なのか

ちよつと残念

仕方ないよね……綾兎は双子の姉アリスが大事なんだし

それに 男の子だし……えっ？

ちよつと頭の中を整理する

今、綾兎は何て言った？

えっと……

『杏……それは無理ですよ……ボク男の子ですし……』

……え？ 男の……子？

だって目の前に居るのは黒髪でモノトーンの服を着ている少女……

顔をジーツと見つめる

声の高さが僕同様中性的の声質だから気付かなかったけど……喉仏がある

ってことは、綾兎って……本当に男の子？

氷月杏・ようやく理解

え……じゃあ、僕は男の子とキスを

「うわあああああ　　っ！！」

「杏っ！？」

「僕はホモじゃない　　っ！！」

頭を抱え、叫びながら走り出す僕

さつき綾兎に対して襲いそうな衝動があったし、何となく綾兎なら良いかと思ってキスしてた……かなり長めの……

……母さん、僕は人として重大な間違いを犯しました

……ファーストキスを知り合った変な男の子に同意の上で奪われま
した……うう……

えぐえぐと泣いていると、距離をとっていた綾兎が少しずつ近づいてきた

「杏……大丈夫ですか？」

「綾兎……僕のことは暫くほっといてくれ……」

もう綾兎の顔をまともに見えない……恥ずかしくて世界から消えた
いなという想いが巡る

「杏……大丈夫ですよ　いざとなったら、少　しだけ、受
け入れて上げます」

「……………遺書、書いて良いかな…………？」

溢れる涙を拭いながら、ごそごと靴からルーズリーフとペンケ―
スを取りだし、今の自分の想いを書き込もうと

「ていつ」

ビシッ

「あうつ」

綾兎にチョップされてしまった……痛い……

「全く……最近の男の子は心が弱いのです。それよりも杏……学校
に行かなくて良いんですか？」

「……………え？」

慌てて腕時計を見る

あれっ？　八時半のまんまだ

「途中で時間を止めました　まだ、間に合いますよ?」

「本当に……?」

もう少し早く能力を使ってほしかったよ
そしたら教室でゆっくり出来るのになあ

「皆勤目指しているのなら、早く行くですよ」

「綾兎、でも」

此処から出ないと僕は

『解杖』

「わっ!?!」

ブアツと舞い上がる白い光と共に、空間がガラスのように碎け、代
わりに何時もの桜並木の道が現れる

聖桜高校はもう目の前だった

「わあ……、ありがとう綾　あれっ?」

振り返ると、黒い少女　いや、綾兎と名乗る少年は居なかった

全く……自分勝手だなあと思うも、今までののは夢じゃないと実感する

鞆からルーズリーフが出てたから……

地面に落ちてた鞆と遺書を書くときに取り出したルーズリーフを拾う

「あ……」

よく見ると、まだ何も書いていなかったルーズリーフに短く言葉が綴られている

その言葉を書くために使われたであろう一本のシャーペンが、いつの間にか開いてたペンケースから転がり落ちた

短い文章に目を通す

小さく一言

『またすぐに会えますよ』

「勝手だなあ、もう……」

クスツと苦笑した後僕はルーズリーフを小さく折り畳んでペンケースと共に鞆の中に仕舞い、高校に向けて歩き出す

異空間にいたせいか、其れとも綾兎のおかげなのか……何時もよりほんの少しだけ世界が明るく見えた

綾兎のおかげもあり、僕は急いで校門を潜り、下駄箱で上履きに履き替える

僕の在籍している二年A組は五階建ての校舎の三階に位置するため、上り降りが大変なんだ

まあ、来年は二階になるので少しは楽だろう

大学のキャンパスが縮小したような形の高校なので其れなりに広い

校庭の隅に大きな講堂と築六十年の古い図書館がある

学校の敷地内は緑にあふれ、学校の校章にもなっている桜の樹が多い

カフェテラスや購買もあり、機能は其れなりに充実している

いじめも今のところ無いし……本当に平和な学校だ

運動部はあまり強くないけどね

学校にはそれぞれ寮もあり、二人で一部屋与えられるらしい

僕は、両親が仕事で殆んど家に居ないので、家の管理も含め自宅から通っている

部活に入っていない代わりに、図書館で書庫整理のアルバイトをしている

だからこそ、今考えると綾兎に構っている時間は殆んど無いんだけ

ど……そもそも綾兎『またすぐに会えますよ』ってメモを残して消えたけど、何時逢えるの？

突然空間から登場っていうのは出来るだけ避けたいんだけど……

そんなことを考えているうちに、階段を上りきり、教室の前に着いた

ガラスと扉を開けると、和やかな空気が流れ込んでくる

僕のクラスは常識人があんまり居ない気がするけど、一人一人が個性あふれるクラスだ

ちよつと行き過ぎている人も居るけど……

僕も前に説明した通り、顔と性格が中性的だから、小さい頃からよく『僕口調の女の子』と認識されることがあった

普通ならそういう場合、いじめとかに巻き込まれるのだろうけど、僕の場合はからかう人は居なかった

むしろ、男女問わず好かれて……その頃は今のような性格じゃなくて明るかったし、なんでも出来る良い子だった

今は少し歪……いや、物事に無関心なところがあるせいか、周りから『ツンデレ氷月』と呼ばれている

気にしてないから良いんだけどね

……うん、みんな僕の気持ちを少しは分かってほしいなあ

まともな呼び方にしてほしいです

「おう、氷月おはよー」

「あ、水無瀬おはよー。部活お疲れ様」

別の男子と話してた水無瀬が声をかけてきた

水無瀬は隣の家に住む幼なじみで、本名水無瀬十夜

サッカー部の期待のエースで二年部員の纏め役。次期部長だ

性格は明るいというかやたら僕にかまってくる

顔は中の上位……密かにファンクラブが有るとか

「ああ、今朝も頑張ったぜっ!!……って、杏……今朝は遅かったんだな」

「あ、ちょっと部屋の掃除してたら時間忘れて……」

あははと笑いを浮かべ、自分の席に移動する

そんなわけではない。平日は使い捨てのク○ツクルワ○パーで軽く床を掃除する位だ。休日にモップがけとか時間のかかる掃除をするし……

「一人だと大変だよな」

「そうだね」

ごめん水無瀬……本当のことは言っても信じてもらえないだろうし、

話して良い内容じゃないと思う

幼なじみに嘘は付きたくないけど、仕方ないよね？

「ああ、でも杏」

「え？」

名前を呼ばれ、思わず振り返る

「時々、俺ん家に飯食いに来いよ？ ま、お前の作る飯も旨いけどさ」

「……うん、分かった」

ここは素直に言っとくべきだろう

水無瀬のお母さんのご飯凄く美味しいし

自分で家事やってると凝るところは凝るけど、料理には特にこだわらないからなあ……僕

栄養バランスは気を使っているんだけどね

好き嫌いは特に無いし……辛いもの以外は

休みの日は本屋のバイト入れてるし……

「あ、そういえば杏、今日うちのクラスに転校生が来るらしいぜ？」

「転校生？　こんな時期に……？？」

「なんでも、家庭の都合で学校の寮に入るとか……」

水無瀬は新しい話題が好きだ。でも、この時期に転校生なんて……

ゾクッ

あ、あれ？　何か凄く嫌な予感が……

「水無瀬、転校生つてもしかして男の子？」

「さあ、其処までは……って杏？　珍しいな、お前が興味を持つなんて」

「そ、そうかな？」

ちょっとあせる。知り合いかもしれないなんて言えるわけないよ……ましてや相手が綾兎かも知れないけど、はつきりしている訳じゃないし……

「俺のイメージだと否って『何時も舞踏会では壁の花でいます』って感じだからな」

「その例えが理解できないんだけど……」

ジロツつと水無瀬を見る

『舞踏会の壁の花』って何時の時代だよ

「簡単に言えば『杏』杏って事だっ!!」

「もつと分からなくなってきた……もう良いや」

言ってることは何となく分かるんだけど、例えが悪い

そんなことをしている間にチャイムが鳴り、僕達は席に着いた

机の上に鞆を置き、中から教材とルーズリーフ・ペンケースを取り出し、机の中にしまう

綾兎が書き込んだルーズリーフは敢えて鞆の中にしまったままにしておいた

水無瀬とかに見付かるとややこしいしね

からかわれるのはなんか嫌だし……『面倒くさい事この上無し』だ

「はあ……」っと溜め息をつき、机に顔を伏せる

今日はこのまま寝ていようかなあ

朝の件といい、もう疲れたよ……

……あれ？　なんか何時もより静かだなあ

そう思い、隣の席を見る

何時もなら「おっはよーっ!」と言いながら僕に飛びつい……いや、抱きついてくる少女が居るのに……ああ……お疲れなのかあ

隣の席にはぐったりした少女が臥せっていた

少女の名は天宮睦月

よく僕をいじってくるキャラクター

十七歳という若さにしてライトノベルのイラストレーターの仕事をしているから、僕の尊敬する一人だ

ただ……仕事を片付けた翌日は今のように机に顔を伏せているときが多い

昨日も仕事に追われ、授業を早退していたから徹夜でやったのかなあ……南無

手をあわせ、深く祈りを捧げる

微かに隣から「うーっ」と言う唸り声が聞こえたが気のせいだろう

僕の席は窓際のため、日差しが入って心地いい

「嗚呼……今日もいい天気だなあ（棒読み）」

「いま、凄く棒読みで言ったよね。気持ちが悪くてないし……」

隣から声が聞こえ、振り向く

「あ……睦月起きたんだ。おはよー」

ふわりと微笑みを浮かべながら言う

「『おはよー』じゃないよっ!! 全く……」

「え? だって未だ朝じゃないか」

「そーいう意味じゃなくてっ!!」

何で怒っているんだ? 睦月

「むう……何がいけないんだよ」

そもそも、疲れて臥せていたんじゃないの? 睦月

其れに、僕が窓を向いて一言(棒読みで)言うのは何時もの事じゃないか

何を今さら……綾兎に会って、少し自分のキャラクターを忘れていたが、僕にとって『平凡な日常』はどうでも良いことだ

『平凡な日常』に興味を持たないのが僕の主義だし……

「……杏のバカ っ!!」

「何でそうなるっ!?!」

恐いっ 最近の突然キレる若者恐いよ!!

「だって杏、学校来るの遅かったんだもん……」

「それは、ちよつと色々あつて……」

「嘘だっ！！ 杏はそんなキャラじゃないでしょっ」

「ええ
」

突然僕のキャラクターを全否定されました

「じゃ、じゃあ睦月から見て僕って……」

「うーん、理想は背景がキラキラしてて、『お早う、マドモアゼル』
とか言ってる貴族みたいな
」

「却下
」

「えーっ、なんでよ」

「そんなの現実にといたら凄いつて……僕がそんなことするわけない
でしょう？」

「まあ、確かに……でもっ」

「頼むから自分の理想を押し付けしないで……そのキャラだけは出来ないから」

「うつ……分かったよお」

すぐそこ引き下がっていく睦月

やっと落ち着けるよ……

ガラッ

「おい、お前らさっさと席に着け　っ」

先生が教室に入ってきて、皆は席に戻る

「あー、聞ってる奴も居るだろうが、今日このクラスに転校生が来る。なんでも、私自身知らなかったことなのでちょっと焦ってるがスルーの方向で行くぞ　っ」

『其れで良いのっ！？（クラス全員）』

「ほれ、転校生さっさと入れ」

「……もう少し、配慮して欲しいです」

……うん、聞き覚えのある声だなあ。顔を伏せておこう

「自己紹介だ」

「もの凄くサバサバしているんですね……えっと、初めまして。雪代綾兎と言います。こう見えて一応男です。よろしくお願いします

」

教卓の方からほわほわとした空気が伝わってくる……うん、名前を其のまま言ってるあたりがすごく綾兎らしいけど……何で学校に？

そして何故僕のクラスに転校してきたんだ？

「杏　っ！！　可愛い子だよ　お持ち帰りしたいなあ」

「睦月……落ち着け」

隣で睦月を押さえつつ、少しだけ顔を上げる

綾兎の外見はさっきと違って、髪も普通の男の子の長さになってる……黒髪・黒瞳の男の子

制服をしつかり着込んでるし……何処から調達したんだろう？

バチッ

「うおっ」

「杏？　どうしたの??」

「な、なんでもないよ?」

ヤバイ……綾兎と目があつた

「えっと、雪代の席は……」

「先生、あの臥せているよく分からない男の子の隣が良いです。
丁度空いてますし……」

「げふっ」

「杏……さつきから一体どうしたのよ」

「だ、大丈夫だよ」

睦月にはそう言ったけど大丈夫ではない

綾兎め……絶対嫌がらせだよな……それによく分からない男の子って僕らしいし……

「氷月 雪代の面倒よろしく」

「……………」

先生の言葉をスルーし、顔を伏せたままにいる

綾兎なんて知るか

皆に弄られてしまえば良いんだ

「……………ほう、良い度胸しているなあ 氷月？」

恐い、先生からドス黒いオーラが伝わってくる

「うう………分かりました。その………えっと………雪代さんでしたっけ？ 一から叩き込んでみせますよ。この学校の心得ってやつを………」

此れを言ったときの僕の顔は凄くひきつっていたことだろう

「氷月くんですね。此れから宜しくです」

「……此方こそ宜しくね」

綾兎が空いていた後ろの席に座る

「『逃げられると思うなですよ』」

「うっ……」

綾兎からテレパシー（らしきもの）が伝わってきた

……もしかして綾兎ってストーカー？

「『杏……クラス全員の前でボクとキスしたことばらされたいですか？』」

「……スミマセンでした」

後ろの綾兎にしか聞こえないくらい小声で呟いた

こうして僕は雪代綾兎によって日常を大いに変えられることになるのであった

第一章〱始まりは日常から〱（後書き）

第2章に続きます

第二章　日常という名の非常

第二章　日常という名の非常

「　　というわけで、杏、明日付き合って」

「……却下」

雪代綾兎に出逢ってから一週間が経過し、綾兎がクラスにだいふ馴染んできた今日この頃

綾兎がやたら僕にベタベタするため自然に（というか無理やり？）何時もの水無瀬・睦月・僕のグループに綾兎が加わることとなった
光の世界の住民がどーたら言っていた綾兎は勉強やスポーツは普通の人位には出来るらしいく……（体育の時はあえて力を抑えているらしいけど……常人じゃないからなあ）

性格も猫かぶりと天然なところがあるため結構二人と馴染んでいる
綾兎は光の世界の偉い人をお願いして僕の居るこの私立聖桜高校に転校してきたらしい

寮生活なので少し安心したよ……

もし僕の家だったら普段ならいいけど両親が戻ってきたら説明しづらいし……

話は切り替え、今は昼休み。みんなと屋上でお昼を食べていたときに睦月が突然僕に言った

なんとなく嫌な予感がするので却下

「むう、杏ひどいよ」

ぷくーっと頬を小動物のように膨らます……小さい子がふて腐れた時のようだ

「この場合は睦月さんがいけないと思いますよ？ ちゃんと用件を言わないと……」

そう訂正しながら、コンビニのおにぎり（ツナマヨ）を食べる綾兎……お金は支給されてるらしい

いつの間にか睦月と名前呼びあう関係になっていた

綾兎自身、僕以外の人と接する場合には敬語を使っみたいだ……猫かぶりめ

でも、今の綾兎の意見は間違っていないため同意

「綾兎と同意見。用件によるけど……明日は本屋のバイトもあるし……」

バンッ

「バイトって午前中だけだよな？」

床に（屋上だから床で合っているか分からないけれど）勢いよく手を付き、身を乗り出して言う睦月……手、痛そう……

「うん……まあそうだけど」

確か土曜日は午前中しか入れてない

「あつ、馬鹿っ」

「え？」

水無瀬に指摘され戸惑う

え？、何で馬鹿って言われたの？

睦月を見ると凄くニンマリした顔で僕を見ていた

「そっかー、じゃあ午後は空いているんだよね」

「うっ！..」

水無瀬……君の言ったことが分かった気がする

睦月の頭の中では明日の午後は予定が無いだろうと思われている

明日の午後は掃除をして、久々に時間がかかる料理でも作ってみようと思っていたのに……

「じゃあ、決まりだね　バイト終わるまで待ってる」

「……どうしても？」

「どうしてもっー!!」

うわっ……断言されたよ

こついうのって断ると後が怖いんだよなあ

「……分かった。付き合ってあげるよ……で、何を買うの？」

「それは秘密」

「ええー」

「なによ『ええー』って。あ、綾兎くんも行くよね？」

「ふえ？」

五十センチメートル位あるだろうフランスパンのサンドイッチをかじりついていた綾兎に話の矛先が向く

綾兎の食欲は人外を超している気がするけど、二年A組は誰も気にかけない

変わったクラスだからなあ……担任の水城先生（女・二十八歳）も凄い人だし

過去に世界を救ったとか……冗談なのかよく分からないことばかり言うくせに、なんだかんだで人気がある

担当教科は体育（女子のほう）

放任主義な担任に揉まれたおかげでどんなことがあっても驚かなくなった僕のクラス……まともな一般人がほしいです

「えっと……ボクも御一緒に宜しいんですか？」

「うん」

睦月に笑顔で断言され、綾兎は考え込む

『杏、頑張れよ！』

『はあ……やれるだけやってみるよ』

水無瀬からのアイコンタクトを受け止め、少し楽になる……って、

『水無瀬は行かないの？』

自分で作ったお弁当の空揚げを食べながらアイコンタクトを送る

……あ、ちょっと油切れ悪いなあ……急いでだから、ちゃんと油切れてなかったんだ……うう

『俺か？ 付き合ってやりたいけれど明日は部活があるからなあ……』

『そっか……』

一方的にアイコンタクトを切り、睦月達の方に視線を向ける

明日、この二人と共に行動すると思うと気が滅入るよ……

「そうですね……予定もないですし、御一緒したいです」

嗚呼……精神がすり減る気がしてきた……

「本当に！？ 良かった！これで綾兎くんを××××出来る」

「あの……綾兎くんを 後が聞き取れなかったんですけど……」

「気にしなくて良いよ」

ムフフと笑顔と妄想を膨らましながらサンドイッチを食べる睦月

そして綾兎に死亡フラグが立った

うーん、睦月がやりたくなるのは分かるけれど×××××かー

綾兎……がんばっ！！

「杏……？ 何で同情の目線を送って来るんですか？」

「気のせいだよ」

視線を反らし、空を眺める

今日もいい天気だな……

「杏？ 杏もやるんだからね」

「慎んでお断りします」

食べ終わったお弁当箱を包みながらぺコリと頭を下げる

この件に関しては過去に何度も巻き込まれました

「……まあ良いか。今度二人でやってもらえば」

「絶対嫌だ」

「本当に何するんですかぁ……？」

全面否定する

綾兎がちよつと涙目で僕と睦月の顔を交互に見てきた

「綾兎……頑張るんだよ？ 応援してるから」

「なんか杏のキャラが変わっていますっ！！」

「……ふふっ」

「睦月は自重しようね」

謎の笑みを浮かべる睦月を押さえる……何を考えているかは大体分かるが伏せておこう

持ってきたペットボトル（中身はミネラルウォーター）の口を捻り、飲む

「なんだろ……杏っってお母さんみたいだな」

「うぐっ!？」

うつっ……おもわず噎せるところだった……って

「水無瀬、お母さんみたいって……」

「だってそうじゃないか。家事はできるし、仕切れるし。それに昔は」

「……『部長を務めたりして、みんなを纏めていた』から？」

言葉の続きを僕は言う

「ま、そうだな」

「……はあ……」

お母さんみたいとは、小学生のときによく女の子に言われることが多かった

他にも『お嫁さんにしたい』『ランキングで堂々と一位を取ったり……』

うん……あんまりいい思い出はないなあ

あ、部長をしてたつていうのは本当

それでも中学のときに『文芸部』の部長をしていました

部といっても、僕の学年は五人（うち二人は幽霊部員）しか居なかったから、部長になっても仕方がなかったし……

そう……あの頃はまだこんな性格じゃなくて、明るくて頑張りやな氷月杏で居られたんだよなあ

「違うよ、杏は『お母さん』じゃなくて『ツンデレ』なんだからあ」

プクツと頬を膨らませて訂正する睦月

あの……僕はツンデレじゃないんだけど……

キンコーンカーンコーン

「あ、お昼休み終わりだね。さっさと教室に戻ろっか」

「そうだね（ですね）（だな）」

持っていたミネラルウォーターをグイッと飲み、蓋を閉めてお弁当箱と一緒に鞆の中にしまう

「次は体育だから急ぐぞ　っ！！」

「『おーっ！』『』」

慌てつつも、何だかんだで盛り上がる僕達がいた

何時もと変わらない毎日……つまらないときもあるけれど其れなりに楽しんでいたのかもしれない

「……で、結局こうなるんだ」

土曜日

本来なら本屋のアルバイトの帰りに適当にぶらぶらして帰るんだけど……うん……約束の一時間前に女の子二人が僕の方をずっと見ていて……集中出来なかった（泣）

内一人は涙目で僕に視線を向けて何か訴えていたし……

おかげでブックカバー掛けるのに時間がかかって店長に怒られたよ

まあ、店長も睦月達に気付き『ああ……彼女が来てたら集中できないよなあ』って言うてたけど

別の店員さんは『可愛い顔して彼女持ちとは……どっちか紹介しろよっ』とか僕にうだうだ訴えてたけど……睦月は僕の彼女じゃないし、店員さんが少し（いやかなり）ウザかったのでさっさと仕事を

切り上げて着替えた（着替えたっていつでもエプロンを外しただけだが……）

「杏、お疲れ様っ」

「約束の一时间前に来たから吃驚したよ……で、綾兎は？」

何となく分かっているけど聞いてみる

睦月の隣で涙目になっている黒髪長髪の女の子が綾兎だろう

……うん、女の子にしか見えないよ（泣）

「杏……どうして教えてくれなかったんですか？ その……睦月さんが他人をコスプレ（今日は女装）させるのが特技（趣味）だったことを……」

いつぞやの時のように、うるうるとした視線を向けてくる綾兎

そんな綾兎の肩にポンツと手を置き慰めの一言

「綾兎……睦月とのコミュニケーションの最初の通過点が女装なんだよ……僕もやったし……」

「っ！？」

「（声を低めに）綾兎にもトラウマ作ってあげるよ……ふふっ」

「ひゅっ……」

おおっ、何時も僕を脅してくる綾兎が怯えてる

凄く気分が高揚するのは人間誰もが持つSの血だろうか

普通持つてるよね？ 隣では睦月がウズウズしてるし……

「今度は杏も一緒にやるんだからね」

「いやーだっ」

「スカートが短いです……足がすーすーします（泣）」

僕は白のブラウスに紺のネクタイ（さっき何故か睦月にリボンっぽく結び直された）、黒の布ベスト、黒のズボン……と黒が主で

綾兎は細かいレースが付いたブラウスにダークグレーのネクタイ、黒の布ベスト、ダークグレーのスカート（幸いなことに膝下）……

睦月は白のブラウスに紅のリボン、ダークグレーのベストに紅のスカート（ミニそして一部がリボンで編んである）という服装だ

昨日の放課後睦月に言われ、今日の僕達の格好は制服っぽくまとめられている

綾兎の服は睦月が知り合いに頼んで調達したようだ

僕の服も以前睦月に言われ無理やり買わされたものだし……シンプ
ルな色合いで生地もしっかりしてるから良いけれど……やっぱり一
種のコスプレの気がするのは僕だけじゃないらしく……

とりあえず、バイト先の本屋から出て商店街を歩くことになった

「杏はお昼食べた？」

「いや、まだだけど……」

僕の働いている本屋は朝の九時から始まり、土曜日は九時から午後
の一時までバイトを入れている

その為まだお昼ご飯を食べてない

「じゃあさ、新しく出来たクレープ屋さんに行こ？ わたし達も未
だからね」

「其れは構わないけれど、綾兎……クレープだけで平気？」

僕はあまり食べない方だから大丈夫だけど……

「ある程度は食べてきたので平気ですよ」

ニコリと微笑む綾兎

鞆の中から携帯栄養バランス食品が見えたのは気のせいにしておう

「それじゃ、クレープ屋さんに向けてれつつらGOーっ!!」

睦月の掛け声に僕と綾兎は戸惑う

十七歳でその掛け声は恥ずかしいです

でも言わないと睦月に悪いし……

「れつつら……」

取り敢えず二人同時に言ってみたら、振り返った睦月が『二人とも恥ずかしく無いの?』という視線を向けてきた……畜生

綾兎も隣で拳を強く握り、ワナワナと震えていた……女装させられた上に付き合ってたことを否定されたのだから当たり前の反応だと思うけど……

「ま、いいや」

『軽く流し(まし) たっ!! (僕・綾兎)』

「クレープ食べ終わったら、本屋と画材屋さんに付き合ってたね? あ、三人でプリクラも撮ろーっ」

ニコリと微笑み、ウキウキした様子で言う睦月

僕達は軽く同意し、睦月の後ろを歩く

『杏、天宮さんって凄い方なんですネ』

『僕も何時も言いくるめられるよ……凄いよね』

突然伝わってきた綾兎からのテレパシーに軽く答える

夜は仕事に没頭するから時々息抜きをさせないと睦月は自分の容

量を超してしまうときがある

授業中に仕事をしてて怒られないのは、先生方が睦月の才能を認めているからだろう

コスプレは嫌だけど、出来るだけ睦月を支えられたら良いと僕は思っている

其れが少しでも睦月の負担を軽くすることが出来るのなら……

『なんだかんだ言っ、杏は優しいですね』

『……其れは綾兎もだろ？』

少しずつ綾兎とも打ち解けてきた僕

主従関係がある気がするけれど、結構息が合う

……あの事をいつか綾兎に話せる日が来ると良いな

二年前に起きたあの事を……

もし彼の出来事が綾兎に関係するならば、辛くても伝えなければならぬだろう

「杏？　どうかしました？？」

僕が黙ったままなのを不思議に思っ、たらしい

「なんでもないよ」

「二人ともー、早く早くっ」

「あ、待って（下さい）っ！ー！」

睦月の後を慌てて追いかける僕たち

こうして買い物という名の息抜きは始まった

「疲れたね……」

「はい……」

「ごめんねー、直ぐに使わないんだったら郵送したんだけど……」

クレープを食べた後、本屋に行き、睦月が好きな作者の画集やBL
を買い込み（僕と綾兎は参考書と普通の小説を眺めてた）、画材屋
さんでカラーに使用する紙とインクを選び（僕達は見本の水彩色鉛
筆で試し描きして遊んでいた）、荷物の殆んどを僕達に持たせて今
に至る

まあ、今居る喫茶店でコーヒーを奢ってくれたから良しとするか

僕の隣では綾兎が『ジャンボパフェ・一時間で食べきったら無料
に挑戦してる』

食べはじめてから十分しか経っていないのに、半分は消えている…
…店員さん達が絶句してるよ

他のお客さんの視線も痛いし……

メニュー表に挟んであったチラシによると、本来ならファミリーサイズらしい

一人で食べきれたのは今まで三人位だそうで……

想像すると、軽くバケ プリンを超す量だ

食べきれなかった場合は五千円の支払い……当初『喫茶店で何でも奢るね』と言った睦月が青ざめていたし……まあ、今の調子ならなんとかなるか

ちなみに僕がコーヒーしか頼まなかったのは、睦月が可哀想だったからというのもある

でも、睦月の頼んだ『Wベリーのチーズケーキとバニラアイスのセツト』を少しもらっているし、お昼に食べたクレープが全部消化されてないから結構足りる

綾兎が蕩けそうな笑みでジャンボパフェを食べてるのを眺めると癒される

こんな細い身体によく入るなあ

「……なんか杏から妙な視線を感じるんですが……」

「いや、美味しくそうに食べるなあって思っ
て」

おどけてみせる

「……杏も食べます？」

パフェに乗っていたアイスとクリームをスプーンで掬って僕の目の前に差し出してくる

「僕は良いよ。其れに、綾兎が一人で食べきらないと無料にならないよ？」

「そうですか……凄く美味しいんですが仕方無いのです」

しゅんつと項垂れ、差し出したスプーンを自分の口に含む綾兎。よく考えたら、男同士で間接キスすることになるのかあ……食べなくて良かった

睦月のバニラアイスをスプーンで掬ってもらいつつ、コーヒーを啜る

睦月はケーキを食べながら、買ったBL小説（文庫本位の）を読み始めたので、僕も買った文庫本を読む

よく考えたら、本屋で働いているのに別の本屋の売り上げに貢献してしまった……店長にばれなきゃいいなあ

そして、十五分も経たないうちに綾兎がジャンボパフェを食べきり……今までで一番早く食べきったらしく、喫茶店のマスターさんから『糖分の妖精』という二つ名を付けられていた

「いやー、まさかこんな美少女が食べきるなんて思わなかったよ」

というマスターさんの言葉を綾兎は微笑みながら軽く受け流し、店内に飾るための写真を撮られていた

あ、慣れてきたな綾兎

「綾兎くんも食べ終わってたみたいだし、そろそろ出よっか」

読んでいた小説にブックマークを挟み、鞆の中にしまう睦月

綾兎の分が無料になったから僕と自分の分だけを支払う

喫茶店を出るともう夕方で、西日が眩しくて……

「じゃあ、プリクラ撮って帰ろうか」

「そうだね（ですね）」

睦月の意見に軽く同意し、ゲームセンターに向かった

初めて撮るプリクラに綾兎が戸惑っていたけど、僕と睦月がフオロ
ーしつつ無事に撮り終え、中をうろろろする

クレインゲームの辺りを眺めながら中を歩いていると、ふいに綾兎
が立ち止まった

「どうしたの？」

「杏……ボク此れが欲しいです」

綾兎が眺めてたのは白うさぎと黒うさぎ（女の子達の間で人気なキヤラクター）のぬいぐるみで、結構可愛かった

女装している綾兎にはもの凄く似合いそうだけど……

「綾兎……流石に其れは男の子にはちよつと……」

困りながらそう言つと、綾兎は寂しそうな顔をした

「……此れをアリスにあげたいんです。アリスは性格はアレですが可愛いものが好きなので……其れに、黒くてちよつと……えつと……ツンデレ？つばいうさぎさんがアリスに似てる……」

「……そうなんだ。じゃあ、取つてあげようか？」

こつ見えて、クレーンゲームは得意

昔よくやつたからなあ

「良いんですか？」

「うん」

小銭が無かつたため両替機で細かくし、綾兎の所まで戻る

最初は苦戦したけど、三回目で黒うさぎをゲット……！

「……白うさぎもいる?」

コクコクと頷く綾兎を横目で見つっ、白うさぎを狙っ

ういーん、ガシッ!!

「必殺　つかみ取り!!」

……なんか綾兎がぬいぐるみを取るときに横で掛け声を掛けるようになった……もしかしてハマった?

白うさぎは耳に付いていた飾りのリボンにクレーンの先が引っ掛かり、一回でゲットできた

下の取り出し口から二人とも取り出し、綾兎に手渡す

「はい、これでいい?」

「杏、ありがとうございます　でもお金……」

「良いよ。僕も久々にやって楽しめたから。あ、ラッピングしてもらっ
らう?」

「はい!」

ゲームセンターのレジ(らしき所)に行き、黒うさぎをラッピングしてもらっ

「綾兎……白うさぎは良いの?」

「これは自分用ですっ」

ぎゅっつと白うさぎを抱き締める綾兎

……そのしぐさがとっても可愛いんだけど、綾兎は男の子だからちょっと微妙

端から見ると黒髪長髪の美少女が白いうさぎのぬいぐるみを抱き締めているようにしか見えないからなあ……

ラッピングしたぬいぐるみを紙袋に入れてもらい、クレインゲームの所まで戻る

すると、睦月がむすーとした顔で僕達を見てきた

「どうしたの睦月？」

「……綾兎くんばかりズルい。私もぬいぐるみ欲しいっ！」

駄々をこねる様子がなんとも子供っぽい。どうやら僕達がぬいぐるみを取っている間、一人で回っていたらしい……気付いてあげなくて悪かったなあ

「はいはい、取ってあげるから。なにが良い」

「ねえねえ、其処の彼女達」

……ん？　なんか声がしたような……気のせいかな

「君たちだよ、君たち!!」

…… 全く、今時ゲームセンターでナンパしてる奴等が居るんだな
珍種じゃないか

声を掛けられてる方もなんか言っただけでいいのに……

大体こんな時間にゲームセンターに女の子だけで来る方もどうかしてるよ。危ないじゃないか…… 此れでヒョイヒョイと付いていつて、後で危ない目にあつて傷ついて……

「否…… あの人達、わたし達に声を掛けてるみたいだよ？」

「そう…… みたいですわね……」

「…… は？」

振り向き声の元を捜す

確かにチャラチャラした男組（三人）が此方を見て近くに寄ってきた…… 女の子達って僕らの事か…… ちよつと傷付いたよ僕

「彼女たち、一緒に遊ばない？ 丁度三人ずつだしね」

「…… 遠慮します」

僕は二人を引っ張り、ゲームセンターを出ようとする

「きゃあっ!!」

「睦月っ!？」

慌てて振り返ると、睦月が男の一人に捕まっていた

「睦月を放せっ!！」

「薄い茶髪の君、怒った顔も凄く可愛いんだねえ。一緒に遊ぼうよ」

ニタニタと笑う男達の顔が・声が気持ち悪い

『可愛い? 誰が? お前みたいなやつに言われたくないし……僕は男だ』と耳許で叫んでやりたい

でも、こいつ等は僕の事を『女の子』だと思ってる

だったら……

「分かりました。睦月を離して下さい。……代わりに私が遊んであげます」

男たちの一人の傍まで行き、そう告げる

「杏!？」

「……綾兎は睦月を連れて先に帰って?」

後ろにいた綾兎にそう告げ、男の一人から睦月を離す

「良い度胸していると思うけど、君だけっていうわけにはいかない

「んだよなあ」

「わっ！！」

「綾兎っ！！」

「あう……、離して下さいっ」

そう言いつつも綾兎は僕に鋭い視線を向けた

キン

『杏、今からコイツを振りほどきます。だからその間に睦月さんを
っ！！』

綾兎からのテレパシーを受信し、僕はコクリと頷く

「えいつ！！」

ガシッと相手の腕を掴み、片手を捻りあげる……うわっ、絶対痛そう

「痛てっ！！……何なんだよコイツ！？」

「お前女相手に何を うぐっ！！」

綾兎に男が向かう隙に僕の横に居た男に肘鉄し、睦月を助け出そうとする

「汚い手を離せっ!!」

ヒュッ

勢いよく振り上げた足が風を切り、相手の膝裏に当たる

体制が崩れた瞬間、睦月を僕の元へ引つ張り男から解放した

「杏!!」

「危ないから睦月は離れてっ!!」

震えながらもコクリと頷く睦月

僕は睦月を庇うように前に立つ

「お前ら一体なんなんだよ!? くっ、こうなったら!!」

「っ!!」

ガシッと二人の男に押さえ付けられる僕

力を入れるにも腕を圧迫されるように押さえ付けられているせいで
力が入らない

「このまま一人ずつやってやるよ。良い声で喘いでくれよっ」

「……其れはどっちでしょうね?」

確定に満ち溢れた声で言った途端、男の頭上から足が見えた

ニヤリと微笑む僕

『なんだ？』と言う男（注：僕にのし掛かっている方）

ゴリッ

「うつ！？」

後頭部に強烈な飛び蹴りを喰らった男は呻き声と共にドサツと倒れた
若干綾兎の飛び蹴りの衝撃を喰らった為、少しくラクラするけれど
男の下から動こうとする

もう一人の男が青ざめ、倒れた男をなんとか起こそうとする
だが完全に伸びきっているようで、びくともしない

最初に綾兎を相手にしていた男の方は綾兎が片付けたらしく、ガタ
ガタと震えながら踞っていた（一体何したんだよ綾兎……）

「さて……と」

倒れた男を起こそうとしている隙に僕は立ち上がり（押さえてた手
が放れたから動ける）、青ざめている男を見下ろす

「これ以上やるんですか？」

そう良い放った僕は口元は笑っていただろう。口元だけは……

「ヒッ!」

男は僕を見上げ、さらに顔を青くした

綾兎もニコリと顔に作り笑顔を浮かべて僕の隣に立つ

「殺るなら相手になりますけど……?」

背後に黒いオーラが見える

「う、うわああああっ!!」

仲間の二人を引きずりながら素早く逃げる男……情けないな

逃げてく男を僕たちは眺めつつ、身の危険が去ったことにホッとする

「杏……」

ギュッと僕の服の端を掴む睦月

その手は震えていて……危険な目にあっただ、不安だったんだろう

僕は睦月の頭を撫でつつ（身長があまり変わらないからちょっとやりづらい）慰める

「睦月……怖かったよね……ごめ」

「なんで……」

「え？」

睦月の呟きを聞き返す

震える身体から感じるのは恐怖よりも苛つきだ……えっ？　もしかして怒ってる??

「……なんでBLフラグ建てなかったのよっ!!」

「……は？」

BLフラグ……つまりボーイズラブフラグと叫んでいる睦月は端から見ると凄く痛い子だった　って

「睦月……なんで僕がアイツらにフラグ建てなきゃいけないんだっ
!!」

「杏……ツツコミどころが違いますよ……」

「うっ」

勢いに乗って言い返したけれど、綾兎の言葉で我に返る

だって下手したら虐げられていたかも知れないのに、緊張感がない
っていうか……僕をそんな風に見ていたのがちよつとやりきれなく
て……

店員さんとかがこっち見てる……さっきは見て見ぬフリをして誰一

人助けてくれなかったのに、今は睦月の発言を聞いて焦ってる

今日は色んなところで羞恥プレイに会っている気がするよ……はあ

「ゴメンゴメン。半分冗談だよ?」

「……半分本気だったんだね」

「うん」

額を押さえ頂垂れる僕

頭が痛くなってきた……

「でもね、杏と綾兎くんが守ってくれて信じてたから少ししか怖くなかったんだよ?」

「「……………」」

睦月は笑顔全開で僕たちに悪戯っぽく言った

くっ、そんな風に言われると照れるじゃないか……

隣を見ると綾兎も顔を赤くして俯いている

誉められたみたいになっているから、どうして良いか戸惑っているんだろう

「杏、もう暗くなってきたからぬいぐるみは今度ね？ 早く帰ろ

」

「あ、うん」

綾兎を引っ張りながら歩き始める

そして僕は綾兎と共に女子寮まで荷物を運び帰路へ向かった

帰る途中でスーパーに寄り、割引になった食材と冷凍食品・インスタント食品をこっそり買い込み家に向かう

今日の夕食は鍋焼きうどんだ

父さんは単身赴任、母さんは弁護士の会計事務所で働いている為殆んど帰って来ない

だから僕は一人暮らしと言ってもおかしくない状況だ

静かな方が落ち着くし、誰かが泊まりに来て両親に気兼ねしなくて済むから結構楽

……そういえば、最後に家族みんなで過ごしたのは二年前だった

あれ以来、家族みんなで居たこと無いのか……

僕自身は独占欲が殆んど無いからあまり気にしていない

でも……水無瀬の家に行ったときや、家族で買い物をしているところとかを見ると、少し……ほんの少しだけ寂しくなる

静寂な場所は時に人の心を蝕むというのは本当なのかもしれない

コンコンッ

「？」

窓からノックのような音がした

よくある展開では、隣の家の子が屋根を伝って来たり窓ガラスに小石をぶつけて人を呼んだりするけど……

十八階建てのマンションの十六階に住んでる僕の部屋では有り得ないことだ

『風かな?』と思い視線を台所に戻し、袋の中から材料を取りだし使わないものは冷蔵庫に入れる

コンコンコンッ

……うん、気のせい気のせい

今日は色々あったから自分の思ってる以上に疲れてて、聞こえるのはきつと幻聴

ピンポン

……なんだろうこれ、明らか嫌がらせだね……

冷蔵庫を閉めて立ち上がり、玄関に向かう

「……………今行きます」

ちよつとなげやり気味に玄関に向かって言う

ガチャッ

「お待たせしてすみま　あ、水無瀬か」

「その言い方酷くないか？」

宅配便とかかと思ひ扉を開けたら水無瀬が居た

「はあ……………」

「其処で溜め息付くなよっ！！」

制服を着ているから学校帰りなのだろう。部活が有るって言うていたし

「ゴメンゴメン、ちょっと疲れてて……部活お疲れ様です」

「ああ、ありがとう……って、杏もお疲れ様だよ。彼の二人に振り回されたんだから」

「あはは……で、何の用？」

水無瀬がここに来るときは大抵勉強教えあう時か結依さん（水無瀬のお母さん）の

「『これ良かったら食べて感想を聞かせて』だと」

水無瀬は持っていた紙袋を僕に渡す

中にはタッパが二つ入っていた

「『いつもありがとうございます。助かります』って伝えといてもらえるかな？」

「分かった。中身は肉じゃがと手作りワッフルサンドだと」

「容器は明日返すから……相変わらず組み合わせが凄いよね」

「料理本を適当に開いて決めてるからなあ。俺の夕食は肉じゃがとビーフシチューだしな」

はあ……と溜め息を付く水無瀬

陸さん（水無瀬のお父さん）も大変だよなあ。仕事から帰ってきた

ら、和洋コラボで置いてあったり……

「杏の夕飯は何だ？」

「……鍋焼うどん」

唐突に言われ、戸惑いつつも答える

「良いな、だったら俺の分も作っ」

ガチャッ

「桃く〜ん、一体どういうことかしら？」

ビクッ

「お、おふくろ……いや、結依さん」

冷や汗をかき、青ざめた顔で振り向く水無瀬

そして隣から出てきた結依さんを見て固まった

ニコリと微笑む結依さん。女の人らしいふわふわした印象の方だ……
…背後のオーラがドス黒い気がするのは気のせいだろうか

「痛たっ!？」

「ごめんね、うちの馬鹿息子が迷惑かけて」

ギョツと水無瀬の耳を引つ張りながら僕に言う

結依さんの隣で水無瀬が助けを求めてきた……此処は空気を讀んで見なかったことにしよう

「うふふつ、杏くん。良かったら此方で夕食食べない？ 多めに作ってあるの。肉じゃがとビーフシチュー」

空いているもう片方の手で僕の片手を掴む結依さん

「杏、一緒に食おうぜ。疲れているなら料理作るの大変だろ？」

「でも……なんか申し訳ないし……」

肉じゃがとビーフシチューというメニュー自体には文句はないんだけど……

「結依さん、水無瀬家第六条だ」

「『連行は無理矢理する』ね」

二人はお互いを見てコクリと頷き、水無瀬もガシツと僕の腕を掴むいつの間にか水無瀬の耳を摘まんでた結依さんの手は離れていた

「あ、あのちよつと……」

「問答無用」

「ついて来なさい」

『全くもう、強引なのは二人とも相変わらずだなあ』……まあ、たまには良いか

少しでもこの静寂から逃れることができるなら、何だって良いなっ
て思う……寂しいのはもう嫌だから

早く両親にも気付いてほしい

僕がどれだけ我慢しているのか……

殆んど諦めた人生だけど、少しだけ溜め込んだ気持ちを発散させて
も良いよね……？

非常識かも知れない日常が一番楽しいのかもしれないなあ

月曜日

日曜日は家事はバイトと両立させてなんとか片付け、久しぶりに充
実した休みを送れたと思う

水無瀬の家に行ったときに、翌日の夕飯に変更した鍋焼うどんの材
料を冷蔵庫に入れていないまま連れ出されたのはショックだったけ
どね

まあ、食品は無事だったから良かった

いつもどおりに家を出て学校に向かったんだけど……

「むっっ……」

「……………」

教室に入り水無瀬と睦月に声を掛け、席に座る

後ろを向き綾兎を見ると、凄くふて腐れていた……何があったんだろっ？

観察していると其れは僕に対してだけで……何かしたっけ？

「あの……綾兎……？」

「……杏なんて知りませんっ！！」

フィツと僕から顔を背ける綾兎

「うっ……」

何があったのか分からないまま戸惑い落ち込む僕

……やっぱり世の中は非常識で理不尽だと思うのは合っているのかな……

第三章　陰謀はささやかに加速して

第三章　陰謀はささやかに加速して

「…………むづ」

「はぁ…………」

昨日に引き続き、綾兎はまだふて腐れていた

何があったのか聞こうとしたら、僕を睨みながら『…………杏のバカヤローですっ！』とか言ってきたので僕も構う気力が失せ、少しほつところと思い現在に至る

何かした記憶はないんだけどなぁ…………僕は土曜日にコスプレっぽい格好をしていたのもあったせいかな女の子に思われてナンパされたことが結構シヨックだったし…………

「杏…………一体何したのよ？」

「さぁ…………僕も分からないんだよなぁ」

休み時間に睦月が小声で言ってきたのに対し、軽く答える

知ってたら対処できてるよ…………

はっきり言っところいう態度を取られるのは物凄く迷惑だけど、もし僕が知らない間に綾兎を傷付ける様なことをしていたら申し訳ないと思います

そして綾兎の不機嫌はずっと続き……結局、今日も原因が分からないまま時間が過ぎていった

『恋人達の倦怠期』

周りにはそう見えていたことだろう……

～放課後～

「氷月さん、これもお願いしまーす」

「あ、はい。分かりました」

図書室での週二日のアルバイトの中、返却された本を本棚に戻す

このアルバイトをして貰えるのはお金じゃなく、『優先貸し出し』と『卒論優先』という資格だ

私立ということもあるせいか、聖桜高校は高三の時に『卒論を書かなければ卒業できない』という決まりがあつて……三年間無遅刻無欠席・成績首席・一流大学への入学もしくは就職確定していたとしても、『卒論』を提出しなければ卒業は認められない

『卒論』っていつても、大学のように堅苦しいものではなくレポートなんだけど結構面倒くさい

テーマは自由なので文学作品について調べてまとめればいいやって

僕は考えてる

『文学を極める』が僕の唯一の目標だしね

『卒論優先』は委員会の仕事が少ないときは卒論を優先にして取り掛かっていいですよということで、『優先貸し出し』は卒論や課題に必要な資料を優先的に貸し出し（上手くすると取り寄せ）してくれる制度だ

休日働いている身としては助かります（凄く）

本当は働かなくても両親が毎月お金（生活費）を送ってくるから、休日のアルバイトは必要無いんだけど……学費と家賃、交通費・光熱費とかは払ってもらってるからなあ

だけど両親には出来るだけ頼りたくないし、大学の入学費とかを自分で貯めたいと思っている

今の僕に出来ることは其れ位だろうから……

備え付けの梯子に上り、返却された本を棚に戻していく

本の貸し出しをやっていると、その人が何が趣味おもしろいことが分かってくるから面白い

人間観察が特技（趣味？）の人の気持ちが分かってくる

……そういえば、土曜日の夜に窓から聞こえたノックのような音は一体何だったのだろう？

水無瀬に聞いたら『其れ、俺じゃないぞ?』って言っていたし……綾兎と契約して、靈的なものでも感じるようになったのだろうか

まあ、今の綾兎の状態じゃ聞くに聞けないけどね

……はあ……

本を棚に戻すついでに整理をしていると、色々なことを考えてしまうふと、指先が止まった

「? なんだろ……此れ……」

其処には背表紙に何も書いていない、真っ白な本があった

詩集か何かかと思い、本を引き抜く

手にとってみると、見た目は普通の本のようだ……表・裏表紙にも何も書かれていない

「……少し気になるし……後で借りてみようかな」

何時もならあまり変わったものには関わらないようにしているのに、綾兎の件といい……最近自ら首を突っ込んでいつてる気がする

僕も少しずつ変わってきているのだろうか

手に取った本を見て少しだけ思う

『これが魔導書だったら良いな』と……

なんて

「僕は現実逃避者か」

小声で自分にツツコミ、自己嫌悪に陥る

取り敢えず綾兎の件から先に何とかしないとなあ……はあ……

〈同刻・二年A組〉

「さあ、取り敢えず話を聞かせてもらおうか」

「……睦月さんが恐いですっ……」

土曜日の夜（想定）から綾兎くんの機嫌がおかしいので話を聞こうと綾兎くんを呼び止めた

今日の仕事は特に無いし、イラストレーターをしているため部活には入ってないし……

綾兎くんは部活に入らない予定みたいだし

杏は図書室のアルバイトに行ったから此处には居ないし……何とな

く杏が原因の気がするのよね……

部活に行く人が多いため（運動部なんてあんまり強くないのに……）
教室には生徒が殆んど居ない

昨日パソコンからコピーした小説の原稿を赤ペンでチェックしながら綾兎くんの話聞く

暫く沈黙が続き、やっと綾兎くんが口を開いた

「睦月さん……杏には言わないで下さいね？」

おおっ、やっぱり杏関連のことなんだ

「うん、言わないよ」

私はニコリと微笑み、話を聞く

「えつとですね、土曜日に杏の家に行っただんですけど、杏が気付いてくれなくて……何度もノックしたのに……そのあと、水無瀬さんが杏の家に来て、杏は水無瀬さんに付いていつてしまったんです。ボクには気付かないフリをして……酷いと思いませんっ!？」

始めは小さかった声が込み上げる怒りのせいだ段々大きくなり、勢いに乗ってダンツと机を叩く綾兎くん

机をおもいつき叩いた手が凄く痛そうだった

「確かに其れは杏が酷いと思うけれど……」

でも、杏だったら絶対に気付くはずだ

「だけど……綾兎くんの言っていることも嘘ではないだろうし……うーん、でも……」

「あんなに窓をノックしたのに……杏は最低ですっ！！」

「ムキィーッ！！」って怒りながら地団駄を踏んでいる綾兎くんを軽く受け流しつつ　え？

「……え？　窓？？」

あれ？　杏の家って確か……

「綾兎くん……扉にノックしたんじゃないの？」

「窓……ですけど……？」

綾兎くんが何でこんな質問を？　っていう顔で此方を見てくる

私は……思っていることをありのままに話した

「だって杏の家って……十八階建てマンションの十六階でしょ？　どうやってノックするのよ」

「あ……」

『しまったっ！！』というように、みるみるうちに青ざめた表情に

なる綾兎くん

でも……私は分かるの

綾兎くんにとって其れは可能なことなんだって

「綾兎くん……今言ったことは嘘じゃないでしょう？」

「っ！？」

ビクッと子猫の尻尾を踏みつけた時みたいな反応をする綾兎くん。
その反応がちよっと『可愛いな』って思った

綾兎くんが転校生として教室に入ってきたときから感じていた違和感
其れが何なのか探るために私は言葉を紡ぐ

「だって綾兎くんは」

ガラッ

「……えっと……二人とも、未だ残って居たの？」

「「え？」」

綾兎さんと扉の方を向く

すると気まずそうに立ち尽くす……氷月杏が居た

（杏視点）

職員会議で司書の先生が職員室に呼び出されたため早めにアルバイトも終わり、謎の白い本を借りようと本を開く。一番後ろのページに挟んである貸し出しカード（栞状のもの。ラミネート加工してある）を取り出そうとしたら挟まってなくて……仕方無いので無断で借りることにした（無断で借りるのは気が引けたけど仕方無いか……）

本を鞆の中にしまおうとして、教室に課題を忘れたことに気付いたから課題を取りに教室に向かったんだけど……

図書館は校舎を出て少し歩いた森（みたいに沢山樹が生えている）の中に在るため、教室までは遠い

だから校舎に入って三階まで行き、一番端のクラスに行くのは結構大変だ

其れでも教室に忘れた課題は明日までの期日だから、いやでも教室まで行くしかなくて……

「……？」

何時もなら怖いくらいに静かな三階が、ピリピリとした空気になってる……何かあったのだろうか

そんな空気の中をてくてくと歩き、A組の前に着く

クラスに誰か居るようなので様子を

「……で、杏の家に行っただんですけど、杏が気付いてくれなくて……
……何度もノックしたのに……そのあと、水無瀬さんが杏の家に来て、
杏は水無瀬さんに付いていってしまっただんです」

あ、綾兎が居るのか……ん？ 何か怒ってるような……

内容を聞く限り、土曜日の夜のノック音は綾兎だったみたいなんだ
けど……霊関係や怪奇現象かと思っていたからちよつと残念

綾兎の怒っている原因が分かりそうなのでそのまま聞くことにする

「ボクには気付かないフリをして……酷いと思いませんっ!？」

ダンッ!!

うわっ!？ 綾兎がキレた

凄い音がしたけれど机壊れてないだろうか……

「確かに其れは杏が酷いと思うけれど……」

ん？ もしかして睦月が居るのかな

綾兎の話を軽く受け流してくれてるなら良いんだけど……

扉を開ければ済むことだけど、綾兎と喧嘩（一方的）をしているため中に入りづらい

「あんなに窓をノックしたのに……杏は最低ですっ！！」

「……………え？ 窓？？」

あ……綾兎が墓穴を掘った

僕みたいに契約してたり、超能力者でもない限り分からないのに……

背中に冷や汗をかきつつ、会話を聞き続ける

「綾兎くん……扉にノックしたんじゃないの？」

「窓……ですけど？」

嗚呼……睦月が痛いところを突いてくるよ……

「だって杏の家って……十八階建てマンションの十六階でしょ？
どうやってノックするのよ」

「あ……………」

睦月……うん、正解だよ

自称高所恐怖症のくせに、高いところに住んでるよ……僕

そして顔は見えないけれど扉の先では綾兎が顔を青ざめていることだろう

「綾兎くん……今言ったことは嘘じゃないでしょう?」

「っ!?!」

扉に手を掛け、開ける準備をする

さて、そろそろ綾兎を助けに行くか　　って……え?

「だって綾兎くんは　　」

睦月の言葉の続きが気になったけれど、扉を開ける手の勢いは止まることなく……

ガラッ

「……えっと……二人とも、未だ残って居たの?」

「「え?」」

無理矢理ごまかしてみたけど、たぶん話を聞いてたのはバレたかもしれない

二人は勢いよく僕の方を向く

僕は気まずそうに立ち尽くす

二人の視線がぶつかるこの場所は凄く居づらかった

「で、杏はどうして教室に？」

教室から寮に向かう分かれ道までの間、不意に睦月が聞いてきた

「明日までの課題を忘れて取りに来たんだ」

事情を有りのままに話し、てくてくと歩く

「うわー、そういう所は真面目だよね」

「其れは言っな」

綾兎が黙っているので僕と睦月だけで話す

思った通り、課題は机の中に入っていた

帰ったらやらないとなあ……

氷月杏・やることはちゃんとやります

勉強は将来の為に役立つことだし、課題は僕の好きな現代文だしね

中学の時に文芸部に入部していたので、自然に文学が好きになった。睦月と初めて出逢ったのは中学二年の小説投稿の時だった……

睦月自身、僕の書く話に興味があり、僕もまた睦月の書く話は好きだった

だから中三の時の小説投稿の時、ぐだぐだな話を書いた僕を睦月は泣きながら怒った

「どうして……私以上に才能がある君が、何で賞を獲れなかったの……？ 私は全力を尽くして君に並べるような作品を考えたのに……何でっ、なんでこんな作品を出したのよっ！！」

僕の胸ぐらを掴み、瞳に涙を一杯溜めて訴えてきた睦月の手は震えていた

そんな睦月の瞳を見るのが怖くて……下を向いたまま睦月にだけ聞こえるように言った

「ゴメン……もう物語は書けないんだ。だから……」

パンッ

耳許で乾いた音がし、じわじわと痛みと共に頬が熱くなった

「才能を持っていて、書かないなんて最低だよっ！！」

睦月の表情は驚きと哀しみに染まっていた

「…………ごめんなさい」

僕はそう呟き、会場を去っていった

睦月は僕と張り合うために書いた小説で最優秀賞を取り、小説家になった

イラストレーターとしての仕事を始めたのは高校に入学してからだけど、『よく身体が持つな』って思う時がある

小説を書くには膨大な知識と想像力が必要だから小説家になったというだけでも凄いのに、イラストレーターとしても活躍しているから本当に感心するんだ

僕自身、小説は今でも書きたいと思うことはある

だけど、当時はあった想像力が今は殆んど残ってなくて…………なかなか難しいみたいだ

「話は変わるんだけど杏、此れから何か予定ある？」

「え…………無いけど？」

アルバイトも終わったし…………用事と言っても、夕食の買い物と課題ぐらいだろうか

「だったら私の部屋に来ない？」

にこりと微笑み、僕の腕を引っ張る睦月

そんな睦月に有りのままに思ったことを一言

「……其れって違い引き？」

「はうつ！？」

顔を一気に真っ赤にし、茹でダコのようになる

照れると耳まで真っ赤になるから面白いよなあ……僕の癒しの一つ
にしておこう

「……で、用は何？」

「いつぞやに聞いたシチュエーションですね……」

さっきまで黙っていた綾兎が口を挟む

「えっとね、小説の見直しに付き合ってほしくて……」

ちよつと考えていたことを読まれたようでドキッとした

まあ、見直しは何時ものことなので構わないし、睦月の新作が読めるのならむしろ大歓迎だ

「良いよ」

「本当に！？ 杏に見てもらうつややこしい文章の部分が改善されるから助かるよ」

爛々とした瞳で僕を見つめてくる

「……………」

……うん？ 隣から凄く強い視線を感じるんだけど……

「綾兎はどうする？ …… って、見てるだけじゃつまらないかも知れないけれど……」

さっきの勢いに対し、何処か寂しげな綾兎は何か考え事をしていた

「………… ボクはやらなきゃいけないことがあるので良いです。二人の邪魔をしちゃいけないですね」

「やらなきゃいけないことって？」

「………… それは秘密です」

なんだろう……もしかして綾兎……遠慮した？

気を使わせたちゃったならなんか申し訳ないな……

暫く歩いているうちに寮と学校外との分かれ道に着き、僕は睦月の部屋がある女子寮に向かう

綾兎は街に行くらしい

「じゃあ杏、睦月さん。また明日です」

「気を付けてね、綾兔」

僕達にペコリと頭を下げ街へ向かう綾兔を見送り、睦月の後を追う

私立聖桜学校の寮は、一人一部屋か二人部屋になるのが普通で、睦月は仕事をしていることもあり、二人部屋を一人で使用している

片方の部屋に資料を置いたり、編集さんとの打ち合わせをしたり……仮眠室にしたりする

イラストレーションや小説執筆が追われて修羅場になったときに寮長に特別に許可を貰って停まりに行ったことがあって……とにかく寮の施設は凄かった

図書館同様に趣のある外見に、セキュリティ万全のカード式の鍵。部屋はオートロックで1LK。キッチンは最新型の機能を持ち、食事は自分で作ってもよし・食堂で食べてもよしで、自分で料理する場合、殆どどの食材は注文すれば届くし、食堂ではバイキング形式の食事が用意してあるから言うことなしだ

お風呂も各部屋にユニットバスは付いてるし、大浴場はあるし……私立だからこそなのか凄いなと思う

そのわりには学費はそんなに高くなかったと思うんだけど……やっぱりこの高校には謎が多いよ……

前に図書委員の先輩が言ってた『聖桜高校七不思議』もありそうで無いものだったし……

「そつえば、睦月は今どんな小説を書いてる途中なの？」

僕でよければアドバイスしたいのと、なんとなく話の内容によってはちょこつと高校の事を書き込んでみても悪くないと思うんだけど

……

「えつとね、後で読んでもらうけど学園ものかな。恋愛とか友情とかを練り込んでいるんだけどなかなか上手く行かなくて困ってたの」

あははと苦笑を浮かべる睦月

友情ものは未だしも恋愛ものかつて、そこそこ経験がないと書きづらいよね

「ん？ 恋愛もの書けるんじゃない、もしかして睦月は経験あるの？」

「えっ！！」

僕の問いに対し、ブアツとさっきよりも顔を紅潮させる

その反応が初々しくて可愛いなっと思った

普段は突拍子もない行動ばかりするからあまり考えたことはなかったけど、睦月は僕とはまた違った意味で同性・異性から好意（同性の場合は友達としてのかな）を寄せられる

美少女で小説家とイラストレーター、それ以外は詳しくは知らないけど何かあった気がするんだよね

一体なんだったつけ……？

「杏、そろそろ着くよ」

「あ、うん」

歩いているうちに道が開けていき、寮が見えてきた

男子寮は綾兎と別れた道を少し逸れて歩いていくとある

どちらの寮も結構学校から離れているけれど、離れている分だけ性関係の問題は起きにくいみたいだ

睦月の後を付いていき、寮の中に入る

女子寮に入るのはなんとなく抵抗があるものの、仕方ないよね

ふと、背後に違和感を感じ

ガバッ

「杏くんだ、やつほい」

「か、閑咲さん！？」
かんざき

「あ、ミユ、ただいま」

ギョウツと背後から僕を抱き締める閑崎観柚さん
かんざきみゆう

今回は部屋じゃなく寮の廊下で抱きついてきたため、周りからの視線が痛い

「あの……そろそろ放してもらえ」

「杏くんって意外にやらしーねえ」

「っ!!」

カアツと自分の顔が紅潮したのが分かった

いや、その……胸が背中にあたっていたら誰だって……

「まあ、杏くんだったら良いやつ」

「良いんだ……」

僕だから未だしも……他の男子に言ったら大変なことになるよ……

「で、今日はなんの用かなあ？」

にぱーっととびきりの笑顔で聞く閑崎さん……なんか何時も以上に語尾に違和感があるんだけど……

「私の小説を見てもらう所なのよ」

ちよつと苦笑気味に言う睦月

何時も振り回されているもんなあ

「ふうん、そうなんだあ……これからえっちいことでもするのかと……」

「しないわよっ（しないよっ）！！」

前言撤回、振り回されてるのは僕もだった

「でも、二人つきりってねえ……よしっ！！」

「「え？」」

少し考えるようなそぶりを見せ、キラキラと輝いた視線を向けてくる閑崎さん

「観柚もいくっ！！」

「「……………え」」

勢いに乗り宣言された言葉に僕と睦月は固まる

「とりあえず睦月ちゃんの部屋をガーって漁って、いろいろ発掘するっ！！」

「それは困るよっ！！」

『只でさえ酷い有り様なのに、荒らされたりしたら資料が流れ落ちてくる（泣）』と顔に書いてあるのが分かった

「観柚が漁ってる効果音の中、二人はえっちい事でもしてればいい

と思うにや」

「だからしませんって!!」

何時も以上に僕の扱いが酷かった……えっちいことなんてしないよ
っ……多分

「んー？ 最近杏くんちよつと生意気だよねえ……観柚の言うことが聞けないのぉ？」

「閑崎さん……？」

な、なんか閑崎さんの行動が、正月に親戚の家に行ったときの従姉妹のお姉さんの感じに似てる

「杏……ミユが酔ってる」

「えっ!？」

確かにこの状況は酔ったお姉さんの絡み酒に似ているけれど……

でも、未成年でお酒は買えないはずだ

「杏、違うのよ……ミユは……」

「ういゝひつくっ。睦月ちゃん、観柚にもつと炭酸をちょーらい」

「ミユまた私のジンジャーエールを勝手に飲んだの!？」

僕への言葉を遮り、閑崎さんに怒鳴る睦月

閑崎さんの言動により、睦月の言いたかったことがなんとなく理解できた

今どき……現実で炭酸飲料を飲んで酔っ払う人が存在するなんて思いませんでした

「ほらっ!! 杏くんもググッと!!」

僕の胸に炭酸飲料を押し付けてくる

「閑崎さん、僕炭酸は苦手　ってペットボトル振らないで下さいっ!!」

ブンブン振り回し、パンパンに膨れ上がったニリットルのペットボトルを僕と睦月に向ける閑崎さん

口元が「今までのお返しだよっ　」っていう感じに歪んでいた

「いっくよっ　うりゃっ　」

バシャアアッ

「「……………（イラッ）」」

「アハハッ、二人ともびしょびしょ　『炭酸も滴る良いコンビ』だね」

ジンジャーエールのシャワーをもろに被り、制服もろともがぐしょ濡れになった

廊下にはジンジャーエールの水溜まりができ、その上に僕たちはただ無言で立ちつくす

睦月とアイコンタクトをとり、お互いの考えを同意するかのように頷き合い……………同時に言い放つ

「「ミユ（閑崎さん）……………」」

「ん？」

「其処に座りなさいっ（座れっ）！…！」

……………言葉攻めの幕開けだった

「…………で、どう？」

酔った閑崎さんを叱り、同室の女の子に無理矢理連れ去ってもらった……連れ去っていった女の子が『観柚を調教し直さないとね……フフッ』と言っていたことは早めに脳内から抹消しようと思います
おもいつきり炭酸を被ったので、睦月にシャワーを借りて、以前着させられたコスプレの服を着て現在に至る（服はシンプルなスーツっぽい。メイド服を差し出され全力で拒否した結果そうなった）椅子に座って、ペラペラとコピーされた原稿の束を捲り、赤ペンで気になるところを直していく

『どうしてっ！！ どうして君はド （後半自主規制）』

……ふむ、ここの文章の流れがちょっと……僕だったらもう少しこう……

『ねえ日向っ！！ どうして君は変た （後半自主規制）』

……文章がちょっとアレだが、こんなもんだろう

ちよこちよこ直していくと、隣の部屋でイラストのペン入れをしていた睦月がおずおずと顔を出してきた

「ど、どうかな……？」

「……………」

直しているときに聞かれても困るため無言で返す。「うつ……」と頂垂れながら、心配そうに僕の手元を見てくる睦月

かなり訂正してしまったため、文章が読みづらくなってしまった部分が多いのが分かる

それでも、我慢しているのか僕に口出しはしてこない

暫くの沈黙の中、原稿を捲る音と僕が書き込んでいく音が止むまで睦月は僕の傍らに座っていた

そして

「睦月……文章が混乱してる部分があるんだけど、何かあった……？」

「っ」

書いてるときに文章の前後が逆になるのはよくあることだけど、ちよっと多すぎて凄く読みづらかった

「其れに、今回の話の主人公が結構……僕に似ているような気が……」

「うつ……」

無許可で自分に似ているキャラを使われたことは吃驚したけど、以前僕もやったことがあるため其処は未だ良い

だけど……

「後……この話って明らか……BL？」

「……うん、そうだね」

開き直ったっ！！

いや……ちょっと其れだけは……

なんだろう……前に睦月に無理矢理読まれた『純情ロ ンチカ』の主人公の気持ち理解できるよ……複雑すぎる

「いや、新しいジャンルに挑戦してみようと思って……BLって言っても未だ友情超えてないし」

「……相手が水無瀬の気がするのは気のせいだね？」

恐る恐る聞いてみると、

「そうだけど？」

「……はあ」

第二の被害者が居たよ……

（同時刻・水無瀬）

「くしゅんっ」

「キャプテン、どうしました？」

「いや……なんか悪寒がして……」

ブルツと身体を震わせる俺

凄く嫌な予感がしたが、気のせいだろうと自分に言い聞かせ、練習試合に向かった

「ふう、こんなもんな」

耐えに耐えてなんとか読破し、気になるところをチェックして説明してたら二時間も経過していた

「うん、前よりも良くなったと思う。ありがとね」

「ちゃんと編集者の人に相談してから直したいところを直すんだよ？」

「はあーい」

気になっていた悩みが解決したせいか、睦月の足取りは何時も以上に軽かった……後は編集者次第だろう

明日詳しく話し合つみたいで睦月は携帯電話を開き、ポチポチとメ

ールを打っていた

僕もそろそろ帰らないとなあ……

「睦月、もう遅いしそろそろ帰るね」

腕時計を見ると、今は夜八時位だ

これから夕飯を作るのも大変なので、久々にコンビニのスパゲッティでも食べようかと考えつつ、使った赤ペンをペンケースにしまい、鞆の中に入れる

ふと、鞆の中を漁っていた手が止まった

『……そういえば（勝手に）持ってきたんだっけ……』

綾兎に相談してみようと思って図書館から持ってきた白い本

すっかり聞くの忘れてたよ……

「そうだね、遅くまでごめんね？ 途中まで送っていくよ」

「あ、大丈夫だよ。睦月を危険な目に会わせたくないし……今日は晴れてるから、月明かりが綺麗だし」

にこりと作り笑いをして、その場をもたせる

睦月には内緒にしておこう……只の真っ白な本だし……

妙なことに巻き込みたくないしね

この本を見つけたときに今まで感じなかった違和感のようなものを感じた

何か引つ掛かるというか……其れは前に『闇の世界』の一部に出会ったときに感じた感覚に似ていて……

このことは綾兎と僕だけが巻き込まれていれば良いと思うんだ

未だ、自分に秘められている能力が何なのかは分からないけれど……
…そろそろ僕の出番かな

最近綾兎に対しての接し方が酷いように周りには見えるかも知れないけれど

其れは

『もう少し『雪代綾兎』という存在を知りたい』

という気持ちがあるからだと考えたいな

そついう考えを頭の片隅に置きながら鞆を持って睦月の部屋を出る

「じゃあ、気を付けてね」

「うん。また明日」

僕を見送る睦月にひらひらと手を振り、ガチャリと扉を閉める

廊下に居た寮の生徒数人が僕に対し興味と驚きの視線を向けてくるのをスルーして、寮母さんに頭を下げて女子寮を出た

外に出ると、満月の月明かりがとても綺麗で

そんな中

『……今頃綾兎は何をしているのかな』

と考える僕が居ただ

「杏は今頃どうしているんでしょう……？」

何度目かの溜め息を付き、街を歩く

最初はどの場所に何があるのかを知るための探索だったが、いつの間にか『飲食系巡りの旅』街編』になってしまった

「其れは別に構わないんですけど……うう……」

ちょっとした小路が気になって入ったまでは良いが、すっかり迷った……新ためて自分が方向音痴だと実感！！

「まあ、此れくらいなんとかなるんですけどね」

周りに誰も居ないことを確認し、『詞』を紡ぐ

『風華・アルセプス』

キーンという音と共に風が身体を包み込み、身体が宙に浮く

『空から見上げれば此処が何処か分かるでしょうか』

そんなことを考えつつ、意識を空に向ける

すると身体が一気に上昇し、二十階建てのマンション位の高さ迄浮いていた

ふつつと息を付き、身体を元に戻す

『解』

制服からシンプルなモノトーンの服に変え、紙を元の長さに戻す

身体つきをはつきり見なければ分からないだろうというくらい、自分の外見は『少年』より『少女』だ

其れは元からで、仕方ないことかもしれない

だってボクは……

『前世では『女の子』として生きていたから……』

大きな霊能力を持つ家系に『忌み子』として産まれたボクとアリス

時代的に片割れが殺されてもおかしくない状況

本来なら産まれて直ぐ殺されるはずだった

しかし、ボクらのときは十二歳という境のときまで同等の扱いを受け、大事にされながら不自由の無い時間を過ごした

お互いどちらかを亡くすという思いを常に感じながら

そして 十二歳を迎えた秋

アリスは膨大な霊能力を持ち、ボクは自然を操る『異端な力』を持っていた

『今までに無かった異端な力』は周りに恐怖と混乱を招く可能性があった

無くすには惜しい力……その為殺されることは無くなった

其の代わり、自由を封じられ……ボクは幽閉されることになった

其れでも、彼のときはアリスが傍に居たからやってこれた

だけど……今は何処に居るのかさえ分からない

ボクよりもアリスの方が能力が高いから、自ら能力を使って気配を消してるのだったら仕方がないことだ

だけど……

「早く逢いたいよ……アリス姉さん」

心に浮かんだ言葉を吐き出し、立ち尽くす

二年前にアリスが居なくなったときに気付いた

自分を支えてくれていたアリスの存在の大きさに

今でも自分にとってアリスが一番大切な存在で

其れに、新たに『氷月杏』という存在が占めてきたと思うようになった

スウツと顔を撫でる風を感じ、自分の気持ちを乗せるように……

どうかこの気持ちを大切なアリスに届けてくれますように……

満月が輝く満天な星空の中、まるで流れ星に祈るかのように瞳を閉じる

流れ星の代わりに溢れた雫が頬を伝った

第四章　白猫と黒鬼の行方は

　ある一室にて

真つ暗な部屋の中、窓から夜空を見上げる二つの影

満月の月明かりでシルエットだけが浮かび上がる

一人は寝具から身体を起こした状態で

もう一人は寝具の縁に座っている

二人は暫く視線を夜空に向けていた

まるで満月に想いを乗せるように……

やがて一人が口を開いた

「今頃彼奴はどうしているんだろうな……お前の大切な奴も」

「……どうだろうね」

身体を起こしている少女は中性的な声の持ち主にそう答える

「……」

二人の間に沈黙が続く

「……今日は此のまま此処に居るからなっ」

「『今日も』でしょう?」

『彼女』の偉そうな言い方に少女はちょっと訂正を入れ、ぎこちなく笑う

そんな少女を見て、『彼女』は寂しげに微笑んだ

「でも……どうして?」

「え?」

「どうして何時も傍に居てくれるの……?」

少女の疑問を受けた『彼女』……『アリス』は、少女の頭を撫でながらこう呟いた

「お前とワタシは似ているからなっ」と

少女は其の言葉に涙を浮かべつつ、また視線を夜空に向けた

アリスと共に眺めていた夜空を

流れ星が一つ、弧を描いて流れていった……………

第四章 白猫と黒兎の行方は

キンコンカンコンコン

チャイムが鳴り、授業が終わる

二年A組では、授業の空気がなくなった途端、一斉に騒がしくなる
其れは他のクラスもそうだろうけど、なんと言つか…………騒がしいレ
ベルを超してしまうときがある

時々、他学年や他のクラスから苦情が来るも、状態は変わることは
なく…………お陰で隣の二年B組からロイローゼ（鬱？）の人が出たり
するとか

うちのクラスって凄いな…………（色んな意味で）

そんな中、僕・氷月杏は重苦しい空気から解放されてホッとしていた
苦手な数学だったのでちょっと疲れたよ…………

隣の席の天宮睦月は、今の休み時間を利用して僕のノートを写して

いる

まあ、授業中に絵のベタ塗りをしていたら仕方ないんだけどね

「はぁ……です」

後ろを振り返ると溜め息らしい声を出していた綾兎が机に突っ伏していた

……次の時間、移動教室じゃなくて良かった

移動教室だったら……二人共（言うまでもなく睦月と綾兎）大変だったよ……

綾兎が顔を伏せているのは僕以上に数学が苦手なのと……昨日何かあつて考え事をしていたみたいで……

僕の方も、昨日見つけた謎の白い本は家に帰ってから読もうとしたんだけど、よく見ると小さい鍵が掛かっていて読めなかった

ちよつと残念……

「杏、ノートありがとう」

隣からスツとノートを渡され、僕は受け取る

「役に立ったなら良かった。……で、授業内容分かった？」

なんとなく聞いてみる。後ろでは綾兎が沈んでるし

「『天宮睦月に出来ないことなんて無いっ!!』……って断言したいところだけど……うう、全然分らないよ」（泣）」

「……あ、やっぱり？」

睦月も想像した通りでした

「だから、テスト前にまた教えてね」

にこやかな笑顔を僕に向けてそう言う睦月

仕方ない。また勉強会開くか

「はいはい。……綾兎も一緒にやろうね？」

「あう……お願いしますです」

後ろを振り返ったまま、沈んでる綾兎にそう言うと、消えそうな返事が返ってきた

綾兎達『光の住民』関係の人（？）も何年かは学校に行つて、ある程度の知識を入れるみたいで……綾兎の場合、丁度今が其の時期らしい

一般常識は在るものの、学力は無に等しいみたいで……

文学関係だつたら得意科目だからなんとかなるけどそれ以外はなあ

……

数学に関しては皆で勉強した方が覚えられるよね

その方が効率良いし、教えるのって自分の為にもなる

「綾兎くんっ、頑張ろうねっ!!」

「はいっ!!」

二人はお互いの手をがっちり握りあい、頷きあっている

う、うん？ 僕を挟んで同盟が結ばれてるよ……此れって良いことなんだよね？？ 二人に振り回されそうなのがするのは僕の気のせいだよ……？

そんな不安を胸に抱いていると、綾兎が僕の顔を覗き込んできた

「杏、そういえばですね」

「避けるっ!!」

「!!? (クラス全員)」

一斉に壁側に寄るクラスメイト一同（僕達含む）

其の瞬間

バシユッ!!

「っ!!!? (クラス全員)」

勢いよくカーブして黒板に刺さる……三角定規

一斉に振り返るクラスメイト一同

其処には

「いや、二日酔いの身に此の騒がしいのは毒だったからぶち壊してみた」

……担任の水城果鈴（二十八歳・独身）が仁王立ちになって扉の前に立っていた

「……………」

クラス全員からの冷たい視線が水城先生に向けられる

「な、なんだっ其の態度は！！」

クラスメイト一同は水城先生をスルーして、雑談に戻っていった

まあ……似たようなことを何度もやられていたら、慣れてくるか……

「あ……………」

行き場を無くした感情を何処かにぶつきたいけれど、何処にぶつけたら良いのか悩み始める水城先生

強気に宣言していたところはあるけれど、実は結構心が繊細らしい

ガラスのハート、ブレイクツ！！

そんな先生をほっというて、僕達も雑談を続ける

ええと……確か綾兎からだっけ？

其れを促すように綾兎に視線を向けると「ああ」と思い出したように話を始めた

「杏、そういえばですね。昨日街を散策していて美味しいパフェのあるお店を見つけたので、今度皆さんで行き」

「ゆきしろっ！！」

「ひうつ!？」

キュピーンツと水城先生が綾兎を視界に捕えた

チツ、せつかく和んできたのに……ぶち壊しやがって

「こいつ等はともかく、お前位は反論しろよ!!」

「っ!？」

「「（キレるところ其所なのかよ……）」」

水城先生の剣幕に驚いた綾兎

先生の原動に同じツツコミを心の中で入れるクラスメイト一同

「す、すみません。でもっ!!」

一度ペコリと頭を下げてから懇願するように水城先生を見る綾兎

「ほう……先生に反響するとはいい度胸だな。雪代……」

スツと目を細め、綾兎を見つめる水城先生

「其れに対しては敢えて無視しますっ」

「な……無視だと!? おのれ、ゆき」

綾兎の其の言葉は、水城先生の存在を軽く侮辱するものだった

怒りに身を震わせる水城先生はギロツと目付きを酷くした

まるで綾兎の存在を拒絶するかのよう

クラスメイト一同が黙り込む中で、二人の視線だけがぶつかり合う

そして、綾兎の言葉を待った

想いのままに口を開く綾兎

「……水城先生。三角定規は黒板に向けるものではなくて」

『（次の言葉、『授業で使うものです』を期待。byクラスメイト一同）』

「三角定規は 人を狙って投げるものですッ!」

「「「!?!?（水城先生及びクラスメイト一同）」」」

……雪代綾兎は只の天然（記念物?）キャラではないことに気付かされてしまった一同（水城先生含む）

「そうですね、シャープペンシルとかも先端が尖っているから捕獲するときに使えるんですけど……三角定規が一番突き刺さるんですよね」

微笑みを浮かべながら自分のペンケースから取り出したシャープペンシルを持ち、水城先生に向けて投げる素振りをする

「ほ、捕獲だと!? 雪代一体誰」

其処でハッと気付き、ダラダラと冷や汗をかきはじめる水城先生

「ふふふっ」

浮かべていた笑みが怪しい笑いになる

「ちよっ!! 雪代っ!?!」

「じゃあ、いつきますよ」

シャープペンシルを構える綾兎から逃げようとする水城先生

だが、クラスメイト一同により出入り口は塞がれ……じわじわと壁側に追い詰められていく

「くっ!! お前等全員グルかつ……無念」

ガクリと頂垂れる水城先生を狙い続ける綾兎

え……まさか本気で投げないよね? アレってふざけているだけだ

よね……？

巻き込まれたくないから傍観していたけれど、嫌な予感がしてきた

ヒュッ

ザシュッ！！

綾兎の手から放たれた一本のシャープペンシルが空間を切り裂く様な勢いで水城先生の居る手前（約三十センチメートル先の場所）に刺さった

「……………」

「……………あ……………」

サアアッと顔を青ざめる水城先生

「……………む、もう少し左だったか……………修正して再開です」

『『そう………って、いやいやいやっ!!（クラスメイト
同）』』

クラスメイト一同が一斉に心の中でツツコミを入れたのが分かった

僕は何が起きたのかすぐに理解できなくて、戸惑い始める

何で皆……二人を止めないのだろう

……あ、綾兎が本気で水城先生狙っているんだ……わ　　っ

思考回路が追い付いてきて状況を理解

……

……

……　　って、え？

「二本目、うつりゃ　　……」

ガシッ

「え？」

「「！！？（水城先生含む）」」

綾兎の手から滑り落ち、カラントと勢いもなく床に転がるシャープ
ペンシル……じゃなくてボールペン

急に止めた綾兎にちょっと驚いたけど、先生に怪我をさせたら大変
だもんね

いや、治まって良かった

一人納得し「はあ……」と溜め息を付き、席に着こうとする ん？

「「……（ジーン）……」」

……え？ 何で皆僕を見てるんだろう

視線が突き刺さって精神的にくるものがあるんだけど……

無言の圧力が重いです……うう

「杏……？ あの……」

「？」

恐々とした様子で僕に声を掛けてくる綾兎

「どうしたの？」

ニコリと笑みを浮かべてそう言うと、『え?』という表情を向けてくる

全く……一体どうしたのだろうか

戸惑いの表情を浮かべたまま綾兎は口にした

「杏……あの、腕を……」

「腕? ああごめん……って、あれ?」

全然気付いてなかったけどいつの間にか綾兎の腕を掴んでいた

……

綾兎にシャープペンシルを向けられていたときの水城先生の様に冷や汗をかきはじめる僕

「ええと、その……」

「杏……」

「う」

「此れが欲にいう『セクハラ』なのですかっ!?」

「っ!？」

無意識に仲裁に入った（と思う）のに、セクハラ扱いされました…
…何で？

キンコーンカーンコーン

室内の空気をブチ壊すかの様にチャイムが鳴り、皆は席に座り始める

「……氷月。助けてくれた礼に今度何か奢るぞ」

「!？」

すれ違い様に水城先生が僕の耳許で小さく呟き、教卓へ向かって行った

「……杏がセクハラか……こんな日もあるんだ……」

「いや、してないから」

隣で妙なことを呟く睦月に言い返し、自分の机に座る

………

………巻き込まれ人生真っ直中の僕は騒がしい教室の風景をまるで他人事の様に眺め、深く溜め息をついた

.....

..... いや、なんかもう疲れたよ.....

「ある一日　　森の中」

「.....」

隣で『森のくましゃん』を歌う綾兎と共に、放課後街中散策に出ることになった僕

綾兎曰く

「此の街って、えっと..... 神力や霊力・魔力らしき力が満ち溢れて居るんですね」

だそうです

「それって良いことなの？」

って聞いたら、真顔で「秘密です」と断言されてしまった

確かに学校の在る此の『神月町』は、そこそ有名な神社と大きな教会がある

確かクラスメイトの閑崎さんの家が教会だった気がする……電車で一駅先なだけだから、寮生活する必要はないはずだけど……家庭の事情だろうから詳しくは分からない

「くましゃんに　であーた」

「……………」

綾兎がさっきから歌っているのは『森のくまさん』とは違う曲らしいなんでも綾兎の双子の姉・アリスに教えてもらったとか……

高校生が歌う曲ではないと思うんだけどね

僕の住んでいるのは神月町の隣町の『風見町』という所で、風見町は住宅密集地帯だから何もなくて……

都会に向かう人達が結構暮らしてる

神月町の方が都会から遠いけれど、風見町よりは発達しているかも

僕のバイト先も駅の側にあるしね

「花咲く森だった、血が飛ぶ夜だった」

「っ!？」

頭の中で考え事をしている間に歌の中で誰か死にました……アリス、弟にどういっ歌を覚えさせたんだよ……

姉の言うことをまともに信じてしまつ綾兎もどうかと思うんだけど

綾兎だから仕方無いか

ジーツ

「？」

「杏、今失礼な事考えませんでした？ そんな気配が伝わってきたんですけど……」

「気のせいだよ」

隣から恨めしそうな視線を感じ、綾兎から言われたことに慌てて返す

……時々思うんだけど、綾兎って結構聡いのかもしれないなあ

最近はず勝手に人の心を読まなくなった分だけマシになったけれど……
……感覚で分かるものなのだろうか……？

「くましゃんの、言うことにやつ 犯人は お前だ 斧
でぐ・ちゃ・ぐ・ちゃ・に、惨殺死体にし」

……前言撤回……絶対『なんとなく？』だ

ガタガタガタガタツ

あ、あれ？　なんだろう……凄く身の危険を感じるよ……

「杏、杏……。あれを見てくださいつ！！」

「ん？」

隣で歌に恐怖を感じている僕に気付かず、声をかけてくる綾兎

綾兎の指差した方向をみる……あれ？　特に何もな

「『空気』です」

「……ワー、ホントダー、クウキクウキッ」

無言で返すのもなんなので、喜んでみた……片言な気がするのは気のせいということに　いや、此れは僕のキャラじゃないよ……

「……ぐすつ、ひつく」

「っ！？」

僕の答え方が相当悪かったのか綾兎さんが泣き出しました

「あ、綾兎……？」

恐る恐る声をかける

すると、両手で顔を覆ったままぐえぐと泣いていた綾兔が呟く

「……『空気』なんかで喜ぶなんて……杏は凄く不憫な子だったんですね」

……なんでだろう……今、物凄く綾兔を殴りたいなあ

「……………」

「杏……？　どうして黙っているんですか？」

「……………」

「????」

ふるふると震える右手を片手で押さえつつ、暫くは無言で綾兔の隣を歩くことにした

「着きましたね」

「……………うん……………」

十数分後、僕たちは寂れた社の前に居た

社といっても、数十年前に守り主が居なくなり、規模を縮小されたらしく、鳥居を潜った先には小さい祠が在るだけだった

「杏……なにか感じませんか？」

綾兎に言われ、祠を見る

ボウッ

「……………??」

気のせいかもしれないけれど、微かに祠に黒いもやの様なものが見える

其れはふわふわと祠の周りを飛び交っていて……気味が悪かった

嫌な気配もする

とても悲しい様な……そんな気配

「……杏も少しずつ感じるようになってきたのかも知れませんね」

「……そうだね。で、此れをどうするの？」

多分、浄化するんだと思うけれど……

「そうですね……封印しておきますか」

控えめな声でそう呟く綾兎に感心する

綾兎って時々破壊魔みたいな所があるから……隣の家（部屋？）に住んでいる水無瀬一家からはよくなにかが割れるような音がするから、それから比べればマシなんだけど……ね

「今は周りに誰もいないですよね」

キヨロキヨロと辺りを見回し、誰も居ない事を確認する

僕も一応確認する……よし、誰も居ないな

「じゃあ、始めます。……『光の導く空へと照らせ！』」

綾兎はまるで『魔法少女』のような呪文を唱えた

呪文と共に空から現れる光の粒子の塊が綾兎の頭上付近に降り、ぶつかる寸前で翳した両手の上で勢いが消える

粒子の塊がどんどん構築され、金色の杖になった

綾兎も光の粒子に包まれ、初めて出逢ったときの 黒髪・長髪の

美少女 いや、美少年になる

服も制服からモノトーンの服に変わる

「『聖杖・クロスセリア』」

杖を目の前に翳し、名を言う

……綾兎の杖ってそんな名前だったんだ……

杖を構えた状態でくると振り返る綾兎

「杏、早く呪文をつ」

「呪文？」

綾兎さん、そんなの知らないんですけど……

「心に浮かんだ呪文を言えば良いんですっ……！」

え、いや、そんなこと言われても困

キン

「っ　……！」

ふと、脳裏の端に昨日見た満月の景色が過った

闇に溶けゆく光のおぼかげ

逆に考えると、光を闇が包み込んでいるようにも見えた

「……『闇よ……光を支える糧となれっ』」

取り敢えず頭に浮かんだ呪文を唱えてみた

呪文を言うのが恥ずかしくて最後は投げやりだったけど……其れは仕方がない

高二の男子が魔法少女のような呪文を唱えるなんて……何処の中二病患者だよ

『はぁ……』と溜め息を付く

……

……

……あれ？

呪文を唱えたのに特になにも起こらない

綾兎が『……？』って感じの視線を向けてくる

暫く沈黙が続き、綾兎が口を開いた

「……すみません。未だ杏には早すぎたようですね」

「……そう……みたいだね」

あんなに恥ずかしい思いをして唱えたのに……はあ……

「やっぱり杏には根性が足りないんですね。情けないです……」

「僕、先に帰るね」

ここまで言われるとねえ……

綾兎なんてもう知るか

スタスタと速く歩いて鳥居を抜け

「杏、おいてかないで下さいっ（泣）」

……

……

「もう……チャッチャとやりますか」

「じゃあ、綾兎さんのお手並み拝見といきますか」

鳥居に寄りかかり、綾兎の方を見ながら言う

「そうですね。そこで見てみると良いですよ」

カチンッ

ガサゴソッ……パカッ

……何で綾兎って僕の勘に障るような事を敢えて言ってくるのだろう

カチカチカチカチッ……

携帯電話を開いて弄り始める

おっ、彼の声優さんが初ライブなんだ……睦月にメールして……と

カチカチカチカチッ

よし、送信！

「杏……人の話を聞いていますか？」

「……………」

たらら〜 ららりら〜

……ガサゴソッ パカッ

「もしもし あ、睦月？」

『杏？ さっきのメールの内容って本当！？』

メールを見て確認のため電話を掛けたらしい

「本当みたいだよ？」と返したとたん

『よっしゃ、キタア

ッ!~!』

……すごい声量で叫ばれました……うう……心臓に悪いよ……

「杏……」

『私は心の叫びを聞いてほしかったただだから……んじゃっ』

ブツツ ツーツ、ツー……

睦月……教えない方がよかったかもしれないな……はあ

ボタンと携帯電話を折り畳んで、サイドボタンでマナーモードに設定してから鞆にしまう

さて、そろそろ綾兎でも構ってや

「浄・化ッ!~!」

ピカッ、パアッ

綾兎の杖……『聖杖・クロスセリア』から降り注ぐ光によって辺りが一気に浄化された

『おおーっ』と感心する僕

只、技名が其のままだったのは結構変だったよ

「……杏なんか……杏なんかも知らないですっ！！　とっとと失せてください！！」

「うん、分かった」

綾兎に言われるままに立ち去ろうとする僕……流石にやりすぎたかもしれない

後ろで『うう……』と呟く綾兎

スタスタと綾兎に歩み寄り

「お疲れ様。じゃあ、帰りがけに綾兎が休み時間に言ってたお店にパフェでも食べに行こうか」

ポンツと綾兎の頭を撫でて、にこやかに言った

「……ううっ！　ううふ？　うーっ……」

思考の中で怒りとパフェへの葛藤と闘っているのか、唸る綾兎

僕を睨む黒い瞳が艶を持ち、まるでなにかを狙っているようで……
……動物の本能の様なものだろうか

「……そうですね……お腹も空きましたし、ケーキでも食べて帰り
ましょうー!」

其のお店のケーキも美味しそうだったんですよ〜と新たに思考を
巡らせる綾兎

思った以上に僕の案に食い付いてくれて良かったよ……

「話を振ってきたってことは……勿論杏の奢りですよね」

「う」

鞆の中からお財布を取り出し、中身を確認

……

……よし、なんとかある

「大丈夫ですよ」

「え？」

不意に声をかけられ戸惑う僕

「お茶だけ奢ってくださいね」

「……うんっ！」

何時もだったら突っかかってくる綾兎が、今回は落ち着いていた
でも、どうしてだろう

ニコリと微笑んでいる綾兎が少しだけ寂しそうに見えた……

「杏、速く行きましょう」

「あ、うん」

鳥居の下に置いてあった鞆を持ち上げ、先に進もうとする綾兎を追
いかける

……

……

僕はくるつと振り返り、祠を見た

……ずっと人が立ち入らなかったのだろう

だからこんなに荒れて……

さっき綾兎が浄化したものは、もしかしたら寂しいという誰かの想
いなのかもしれない

どうしてだか、そんな風に思えてならなかった……

綾兎と別れた後、スーパーで夕食の材料を買い、帰路へと着いた

鞆の中から鍵を取り出し、家のドアを開け

ガチャッ

何時もと同じ……ではなく、玄関に大人の女性の履く華奢なヒールがあった

『母さん……帰ってきているんだ……』

胸の奥に不安が広がる

どうして急に帰ってきたんだ……

『会いたくない』

そんな感情が身体を飲み込んでいく

母さんには悪いけれど、僕は家族に会うと『自分の存在意義』を疑ってしまう

カタンッと音がし、リビングから母さんが顔を出す

そして告げた

「あら、『あんた』居たんだ」

「今帰ってきたところです」

……『此れが息子に話しかける態度なんですか？』と言ってやりた
いけれど、どうせ話なんか聞いてもらえないだろう

この人にとって僕はどうでも良い存在なのだから

「あ、そうそう。あたしはもう戻ってこないから」

「え？」

思いがけない言葉に思わず顔を上げる

「何、知らないの？ 涼我さんあんたに未だ伝えてなかったのね」

何？ 一体なんのことだ？？

「相変わらず都合の良い頭をしているのね。あんたみたいな『人殺
し』の居る家にはもう戻らないって言ってるの」

叫ぶように放たれた言葉に身体が震える

サアアツと汗が引き、思考回路が働かなくなる

「邪魔よ。本当に迷惑な存在よね」

ドンツと突き飛ばされ、下駄箱にぶつかる

感情がぐらついて気持ち悪い

でも、僕は

駄目だ

言っちゃ駄目だ

身体の中で危険信号が点滅する

だけど、開いた口は止められなかった

「母さんっ！！ 彼の時本当は」

「五月蠅いっ」

パンッ

耳元で破裂するような音がして、じわじわと頬が熱くなる

「『あんた』が『彼の子』を壊したんでしょ！！ あたしの大切な『彼の子』を　　っ」

息子を叩いたことに詫びることなく、只自分の感情をぶつけてくる
母さん

「『あんた』に母さんなんて呼ばれたくないっ　『あんた』なんて産まなきゃ良かった！！」

「っ
」

ヒールを履き、纏めた荷物を持ってドアを開け、一度も此方を見ずに出ていった

カツカツとヒールの歩く音が遠ざかっていく

バタンッ

反動で閉まったドアを他人事のように眺め続けた

どうしてこうなってしまったのだろう

自分で産んだんじゃないか

此処まで拒絶するくらいならいつそのこと

「産まれたくなかったよ、母さん……」

ヨロヨロと立ち上がり、キッチンに向かう

買ってきた食材を冷蔵庫に積めてから、おぼつかない足取りで自分の部屋へと向かった

ガチャッ

何時もと変わらない部屋

だけど世界から色が消えたように、自分が存在している感覚がない

ジャケットとネクタイ、ベストを脱ぎ捨ててベットに倒れ込む

ギリリとスプリングが鳴り、柔らかな羽毛布団が身体を受け入れる

休みの時に一緒に干したタオルケットと掛け布団を引き寄せ、自分

の身体に掛ける

何時も使っている大きめの枕をギュツと抱き込み、全身の力を抜いた

はぁ……………

精神的に限界が来てるな……

二年前に初めて存在を拒絶されてから、殆んど会わなかった母親

母さんが僕の存在を鬱陶しく思うようになったのは何時からだったのだろう

でも、

今日の態度を見て分かった

僕は　此の世界に望まれて産まれたんじゃないことが……

ズキンツ　「っ！！」

ふと背中に痛みを感じ、母さんに突き飛ばされた時に下駄箱にぶつけたことを思い出す

頬も手を伸ばして触ると少し腫れていた

ショックが強すぎて、忘れていたのか……

此の痛みはぶつけた時の痛みなのだろうか……それとも

此れが心の痛みなのだろうか……

彼の事件が起きたときにはもう戻れない

其れでも、いや、其のときから僕は

自分の感情を表に出さないようにしていた

なのに……どうしてだか、最近は昔以上に感情が過剰になってきた

そう……其れは『雪代綾兎』に出会ってからだ

殆んど色をなくした僕に光を差し込んでくれた存在

嗚呼……そうか

僕は知らないうちに綾兎を心の中に受け入れていたんだ……

其処は前まで『桜果^{おつか}』の居場所だった

僕の大切な存在……だった人

そして

僕が彼女の心を壊した

「ごめんね、桜果……」

言葉を口に出した瞬間、瞳から涙が溢れて流れ落ちた

「ごめん……ごめんなさい……っ……」

二度と届かない……届くことのない言葉を謔言のように繰り返す

心の中に積もった想いを吐き出せば吐き出すほど、胸が苦しくなった

……一度流れた涙は止まることを知らないように、何時までも僕の頬を濡らしていく

そして僕は其のまま意識を手放した……

杏と別れ、寮に戻ったボクは自室で勉強をしていた

『さっぱり分からない所はあるが、出来るだけ杏に迷惑を描けたくない』

そんな思いを胸に抱いて、黙々と授業でやった所を復習していた

生物や歴史は得意だけど、数学はどうにも馴染めなかった

数字の計算なんか簡単なものができれば良いのに……

「微分積分なんて、一体何に役立つのでしょうか……？」

目の前の事を早く止めたい・だけどこれ以上杏に迷惑は掛けたくない

……

……

カタンツとシャープペンシルを机の上に置き、「んーっ」と身体を伸ばす

かれこれ三十分位やっていたけれど、殆んど頭に入らなかった

其れは気になることがあったからだ

『氷月杏』が思った以上に早く覚醒しそудだということ……

そして

「『二年前の闇の災厄』に『氷月杏』が関係しているということか？」

「っ！？」

ガタンツと椅子から立ち上がり、声のした扉の辺りを見る

其処には

「やあ、其の件に関しての資料を持ってきてやったぞ」

「水城先生……」

二年A組の担任・水城果鈴が仁王立ちしていた

「違うだろ。他人がいないときは」

「……『準ライトマスター・カリン』……様」

「そう……様をつけるのが僅かに遅かった気がするが」

ニヤリと不適な笑みを浮かべるカリン

OLのように、ピツシリとスーツが似合っている

見事なプロモーションの外見のわりに性格が悪いのが傷だ

「気のせいですよ」

よく杏が言っている此の言葉は結構便利だ

カリンは扉の内鍵を閉め、勝手に人のベットに座る

「綾兔、ちょっと此方に来い」

「……？」

言われるがまま近くに行く

グイッ 「わっ！？」

ドサッ

「な、何するんですか！？」

勢いよく手を引かれ、ベットに押し倒された

「いや、今日はやたら私に齒向かってきたからお仕置きでもしようかと思つてな」

「え、遠慮しますっ！！」

この人だつたらどんなことをしてくるか分からない

流石にボクはMじゃないので、抵抗した

「……ま、お前もアリス以外とはいちゃつき　いや、調教されたくないか」

「！？　貴女は僕をどういう目で見て　」

「冗談だ」

ククツと笑いをこぼし、明らかにS的な目でボクを見てくる

すっかり付き合わされてしまったため、凄く疲れた

さて、気を取り直して本題だ　て

「貴女は何時まで僕を押し倒したまんまなんですか！！」

「男としては嬉しい立場だろう？」

「いえ別に　といいますか……重いです」

「っ！！」

「さっさと退いてください」

取り敢えず思ったことを其のまま言う

ボクの言葉は結構カリン様の心を抉ったらしい……まあ、別にどうでもいいことだが

「お前、其れが女性に言う態度か！？」

「え……ああ、すみません」

ヨロヨロとボクの上から退くカリン様

やっと身動きが取れる……

「……で、『二年前の闇の災厄』に『氷月杏』が関係しているとは一体どういうことですか？」

「……其れは此の資料に書いてある。読め」

クリップで止めてある資料を渡され、それをめくる

「……そういえば綾兎は『氷月杏』をアリスの代役に建てたんだよな」

「ええ、そうですが」

資料に軽く目を通していく

……毎度の事ながら、どうして此処まで個人情報を探れるのだろうか

多分、カリン様の対の存在・準ダークマスターの『かみしろたくみ神城拓海』こと
タクミ様の情報だろうが

タクミ様は聖桜高校で保険医をしている眼鏡を掛けた優しい人だ

そして、此の二人はボクとアリスのマスターの兄（姉）弟子にあたる方で……

「タクミの調べでは『氷月杏』が元凶というわけではないんだが……その……」

珍しくカリン様が口を濁す

ボクは資料をめくっていく

……杏のスリーサイズ、学歴とかは今どうでも良いんですけど……
ちよつと興味はありますが

「ん？」

ふと、『家族構成』の欄の所に目が止まった

両親と杏、そして……

「『氷月……桜果』？」

資料では『双子』と書いてある

でも、杏に姉弟が居るなんて聞いたことはない

ページをめくると、戸籍のコピーがあつた

「『氷月杏』と氷月……いや、『本宮桜果』は従兄弟にあたる。『本宮桜果』の両親は、氷月杏が二歳の時に亡くなったそうだ。だから氷月家に養子として引き取られ、誕生日が同じだったから『氷月杏』と『本宮桜果』は双子として育てられていた」

「そうなんですか……」

杏がボクに言わなかったこと……そんな家族風景があったとは……

「二人はその事を全く知らないまま育ち……『事件』は起きた」

「其れが『二年前の闇の災厄』ですか……」

本題を聞き出す

もしかして、『本宮桜果』が関係しているんじゃない……

「なんでも、『氷月杏』が『本宮桜果』を殺しかけた」

「っ　　！？」

『そんな……どうして？』

杏が人を傷付けるようなことをするはずない

だけど

「というのが、事件の内容らしいが……其れは違った」

「………どういことですか？」

表情を曇らせ、少し沈黙が続く

「……綾兎……、真実を知りたいか？」

カリン様の瞳が『お前は其れを知ってどうするんだ？』と訴えてくる

杏の過去を知ることが杏自信を傷付けることになるかもしれない

でも

「……ボクは知りたいです……其れが答えなら」

覚悟を決め、自分に言い聞かせるように凜とした声をあげる

「そうか……」

カリン様はボクの覚悟を受け取ったのか少し考え、口を開く

「真実は逆だ。理由は分からないが『本宮桜果』が『氷月杏』を刃物で刺した後首を絞めて殺害し、自らも手首を切って自殺を図った……どちらも未遂に終わったがな」

……其れが真実なのか

タクミ様は多分杏が家に居ないときにでも、過去を再生して真実を知ったのだろう

こんな…辛い真実を……

「事件の内容はそんなことだろう。此のときに『虚悪な闇の感情』を持ち、其れを暴走させたのはおそらく……」

「『本宮桜果』ですか……」

「……………」

何も言わないということは、肯定を指している

付け足すように、もう一言

「綾兎……氷月杏には気を付ける。決して本宮桜果に合わせるな。二人はもしかしたら『私達に近い存在』なのかも知れない」

鋭い視線をボクに向けるカリン様

真実を知ったボクは呆然としていた

彼の杏が殺されかけた

杏の関係者が『闇の世界』を、アリスを消した……？

だとすれば、ボクは

『場合によっては杏を消すことになる』

其れは嫌だ

だって杏は

「綾兎……本来の目的、忘れるな」

ズシツとのし掛かる命令という言葉

突きつけられた真実は思った以上に哀しくて、辛いものだった……
……

第五章　彼のとき其のとき僕達は（前編）

*

わたしが異変を感じ始めたのは何時からだろう

初めはあれはみんなに視えるものだと思っていた

わたしも其れが普通だと思っていたから……

だけど

其れはわたしだけが視ることができたものだった

でも、そんな力なんて要らない

わたしは特殊な力を持つことなんて望んでいなかったのだから……

只、普通の生活を送りたかっただけ

日に日に強くなる力はわたしの心に不安を広げていった……

そしてそれはわたしの大切な……大好きなヒトにも……影響を
だしはじめる

『大切だからこそ失いたくない。だったらいつそのこと』

何時からか、心の片隅にそんな感情が生まれた

感情はやがて膨れ上がり

そしてあの日、暴走したんだ……

……

第五章 彼るとき其るとき僕達は

＊僕たちの未来＊

「もう別に良いんだ、僕なんて……」

冷たい風が吹き抜けていく屋上から今すぐ逃げ出そうと扉に向かおうとするが、扉の前に季^{とき}が居るため立ち尽くすしかなかった

「口ではそう言っているけれど、本心は違うだろ？」

ゆっくりと此方に近づいてくる季に僕は思う

頼むからこれ以上僕に近づかないでほしい

此のまま近くに來られたら、

自分で居られなくなりそうで……怖いから

「……関わらないで、もう駄目なんだ」

「何が駄目なんだよっ?」

グイッ 「やつ」

季にぎゅっと抱きしめられ、身動きが取れなくなる

「やだっ……お願い……離して」

「……………」

「とき……?」

おもわず季を見上げる僕

季は無言のまま、僕を抱きしめる力を強くする

「……好きだ」

「え……？」

ふいに耳許で呟かれた言葉に驚く

此れは僕の妄想が生んだ夢なのだろうか……？

「……好きだ。ずっと昔から俺は貴方のことが好きだ」

「季……駄目だよ。僕の傍に居たら君は」

今季を突き放さないと僕は堪えられなくなる

此の感情を……

それでも季は怯まなかった

僕に向けて新たに言葉を紡ぐ

「俺の人生は貴方が居てこそ成り立っているようなものだ!」

「季……じゃあ、僕は季のことが……その……好きなままで……良
いの……?」

「え?」

「あ………」

季の上げた声で、自分が何て言ったのか思いだし、じわじわと顔が
熱くなる

『どうしよつ……』

俯いて顔を背けたかったが、抱きしめられているせいで身動きが取
れない

たとえ、お互いの想いが通じあっていたとしても、これだけはいけ
ない

だって僕たちは男同

「あの、睦月さん。此の話は一体なんなんですか……読んで『キ
ュン』って来るんですが……其れは不味いような……」

「天宮睦月の新作！ 『僕たちの想いは 』 だけど？」

「……………はあ……………」

にこやかに宣言される言葉を聞いて、ボクは溜め息を付いた

新緑の色合いが深くなり、日々暑くなってきた今日この頃

聖桜高校に登校した直後、待ち構えていた天宮睦月さんに捕まり、なにやら桃色と肌色と薔薇の花が表紙全体の殆んどを占めている文庫本（一般的にライトノベルと呼ばれるもの）を読まされることとなって早三十分

始めは普通の学園もの（青春ストーリー……………？）だと思っていたが、次第に怪しい方向の話になってきた

小説に書かれているもの凄く甘い言葉に背筋がゾワツとする

「そもそも……………主人公の『葉山日向』はやまひなたさんって杏に凄く似ている気がするんですが……………」

「うん 相手の『水波季』みなはときは水無瀬がモデルだしね」

「うげっ……………天宮さんよ、何故俺が杏とこっという関係になるんだろうなあ？」

隣でボクが読まされていた小説を覗き込んできた水無瀬さんが顔をひきつらせながら言った

正確に言うと、『季と日向』がなんですけど……途中で描かれているイラストも二人（杏と水無瀬さん）にそっくりなのは睦月さんの陰謀でしょうか……

「ツッコむところが杏と似てるなんて……流石幼馴染だね」

睦月さんの謎の含み笑いに、少しビクツとするボク

なにやら裏がありそうです……

水無瀬さんは其れを見て嘆息し、やれやれという感じに首を振った

「あのなあ、男だったら誰でも気にするさ」

「え？　そういう物なんですか？」

一人話についていくことができないボクはその言葉に疑問符を浮かべた

一体どういうことでしょう？

「雪代……」

何故か若干引目の水無瀬さんの視線が痛い

何かおかしい事を言いました……？

そして

「綾兎くん……………だよねっ　綾兎くんなら分かってくれると思
ったんだ」

ガバッ　「わっー!!」

睦月さんに机を挟んで抱き付かれました……此れっていいことなの
でしょうか……

若干とは言いがたいぐらいに机が腹部にめり込んで痛いです……うう

「んー、今度は杏と綾兎くんをモデルにして書いてみようかなあ…
…」

「遠慮します」

ポワンと脳内に空想の世界を浮かべながらそういう睦月さんに思わ
ずつつこむ

勝手に想像された杏との関係を書かれたものを、世の中に広められ
るんじゃ堪ったものじゃないです

「でも、まさかこういう恋愛があるとは……驚きです」

睦月さんの身体を引き離しつつ、改めて考える

「綾兎くん、これが一般的に言われる『ボーイズラブ』略して『B
L』だよ」

「ホモ小説の間違いだろうが」

ボクが身体を引き離れた事に不満を覚えつつも、人差し指を立てて
自分の本を示す睦月さん

……ん？

訂正を入れた水無瀬さんの言葉が忘れかけていた記憶を掘り起こす

杏が契約したときに

『「僕はホモじゃない　　っ！！」』

って叫んでましたけれど、その意味がやっと分かった

成る程、そういうことだっ　　て

杏……余りにも酷いことを言っていたんですね……

今更ですが、此れって精神的に結構へこみますね……

出逢って一ヶ月位のボクでさえ睦月さんに読まされているのだから

杏はもつと……

「……………」

何故だかそう考えるとちよつと『ズルいな』って思う

自分が今まで他人と関わらなかったせいでしょうが、其れは『関わる事ができなかった』からだ

特に同年代なんて双子の姉のアリスしか居なかった

其れだつて何時かどちらかが消されてしまつという中で生きていたし……

何時かは此処から離れなければいけない

でも 其れまでは

（小声で）「学校生活を楽しみたいです」

「？ 綾兎くん、今なんか言つた??」

「何でもありませんよ」

ボクの呟きが聞こえたのか視線を送ってくる睦月さんに笑顔で返す

.....

.....

..... まあ、アリスを見つけ出すことが先ですが

彼の自由奔放な姉は一体何処に行ったのでしょうか.....

ガチャッ ガララッ

アリスに対する想いを心の中で呟きながら窓を開けると、ザアッと心地よい風が吹き、若葉が宙を舞う

今日は絶好な晴れ日和だ.....

「ならいいんだけど.....其れにしても」

「「ああ（ええ）」」

ボクを含めた皆の視線が睦月さんの隣の席に向く

代表としてボクが一言

「杏.....何時になったら来るんでしょうか？」

窓側の後ろから二番目の席

現在時刻・八時半

……無遅刻無欠席の皆勤少年・そして、ボクらを繋ぐ重要人物の氷月杏がまだ来ていなかった

杏とはカリン様から過去事情を聞いてから話しづらくなってる所はあったけれど、杏はあまり気にしてないようで……なんだか納得がいかないんですけれど……

でも、今日は何かが違う……そんな気がしてならなかった

ガタッ

「……………う……………」

部屋の隅の方で物音がして僕は微睡みに浸っていた意識を呼び起こされた

枕元に置いてある携帯電話を充電器から外して手に取って開き、時

刻を確認

現在時刻・六時十分

何時もは十五分に起きるから、携帯電話のアラーム音を設定してある時間よりも早く目が覚めたということだ

『う……そろそろ起きなくちゃ……』

体温の残るぬくぬくな羽毛布団から抜け出すのには気が引けたが、学校の為ダルい身体をベットから起こし

「うっ……！？」

無理だった

力を入れようにも身体が動かない

さっき腕を動かせたのだから、今動けなくなったのだろう

いや、其れよりも……

何かにのし掛かられているような……

.....

.....

まさか……金縛り？

恐る恐る視線を掛け布団の上に向けると、足元に何かが乗っていた

「っ！？」

其れはモゾモゾと動き、真っ白な塊で

「……フム、現代高校生の部屋のわりにはえっちい本が見当たらないとは……氷月杏はホモなのだろうか……」

「うわっ！！？」

「なっ　　！？」

突然喋った白い塊に吃驚し、掛け布団を強く引っ張る

「おい、氷月杏っ！！　急に引っ張るなっ　　っておわっ！？」

ドサッ

声を発した白い塊を掛け布団から落としてしまった

って、今の明らかに人間だね……？

僕の名前を呼んでいたし、ひょっとして知り合い……？

なんか酷いことを言われた気がするし……霊的なものじゃなくて良かったけど……

ちよつとほつとする僕

「痛い……まさか奇襲しようとして、裏をかかれるとは……」

「えっちい本を探そうとしている時点で間違っていたと思います……」

……」

中性的な声の白い人（勝手に断言）を凝視し、言葉をかける僕

フローリングに額をぶつけたのか、手で押さえていた……顔面から落下するなんてある意味で器用だよな

……まあ、怪我の加害者（若干眠りを妨げられたことに関しての恨みあり）が考えることじゃないんだけどね

真っ白な塊の人物はよく見ると真っ白なワンピース（細部や裾に刺繍・レース有り）を着ている髪の毛の長い……たぶん女の子

綾兎の事があるため『女の子』とはつきり言えないや

其れにしても全く……一体何処から入って来たのだろうか

解放された身体をベットから下ろし、机に向かう

机の上に置いてある鞆の中を確認し、必要な教科書と昨日の夜にやった課題とペンケースを押し込む

其れを机の上に置いて、閉まっているカーテンを開け、窓を開けた

ザアッ

心地よい風が入って来るのを感じながら、制服に着替えようとクロ―ゼットに

「おい」

「え……………ああ、未だ居たんだ」

ふいに声をかけられた

「お前って何気にひどくないかつ！？ 其れが見知らぬの美少女に言うことか！！」

すごい剣幕で怒る少女（勝手に断言）

……………嗚呼、物凄く鬱陶しい

僕は少女を侮蔑するように視線を向ける

そして 他人ということで、本音をぶつけた

「何で此の部屋にいるんだよ、アリス」

「っ」

「……………やっぱり」

……………僕の感は当たっていたようだ

こんな少女の知り合いは居ないし、僕の名前を知っていて僕の知らない人は綾兎の姉にあたるアリスしか居ない

双子の姉と言っていたのは本当のようで、見た目は凄くそっくりだった

但し黒瞳黒髪の綾兎とは違い、アリスはまるで真っ白な兎の様に白髪で瞳が紅かった

……………前に綾兎にクレイゲームで取ってあげた『白うさぎ』に凄く似ている

性格は全然違うみたいだけど……………

とりあえず思っていることを告げる

「綾兎が心配してたから、さっさと帰った方が」

「其れはできない」

「!？」

淡々と告げられた言葉に驚く僕

綾兎の存在を否定された気がした

僕の表情で感情を読んだのか、申し訳なそうな顔をするアリス

「すまない……未だワタシは彼奴に会うことは出来ないんだ」

少し俯き気味に呟くアリス

その顔は何処か切なくてやりきれないような表情で……

『……う、此れって僕がいけないのか……?』

「……………」

『……………うっ……………』

アリスが口を閉ざしたせいか、重々しい空気が辺りに広まる

そんな中、不意に僕は掛け布団を手に取り

「うりゃっ!!」　バサッ

「っ!!!?!」

アリスの頭に向かって投げた

「……………よしっ!!」

拳を握りしめて言う僕

さて、制服に着替えるとす

「お前は一体何がしたいん　　っ!!」

「うおっ」

ガバッという勢いで被った掛け布団を払い落とすアリス

しかし、アリスは僕を見て硬直した

……まあ、仕方ないけどさ

そのとき僕は、パジャマの上のボタンを全開にし、制服のワイシャツ（注：夏服になりました）をクローゼットの中から取り出している最中だったから……

……着替えるから見られないようにするために手近にあった掛け布団を被せたのに……

硬直しているアリスを放置して着替える僕

水無瀬のお母さん（結依さん）に着替えを見られることがあるため、他人に着替えを見られるのには特に抵抗はない（慣れって嫌だ……）

パジャマを脱ぎ捨てワイシャツを羽織り、ズボンに手をかけた時点で

「へ……へう……へ、変態iiiiiiiiっ!!?」

「え……………」

顔を真っ赤にしたアリスに、物凄い勢いで叫ばれました

……………家庭の事情で現在独り暮らしの僕の家（部屋？）

高層マンションなので、防音対策はしっかりされているけれど、窓を開けているせいで効果はあまり無く

閑静な住宅街の空気を見事ぶち壊されました

「あ、アリス!？」

「くう、寄るな変態っ!!」

「あ……………」

またもや叫び声が住宅街に響き渡る

羞恥と混乱で瞳を潤ませたアリスは掛け布団で僕との間に壁を作った

そして、ベットの上から僕の枕を勝手に取り、『ぼふっ』と投げつけてくる

勢いに任せ投げられたため、羽毛入りの枕は布が裂けて部屋中に羽根が舞い散った……

そんな光景を他人事のように眺めながら僕は今後について考え始める

…………… 氷月杏・十七歳の初夏

ご近所との間に大きな壁が出来そうです

「むう……………」

「はあ……………」

彼の後、無理矢理アリスを追いついて制服に着替え、掃除機で部屋中に飛び散った羽根を吸いとって片付けた……帰りに新しい枕を買ってこないとなあ

結構気に入っていたのに……ちょうどよくもふもふしていて通気性に長けているからうつ伏せに寝ても大丈夫なんだよなあ

……過去に普通（仰向け）に寝たときに顔の直ぐ脇に頭文字Gさんが降ってきて……以来仰向けに寝るのが怖いんだよ……

おかげさまで寝ても疲れはあまり取れません

其の事もあり、掃除は徹底してすることになりましたとき

氷月杏の過去話でした　以上っ！

アリスが散らかした部屋の片付けがある程度済んだので、今は台所で朝食を作っているところ

朝食を考えるのはもう……なんか嫌だったので頂垂れていたら、前に睦月と綾兎曰く『疲れたときには糖分だよ（ですよ）』ということをおい出し、フレンチトーストを作っています

食パンを取りだし、解いた卵に砂糖と牛乳を入れたものに半分に切った食パンを浸ける

湿らせたクッキングペーパーでフライパンを拭いてから、フライパンを熱してバターを一欠片落とし、バターが溶けきったところに浸した食パンを入れる

ジュワツと音を立てながら焼けていく食パンからは甘い香りがした。こんがりときつね色の焼き目が付いたフレンチトーストをお皿に盛り、適当に千切ったレタスとツナのサラダとヨーグルト、淹れたてのコーヒーを付けければ立派な朝食の完成だ

リビングのソファアを勝手に乗っ取り、テレビ（ニュース？）を見ているアリスに「ワタシの分も作れ」と言われた為、何時もよりも時間が掛かってしまった……従ってる僕自身、今回の事の半分は僕がいけないと思ったので、反省の意味を込めて……

……綾兎は天然記念物で、アリスは純粹なんだなあ……アリスは腹黒な気もするけど……

「アリスー、ご飯できたよー」

「んー、分かった」

出来た朝食をダイニングのテーブルに運び、着けていたエプロンを外す

ナイフとフォーク、スプーン等を出してアリスに手渡した

「頂きます」

「うむ」

自分で作った訳ではないのに何故か偉そうなアリス

暫くシルバーを動かす音が聞こえ、特に会話もなく食べ続けた

お、今回は上手く作れた方だな

満足満足

「なあ。氷月杏」

「何？」

食べてるときに話すなんてちょっと行儀が悪いような気がしたけど、
只の朝食だし別に良いか

「綾兎はどうしてる？　ちゃんと学校で上手くやれているのか？」

「勉強は苦手みたいだけど、クラスには馴染んでるよ……ずっと前に
担任の先生にシャーペンシルを投げつけたりしてたけどね」

「なら良いが……シャーペンシルを投げつけるなんて……何があ
ったんだ？」

サラダを咀嚼しながら聞いてくるアリス

僕はフレンチトーストをコーヒーで流し込んだ

「担任の先生がドSだったんだよ……小中学校だったら教育委員会に訴えるくらいにね。水城果鈴さんっていう人」

ガタンツ 「水城果鈴!？」

「!？」

アリスが勢いよく立ち上がった影響で、食器が音をたてる

僕はコーヒーを飲んでいる途中だったため、噎せそうになった……うう

ふう……と息を付き、僕はアリスを見た

アリスは暫くショックを受けたような顔をしていたが、僕の視線を感じたのかハッと我に帰った

こほんっと咳払いし、落ち着きを取り戻す

「す、すまない……まさか水城果鈴が先生をしてるとは……」

「? 水城先生と知り合いなの?」

落ち着きながら呟いたアリスの言葉に疑問符を浮かべる僕

「なっ!？」

其の言葉を聞いて、硬直するアリス

僕はその間にフレンチトーストを咀嚼し、ヨーグルトに手を伸ばす
水無瀬のお母さん（結依さん）が莓狩りに行って摘んできた莓で作
ったらしいジャムをヨーグルトに入れてスプーンを手にとった

サツと煮詰めているだけなので、実そのものの形が残っていてとて
も綺麗だ

アリスと同じ紅色……そう考えると、アリスの瞳って美味しそう
に見えてきた

……………今の考えはちょっと変態さんみたいだから封印しておこう
……………うん

危ない人の発言（失言？）でした。すみません……

「？ どうしたんだ、氷月杏」

「何でもないです……うう」

「？ なら良いが……」

いつの間にかフレンチトーストを食べ終えたらしく、僕と同様にヨ
ーグルトを食べ始めるアリス

莓のジャムを乗せて、咀嚼する様子は綾兔同様微笑ましかった

さて、話を戻して

「アリス……さっき水城先生の名前を言ったときに驚いていたけど……まさか水城先生って……」

……なんだろう、凄く嫌な予感がするよ……

「水城果鈴がドSなのは昔からだ……アイツは……」

「あ、アイツは……？」

沈黙な空気がのし掛かり、話すことに躊躇していたアリスは言った

「……あのド……いや、水城果鈴は……一応私達の『上司』にあたる人だ……」

「………は？」

今、アリスさんはなんて……

彼の水城果鈴が……その……二人の上司！？

うわっ……嫌だあ……

「綾兎がお前に言わなかった理由は分からないわけではない………因みに、先生か誰かで『神城拓海』という奴は居ないか？」

「神城？ 僕はあまり関わったことはないけれど、確か保険医の先生が……神城っていう名字だったよ……？」

「な！？ くそっ、やられた……………」

額に手をあて『はあ…………』と溜め息を付くアリス

「……………なんとなく思ったんだけど、もしかしてその……………神城拓海さんは……………水城先生同様に二人の上司？」

「……………ああ。お前達が通う学校にいるということは、多分お前達の監視だな」

「なっ！？」

空になった食器を重ねながら僕は硬直する

監視……………一体どういうことだ？

いつの間にか朝食を食べ終えていたアリスは僕の分まで使った食器を流しに置いた

台ふきんでテーブルを拭き、僕に向き直す

「氷月杏……………そろそろ本題に入るぞ」

「アリス……………」

「私が言える限りでは教えてやる。だから気になることは出来るだけ聞け」

「……分かった」

真剣な表情で僕に言葉を向けるアリス

その事に同意するように僕はコクンと頷いた

「始めに、さっき私は水城果鈴と神城拓海はお前達の監視と言ったが　ハッキリ言って、常にお前だけを監視している」

「……其れは一体どういう……」

僕個人を監視して、一体何が……

「氷月杏。事の原点から考えるが、お前が闇に飲み込まれかけた所を綾兎が助けて、対の私の代わりにお前と契約したみたいだが……多分、闇は最初からお前自信を取り込む機会を狙っていたんじゃないか？」

「……え」

闇が僕を狙う……何で？

「あと、お前は事の重大さに気付いた方がいい。水城果鈴達がお前を監視しているということは恐らく……」

「……恐らく？」

アリスは言葉の続きを話すのに躊躇いを持っていたが、深く深呼吸

をしてから言った

「監視つてことは、必ずこの家にも来てる。そして……お前が生まれてから今までに起こったことを全て調べられたということになるんだぞ……そう、二年前に起きた事も……」

つまり、彼の事件についても全部

僕は声をあげた

「……そんな……何で……理不尽だっ!!」

酷い……酷すぎる

どうして関係ない人に知られなきゃいけないんだ

過去を知っているのは幼馴染みの水無瀬だけだったのに……

そして其れよりも……僕は

雪代綾兎に過去を知られたことが何よりも辛かった……

綾兎は純粹で、友達として……相方としていつの間にか大事な存在になっていた

だから、僕の過去を知って、傷ついてほしくなかった

綾兎が僕の過去をいつから知っていたかは分から

「……………あ」

そういえば最近、僕に対して綾兎はよそよそしかったような……

あれは……僕の過去を知ってしまったから？

母さんと関わりを絶ってからだから、かれこれ一月位経つ

……ちよつと自分が情けなくなってきた

僕が母さんの言われたことに対して結構落ち込んでいるときに、綾兎は僕の過去を知って苦しんでいたんだ……

綾兎のことだから、多分一人で抱え込んでいたはずだ

……まあ、あんな壮絶な過去を他人にペラペラ話されたら、その事が理由でこの世から消えなくなるが……うん、絶対。

最初は過去を勝手にばらされたことに怒りを感じていたが、良く良く考えてみたら、なんか納得してきた

伊達に十七年も生きていないし……すっかり忘れていたけれど、初めて綾兎に会ったときに……

「『この際だから言いますが、貴方はもう……只の人間ではありません。我々『住民』と同じ特殊な力を持っているようです』」

とか言われてたし、僕自身が普通の人間じゃないなら『別に構わないんじゃないか』って思うんだよ

「お前……さつきから百面相をしているが大丈夫なのか？」

「あ」

アリスが居ることをすっかり忘れ、考え込んでいたらしい

アリスが若干引いていた……空しい

「お前って変わっているよな。なかなか報われないくせに前に前に進もうとする……本当に綾兎に似ているよ」

「その分、物事に深く関心が持てないけどね。桜果のときに失う辛さを知ったから……だから少しでも、前に進むんだよ」

『なかなか難しいんだけどね』と言葉を付け足す

そんな僕を見て、アリスは寂しげに笑った

「……彼の子もこうなってくれと良いんだが……」

「？ 彼の子って誰？」

アリスから聞き慣れない単語が出てきてきょとんとする僕

僕の言葉を聞いて『ああ』と口に出し

「……乙女の事情だっ！」

ニカツと意地悪げに微笑み、人差し指を立てて口の前に添えた

「……わー」

「おい、犇々と『うつわ、コイツなに言ってるの……』という視線が向けられてる気がするんだが……」

そんなの当然。だってもの凄く似合わない

ギロツ

「……すみませんでした。」

蛇に睨まれた蛙ってこういう感じなのか……アリス、怖い

「……ま、氷月杏を弄るのは此れくらいにして……と」

「弄られてたんだ、僕」

ある程度過去を吹っ切ったつもりだったけど、別の意味で落ち込んできた

案外僕って弄りやすいキャ 更に落ち込みそうなので、この先の言葉は封印しよう……うん

今日はテンションの上がり下がりが激しいや……

「お前はもう大丈夫みたいだし、大事な用事があるからワタシはそろそろおいとまするでしょう」

ガタンと椅子を鳴らして立ち上がるアリス

「不法侵入から会話までの間が長かったけどね」

「それは言っな っと、忘れるとこだった」

「？」

ゴソゴソとポケットの中を探るアリス

「ほら、此れ。前にお前を探していたら落ちてたんだ。お前のだろっ?」

アリスが差し出したのは、いかにもアンティーク調な十字架の付いたネックレス

古めかしい銀の十字架に細かい飾り彫りがされており、真ん中に丸

い半透明の石が付いていた

ネックレスのチェーンは長めで、聖職者（牧師さん？）が付けてい
そうだ

でも、それは

「アリス 悪いけれど、此れは僕のじゃないよ」

「え、だってこれからお前の気配が あ」

「あ？ 何？」

ちよつと考え込むアリス

だが、直ぐに『成る程……そういうことか』と考え直したらしく

「それはワタシからのプレゼントにしてくれ。大事にしるよ」

グイッと片手を掴まれ、掌に十字架を握らせるアリス

僕は納得いかないものの、其れを受け取った

「あ、あとな」

「まだあるの？」

朝っぱらからアリスに付き合わされているため、なんだか疲れてき
た……

「氷月杏……此れだけは言わせてくれ……アイツもお前と同様だと
言うことを……」

「……え？」

急に神妙な顔をして言うアリスに僕は吃驚する

「ま、深く考えるなって」

ポンポンと頭を軽く叩かれる僕はその言葉は軽く受け取ってはいけない気がした

「でも、今日お前に会えて良かったよ。平日だから学校だと思って
いたからな。その様子だと休みみたいだし」

「え……っ……!」

ガバツと振り返る僕

慌てて壁に掛けてある時計を探し、時刻を確認

現在時刻・十時三十分

……

………つてええ!??

ワナワナと良く分らない震えが身体を襲う

脳内で自分のキャラ設定についておさらいが始まる

大事なところです

真面目

無遅刻・無欠席を維持してる最中

……え？

堂々と学校サボってたよ？

今日、学校だつていうこと自体忘れてたよ

そう……綾兎の双子の姉・アリスによって……

くるりと振り返る僕

空気を察したのかベランダの方に後退りしていくアリス

「アリス……」

ジリジリとアリスを追いつめていく

ガチャッ ガララッ

アリスは咄嗟にベランダのとを開けて

「じゃっ、綾兎のこと頼むぞっ。またな!!」 『風羽飛翔』
「

呪文らしい詞を放ち、能力の具現化なのか背中に空気の翼を生やして 飛んだ

「わー、凄いなあ……………って、もう二度と来るなあああああっ!!」

僕が虚空に叫んだ言葉は、彼方へと消えていった……………

第五章↳彼のとき其のとき僕達は（後編）

杏がアリスによって遅刻になった一方

「杏……一体どうしたのでしょう?」

ホームルームで出席を取り終え、一時間目を過ごしたボクたちは休み時間中朝と同様に杏の席を囲っていた

『来ない来ない来ない……ううう』

ボクが此の私立聖桜高校にやって来てから杏が学校に来ないのは初めてだったため、不安が胸に広がる

其れは睦月さんと水無瀬さんも同様らしく、杏の不在に違和感を感じているみたいでした

「水無瀬、隣に住んでるんだから何か知らないの? 杏って一人暮らしだから、もしかして体調崩して寝込んでいるかもしれないし……」

「そうだなあ。ちつと結依さんに聞いてみるか」

やる気の無さそうに机にぐにーっとして身体を預けている睦月さんの言葉を聞いて、水無瀬さんは制服のポケットからシンプルな黒い携帯電話を取りだし、画面を開いた

この学校の校則では休み時間と放課後は携帯電話の使用は可能らしい……ボクも上の人に申請して買って貰おうか検討中です

水無瀬さんの会話を聞いて『結依さんって誰?』という考えが頭に浮かんでいたら、小声で睦月さんが「水無瀬のお母さんだよ」と教えてくれました

親を名前で呼ぶなんて、一体どういう家庭なのでしょう……

水無瀬さん家の家庭の事情です

水無瀬さんは短縮機能を利用して自宅に電話をかけた

そして、結依さん呼び出す

「もしもし結依さん? 俺だけど……」

『あらあら夜ちゃん。こんな時間にどうしたの? お母さんが恋しくなったのかしら?』

「んな訳ないから……杏、まだ家に居るのか? 学校来てなくてさ」
親子とは思えない会話にちょっと吃驚する

因みに結依さんの声が分かるのは、水無瀬さんが通話のスピーカー機能を利用したからです……便利です!

其れと夜ちゃんって水無瀬さんの事みたいです……十夜だから『夜の字を取って『夜ちゃん』』

せめてちゃんと名前で読んであげましようよ……結依さん

そう会ったことのない人に、ちよつと言ってやりたかった

携帯電話のスピーカーから会話の続きが聞こえる

『杏ちゃんだったら……あ、今ベランダに居るわね。何してるのかしら?』

「なんで杏はベランダに居るんだよ?」

本当にどうしてベランダなんか……今日は暖かいから日向ぼっこでもするのでしょうか……

そんなことをしているなら早く学校に来れば良いのに……謎です

『さあ……今日はお天気が良いし、洗濯物でも干すんじゃない

「わー、凄いなあ……って、もう二度と来るなああああつ!」

……杏ちゃん、一人で空に向かって叫んでいるんだけど……熱でもあるのかしら？」

不意に結依さんの声が途切れ、代わりに 馴染み深い杏の叫び声が響き渡る

「……!? (クラスメイト一同)」「」

……教室で電話していたため (+ 通話のスピーカー機能使用)、教室中に杏の謎の叫び声が響いた

その為クラスメイト一同が杏の叫び声に驚き、ボクたちの方に視線が集まる

……注目を浴びるのは苦手です……

「結依さん、杏に一体何が」

一番近くで聞いていた水無瀬さんは「耳痛え」と呟きながら理由を聞く

『さあ……うんよしっ!! お母さん今から杏ちゃんの様子見てくる っ!! じゃっ』

「凄く楽しそうに電話を切るな っ!!」

結依さんの言葉に携帯電話に向かって水無瀬さんは怒鳴っていました

……どうやら理由は聞けなかったみたいです

そして、会話から結依さんという方は「楽しむこと」を生き甲斐にしていることが判明されました

杏……一体何があったのでしょうか……何か変です！

「水無瀬、氷月は大丈夫か？」

「氷月くん、何があつたの！？」

クラスメイトの何人かが電話をしていた水無瀬さんに駆け寄り、叫び声の理由を聞いています

凄いです！ 杏は此处まで信頼され

「氷月^{くん}が壊れたら此のクラスに常識人が居なくなるじゃない（か）
っ！……」

「っ！？」

……そういう意味で必要なんですね……杏……何て不憫な……うう

目許に溢れた涙をポケットからハンカチを取り出して拭き取るボク

ジーツ

「？」

隣から視線を感じ、振り向く

「……こう見ると、綾兎くんってヒロインみたいなものになあ……此のゲーム、『杏の攻略者』の……」

「睦月さん、ゲームと現実と一緒にしないで下さい。杏を攻略したら新世界のカミサマになれるわけではないですし……」

横目でボクを見てきた睦月さんが世の中をゲームに例えていました
ボクたちのような『光や闇の住民』から見れば、此の世界は一種の
RPGなんですけどね

……其のゲーム内での杏の存在は……

「『女神』か『バグ』……」

杏の存在は、只のヒトから見れば『有りがちな存在』

ボクたちから見れば『異端者』

そうなるのかも知れない

……まあ、杏の能力が何なのか分らないですが、杏は特別な力を持っているかもしれないですね……

普通のヒトは分らないでしょうが、前に杏と二人で悪霊（元はヒトやカミサマだったけれど、廃れていって『闇の欠片』と同化したもの）を抜ったときに感じたんですが……杏つてもしかして闇を引き付ける『誘体質』の気がするんですね……

『誘体質』とは文字通り何らかを引き付ける能力で、稀に此の世に居る存在。其れが『光』だったり『闇』だったり『其れ以外』だったり……

杏の場合は『闇』で……いや、『其れ以外』だとボクはちよつと専門外だからムリなんですけどね

『其れ以外』は『幽霊』やら『怨念』やら『呪術』とかですから……流石にそういうものには出来るだけ関わりたくないです

稀に『其れ以外』のモノを抜える『住民』も居ますが……アリスがそうでした

元々、人間として生きていたときにアリスには変わった力があつたから……

ボクはちよつと治癒能力があるくらい……あまり役に立ったことは

無いのです

でも、杏の能力はもしかしたらボクの能力よりも大きいかもしれない
そう思うと、少しばかり劣等感を感じるのです

……なんかちよつと落ち込んできました

話を戻します

杏のように『闇』に惹かれる人の逆の性質（体質？）を持つ人は『光』に惹かれます

本来、『光の世界』と『闇の世界』は『此の世（現実世界）』を支えるために存在しますが、二つの世界のバランスがずれると『世界の一部』と呼ばれる欠片が現実世界に溢れてしまいます

『闇の世界』が力が大きいと『闇の世界』の『欠片』が現実世界に零れ、同様に『光の世界』の力が大きくなると『光の世界』の『欠片』が現実世界に……

其々の世界のバランスを保ちながら、住んでいる世界と対になる『欠片』を自分の持つ力と中和して、現実世界に溶け込ませるのがボクたちの御仕事で……

現実世界に収まりきらない『欠片』は元の世界に送ります

今は『闇の世界』が崩壊してしまっているため、仮としている場所

に新たな『闇の世界』を創造して、『現実世界』に散らばった『闇の世界の一部』の『欠片』を其所に送っているのです

……最初に杏を襲った『欠片』は大きさが凄かったため『現実世界』に溶け込ませましたが……あれは大変でした

其のあと、不在のアリスの代わりに杏を対の存在（仮）にしたのです……

でも、アリスは『闇の住民』だけど、杏はどちらかというと『光の住民』ボク』に近い気がするんですよね

属性が反対だったら本来『闇の世界の一部』欠片』に狙われるわけはないんですが……どうしてでしょうか

氷月杏という存在は一体……『何』？

……嗚呼……何だかモヤモヤしてきましたよ

「……はあ」

「？ どうしたの綾兎くん。溜め息なんて付いて」

「ちよつとした考え事です」

此の『現実世界』について考えていたとはいえない

「そう？　なら良いけど……悩みがあったら何でも相談してね」

ニコツと笑う睦月さん

睦月さんって案外良い人

「そして、小説のネタにさせてね」

「……其れだけは結構です」

朝同様に断るボク

下手すれば、睦月さんに世界を壊されてしまう気がします……此の『現実世界』の秘密は一般の人には知られてはいけない

小説で例え『フィクション』だとしても世間に此の事が発表されたら……下手したら

『……睦月さんは消されるかもしれない……』

準マスターのカリン様とタクミ様に……彼の二人ならやりかねない

彼の人たちは自分に利が無いものは蹴り落としていきますから……タクミ様は嫌々やっている気がします

「手段は選ばない」とか言って、今まで関係ない人が何人消された
ことか……

話は変わりますが『闇の世界』の『住民』であるタクミ様は、『二
年前の闇の災厄』で唯一生き残った方だ……

丁度、定期総会で『光の世界』に訪れていたらしい

一時ボクはタクミ様を疑っていたが、タクミ様の能力は光を浄化・
転送する以外に『過去の再生』が出来るだけなので、世界を崩すよ
うな力はない

元に『二年前の闇の災厄』は杏の従姉妹にあたる『本宮桜果』が原
因でした

……でも、『本宮桜果』が犯人だということにボクは納得していない

其の真実を知っているのは『氷月杏』だけだ

……杏とは一度ちゃんと話してみた方が良いでしょうね

今は『闇の住民』であるアリスの代わりをしてもらっていますが、
杏の事はいずれ此方の世界に引き込む必要が出てくるかもしれない

出来れば其れは早急に……

其れまでは準マスターの二人には動かないでいただきたいです

キンコーンカーンコーン

心に決意を結んだと同時に授業開始のチャイムが鳴り、皆は席に戻る

ボクは教科書とノートを鞆の中から取り出し、次の授業に挑んだ

……

………うつ、うつうつ……

………よりによって数学でした

「はぁ………」

青空の下、閑静な住宅街の中のアスファルトの上をてくてく歩きながら溜め息をついた

アリスが帰った（？）後、僕の叫び声を聞いたらしい結依さんが僕の家に押し掛けてきて結構大変だった

「すみません、寝惚けました」

「あら……気を付けなきゃダメよ？」

最終的にはあっさり解放されたけれど、その代わりに

「夜ちゃんに持ってって、皆で分けて食べてね？」

「はい」って朝にでも作ったのであろう手作りマフィンを渡され
たし……お陰で二時間目も間に合わないよ……はあ

紙袋に入った手作りマフィンを手に持ちながら、住宅街から駅に向
かう

僕の住んでいる『風見町』という住宅密集地帯は都会に向かう人が
多いため、交通機関は結構便利な方だ

電車以外にもバスやタクシーが何種類もあり、電車よりも神月町に
向かうバスに乗って高校に行く生徒の方が電車通学の生徒より多い
けれど、電車代よりもバス代の方が運賃が高いため普段僕は電車を
使用している

今日はバスで行こうかと思ったが、時間帯的に電車が空いている（
というお客が居なくてガラガラ）ので何時も通り電車を使用

……これでも儉約家なんです

母さんに一方的に絶縁されてから数週間後、父さんが電話してきて、『お金は今まで通り』なのが分かって良かったけれど……母さんが一方的に絶縁した理由……最終的には父さんの浮気でした

「杏……すまなかった」

「……何か僕が悪いみたいになってるから頭上げてよ……土下座までしないで良いから」

こないだ休日に連絡もなくいきなりやって来た父さん

頭を地面に付けるように土下座をする父さんに僕は若干引いた……すみません

只今単身赴任中なので、その日は三時間位しか此方には居られなかったけれど……うん、自業自得だよ

そして話を聞いてると、『偶々会社の同僚で困っている母子家庭のお母さんの相談に乗っていた』そうで……父さんが不憫で仕方がなかった

「杏……杏　っ！……」

「……大変だったね」

抱きついてきた父さんの背中を子供をあやすかようにポンポンと叩いた

彼の時は僕に抱きついてくる父さんを宥めるのが大変だったなあ

今では良い思い出です

一ヶ月位前に久々に母さんが家に来た理由は、此れが理由だったのか……其れで苛々を誰かにぶつけたくて僕にあたったと……

……自分の立場を恨みたくなりました

母さんもとい理音さんは、僕と外見が凄く似ていて……母さんは自分と僕を重ねて見ていることがある

自分の息子じゃなくて自分の過去として

だから、桜果を守れなかった僕を拒絶しているんだ

過去に大切な幼馴染み　桜果の母親を救えなかったから……

だから同じように桜果を助けられなかった僕に強くあたり、自分と関係ないように僕を引き離れた

父さんの浮気騒動で完全に断ち切ることを決めたのだろう

でも、母さんは僕の事なんか考えたことはない

何時だって僕は桜果のついでだった

今日、朝にアリスに会って思ったこと

僕はそろそろ綾兎に言わなきゃいけない気がする

そう 二年前の事件の真相を

アリスの話を聞いて、神城拓海という人が僕の部屋に来て過去を
とか言っていたけれど

其れには絶対的な誤解がある

だって、彼の事件は

ガッツ 「あうっ!？」

そんなことを考えながら歩いていたら、駅の入り口の壁にぶつかりました……痛い

前を向かないで歩くのは結構危険だなあ

額を擦りながら、隣にある駅の階段を昇り……僕いつの間に駅に着いたんだろう？

……無意識は怖いです

改札口に着いてから、電子カードになっている定期券をタッチして改札口を抜ける

階段を降りて（この駅にはエスカレーターは存在しません）ホームに立つ

階段を降りると同時にやって来た十分に一本あるかどうかの電車に乗り、三駅目の駅に向かった

ガタンッガタタンッ

……ふわあっ、暇だあ

ちよつと眠くなつてきたのはアリスに少し睡眠を妨害されたからだろう

十分位で目的地に着くまでの間、ドア付近に立つてドアにもたれ掛かるようにしてウトウトしていたら携帯電話が震えたので、優先席から少し離れた所で携帯電話を開いた

画面を開くと、待受画面の下に『メール受信』の表示が出ていた

恐る恐る送信者の名前を確認

……あ、水無瀬だ

睦月じゃなかったことにちよつとホツとし、メールを開く

「……………うわぁ」

見なきゃよかった……後悔

メールにはこう書かれていた（打たれていた？）

受信：水無瀬十夜

件名：何があつたんだ？

本文

『お前がなかなか学校に来ないから心配で結依さんに電話をしたら、受話器越しにお前の叫び声が聞こえたんだが……一体何やっている

んだ？

天宮と雪代が心配してるぞ？』

……はい、すみません

何だかんだで皆に迷惑かけていました……反省

僕はちよつと考えてから返信ボタンを押し、文章を打った

カチカチカチカチ……

『ごめん、寝惚けました。結依さんに手作りマフィンを貰ったのでこれから持っていくます

僕は大丈夫……なので心配しないで授業に挑んでください。そしてお昼ご飯奢ってください。お腹空きました。死にそうです』

送信ボタンを押し、携帯電話を閉じてポケットにしまう

……よし、此れでお昼代が浮く！

其のお金で帰りに新しい枕を買えるぞ　　っ！！

わーい

本来なら綾兎に枕代を請求したかったけれど、アリスに会ったことを黙認しなきゃならないのと綾兎が不憫で可哀想なので自分でお金を出して買うことにした

羽毛入りの枕が一番だと思っているけれど、低反発の枕にも興味がある……どうしようかなあ

僕の睡眠ライフは枕で決まります

本来なら一般男子高校生はもうちょっと性的な事に興味があるだろうけど……非日常な人生を送っているからなのか

そういう事には全く興味がない

……断言したら悲しくなってきた……

だって睦月といいアリスといい……女らしさが欠けてるというか……睦月は腐女（以降自主規制）だし、アリスは純粋だけどちょっとズレてるし

双子として育った従姉妹の桜果は女らしくて可憐で純粋だったけど……うん、怖いので触れないでおこう

……ん？

ポケットからメールの返信でも来たのか携帯電話のバイブの振動を感じた

ストラップを引っ張って携帯電話を取りだし、開く

水無瀬からの返信

『……さつさと来い』

……昼御飯の件はスルーされたみたいだ……残念

ガーツ

シユンと自分に耳がついていたら垂れ下がっていただろう状況の中、目的の駅に着きドアが開く

僕は電車から降りて改札に向かう

ふと手にしていた携帯電話の待受画面に表示してある時間を見て僕は固まった

現在時刻十一時二十分

只今三時間目の授業中……もう泣きたいです

帰りたいけど手作りマフィンを届けなくちゃいけないし……うう

改札を抜けて駅から出た後、僕はトボトボと商店街を歩き桜並木の続く住宅街に足を運んだ

学校に着くまでもう少し掛かるよ……はあ

「遅い（よ）（です）っ……！」

「……すみませんでした」

結局、三時間目の休み時間に学校に着いた僕は、水無瀬・睦月・綾兔……そして何故かクラスメイト全員に怒られました

なので教室の中心に正座で座るはめになり、ランチを受けるかの様に僕の周りを生徒全員を取り囲むという異様な光景が広まっていた……

「なんだったのよ、朝の叫び声は？」

代表として睦月が言う

……人と会って、其の人が空から帰っていったなど言えるはずはなく……仕方ないので結依さんに言ったことを其のまま口にする
「嫌な夢を見て……多分寝惚けたんだと思います。理由は知りません」

「嘘だっ！！」

「だからひぐ しネタはやめてって……怖い」

睦月の目が某レ さんの様になっていて怖いよ……

「クスッ 恐怖に魅せられてる杏くんの顔……ゾクゾクするわぁ」

「誰っ！？ 教室内にドSの女王様が居るよ?？」

「「……………ニヤニヤ（クラスメイト一同）」

「ニヤニヤしないで誰か答えてよ……さっき言ったの本当に誰なんだよ……うう」

いろんな意味で恐怖によって精神が犯されてきた……逃げたい

キンコーンカーンコーン

「ちっ、みんなこれ位にしておこつぜ」

「「……………チッ（クラスメイト一同）」

「舌打ちっ！？……もう帰りたい」

何で僕はこんな目に会わなければいけないのだろう

今日の遅刻の原因は僕のせいじゃな　半分は自業自得かもしれないな

クラスみんなが自分の席に戻っていくのを確認し、僕も自分の席に座る

鞆の中の教材を机の中に押し込み、鞆を机の脇に掛ける

……あ

「水無瀬、はい」

「え？……ああ、メールに書いてあった結依さんの手作りマフィンか。サンキュ」

「うい」

水無瀬に紙袋に入ったマフィンを渡す

水無瀬はメールで察していたらしく、普通に受け取った

そして、紙袋を片手に席に着き、教科書で隠しながらひとつ目を食べ始めた……良いなあ

「……ふい」

ぐったりと机に伏せる僕を見て、呆れたような目線を送ってくる睦月と綾兎

僕は疲れて二人と話す気にはなれず、四時間目の授業は適当に過ごすことにする

……成績に響きが生じていることから敢えて背けることにした

↓放課後↓

「さて、今日は一体どうしたのかなあ？ 杏？」

「朝説明したとおりだよ。昨日携帯電話のアラームを設定し忘れて、尚且嫌な夢を見た……気がする。だから寝惚けて叫んだんだよ」

睦月に問い詰められ、さっきと同様に答える

言葉の後によく覚えてないと付け加えた

「……そっか。なら良いや。私は仕事があるから先に帰るよっ。じやっ……！」

まだ納得していないみたいだったけれど、にこやかにそう言って教室から去っていく睦月

「気を付けてね。また明日」

ブンブンと手を振り、睦月を見送る僕

……睦月に嘘をついた事に罪悪感を感じた

睦月も何時も以上には突っ掛かって来なかったし……なんだか陰謀を感じるよ

でも、この事に睦月達は巻き込みたくないし、アリスとの約束を守りたかったから仕方がないけれど……なんだかなあ

「さて……と」

クラスには僕と水無瀬、綾兎しかない

水無瀬は教室の壁に掛けてある時計を見て、「俺は部活に行ってくるからな」と言っただけで睦月の後を追った

「部活頑張っただけ」

「おう」

声を掛けると水無瀬は軽く返して足早に出ていった

無理だと思っていた昼食を奢ってくれたのには感謝感謝

焼きそばんと明太子のフランスパン……美味しかった

お弁当のおかずも分けてくれたし……はんばーぐとミートソース
パゲッティに……アジの干物の組み合わせには啞然としたけどね

さて………

………

「杏………」

「綾兎………」

何でだろう……僕と綾兎の間に微妙な距離感を感じる

『………よしっ』

ここで話をするのもなんだし、綾兎の寮にでも押し掛けるか

思い付いたことを其のまま言葉にした

「綾兎……二人きりで大事な話したい……綾兎の部屋に行っちゃ駄目かな？」

「っ!？」

綾兎は僕の言葉を聞いて、何故か顔を真っ赤にした……何で？

「杏……それはその………はい」

段々顔が赤くなってくる綾兎……熱でもあるのだろうか

「綾兎……顔が赤いけれど大丈夫？　もしかして熱でもあるの？」

普通の人間とは違えど、綾兎達『住民』も体調を崩すのかもしれない
体温でも測ろうかと、手を綾兎の額に触れ

ビクッ　「!？」

……今、凄く拒絶されたような……うう

「杏は何で平然として……あうう」

「??？」

綾兎は一体何を言っているのだろうか……分からない

綾兎は考えを拒絶するように首を振った

「杏は……杏には水無瀬さんが居るじゃないですかっ!!」

「は？」

分からない……綾兎は一体何を　ん？

ふと視線をずらし、睦月の机の中を見る

机からはみ出したらしい、睦月のものであろうライトノベルを取り出す

……あ

表紙を美少年二人を中心として、周りには薔薇の花が描かれており……キラキラしてる

著者：天宮睦月

『僕たちの未来』

ボーイズラブ小説の新作かなと思い、背表紙に書かれているあらしじを見る

……

……おい

以前に内容確認をしたBL小説

確か担当さんに『この話は僕の精神を圧迫するので出版は止めてください……』とお願いしたはずなんだが……何で文庫本として此処にあるのだろうか

耽美な文章で煽つてある帯を見ると、今日が発売日だった

ゴソゴソ……パカッ

僕は綾兎をほつときながら携帯電話を取りだし、睦月の担当さんに電話をかける

プルルルルッ ピッ

「あ、もしもし？ 氷月ですが」

「氷月君！？ ごめんなさいっ！！ 彼の女が私にクスリを盛つて、私がつ倒れている最中に其のまま印刷会社に原稿を持ち込んで勝手に出版しやがったの！！ ごめんね、本当にごめんねっ！！」

……電話越しに凄い勢いで謝られました

そして話の中の会話で、睦月が担当さんを潰して原稿を投稿したことが発覚

だから最近睦月と連絡とろうとすると、電源が入っていないときが多いのか……納得

其れでも……彼の話が世間に流通してしまったことに……物凄く泣きたい……うう

「……そうですか。謝らなくていいですよ……そちらの会社に利益を出せたなら僕はそれで……はい」

声を搾り出しながらなんとか言葉を繋ぐ

今まで担当さんとこんな風にギスギスした電話をしたことがなかったので、お互いにいろんな意味で緊張しているみたいだ

「今度彼の子の収入の一部と一緒に飲もうね！！ 私は対応に忙しいから電話切るね。本当にごめ」

ブツツ ツー、ツー

不意に途切れる電話

電話が切れる直前に『必殺 蹴散らせ、スタングレネードっ！！』
と言う馴染み深い声がしたのは気のせいだろうか

……天宮睦月・恐ろしい子

一体何処から一応環境に優しいであろう兵器を手に入れたのだろう
……ネットの裏サイトかな……

世界は広いです

其れはもう……とてつもない位に

僕は携帯電話をしまい、綾兎に向き直る

綾兎は僕と担当さんの会話が聞こえていたらしく、「あ……なる……
……ほど」とか呟いていた

「綾兎……知ってしまったんだね。僕の秘密を……」

「……う」

ふうつと息を吐く僕

現在、教室にはシリアスな空気が漂っております

「「……………」」

二人の間にまたもや沈黙が生まれる

……まあ、睦月の担当さんと本の出版まで相談できるなんて……普通の高校生からはズレてるしね

「……やっぱりそうなんですね」

「綾兎……？」

やっぱり……呆れられてしまったのだろうか

「……分かりました。ボクも男です。杏がそうならボクはっ」

「綾兎……その、なんというか……」

なんか綾兎の言っていることに疑問符が浮かぶことがあるんだけど……納得してくれてるみたいだし良かった

「杏はホモだったんですねっ！！でも、そんな杏でも僕は拒絶しませんから！！！」

「……ちょっと、それは違う！！」

「……え？」

綾兎の発言に思わず耳を疑ったけど、直ぐに我に帰り、反論する

綾兎は僕の言葉を聞いて、唇をワナワナさせながら「だって……だ
って……」と呟く

どうしてそういう風に考えてしまったのだろうと思い、僕はふと手
元にあった睦月の文庫本を見る

確かこの小説って……僕と水無瀬がモデルになって……ハッ！？

まさか……

「綾兎……もしかして、睦月にこの小説……読まされた？」

手元にあった睦月の文庫本を綾兎の前に突き出して言う

「ああああ……その……はい、読まされました。だから……その……」

動揺したように明らかな挙動不審な言動をする綾兎

……これでやっと理解できた

綾兎は小説と現実の僕がごちゃごちゃになっていたんだ

見れば分かると思うけど……僕と水無瀬は只の友達（+幼なじみ）だ

過去・現在、そして未来でも……水無瀬とB.Lな展開になるなんて

事は絶対ないだろう

それだけは断言できる

「綾兎……此れは睦月の妄想が実体化したものだから……実際の人物・団体は一切関係ないんだよ？」

「……そうなんですか？　だって二人ともなんだか意志疎通が出来ますし……怪しいじゃないですか」

ああ……だからそういう風に思ったのか

「あのね、僕と水無瀬は『幼馴染みだからなんでも分かっちゃうんだよ法則』で結ばれているんだよ？　だから、意志疎通が出来るんだ」

キラキラと僕の背後が輝いているような感覚を感じ、綾兎に言う

「な、成る程……です」

半分は冗談なのに何だかんだで信じている綾兎がいた……純粹すぎるよ……

綾兎にはこのまま純粹で育ってほしいなあ……アリスみたいにちょっとズレているけど、まだまだ許せる範囲だしね

「誤解も解けたみたいだし、綾兎の部屋に押し掛けるぞ　っ！！」

「あ、はいっ！！……え？」

なげやりの話を勝手にまとめる僕

今日はちゃんと綾兎と向き合ってみようと思った

だから此のときは気付けなかった

二年前の彼の事件には、恐るべき事実が隠されていたことに……

第六章　　巻き込まれてく運命【さだめ】（前編）

　ある一室にて

＊夜の静かな窓辺＊

月明かりが明るく、幻想的な世界を造り出す……

そんな中、一人の少女は窓辺に向き、其処に居るもう一人の少女に向き直るように居た

窓の縁に座る少女……アリスは月の明かりで眩く輝いているように見える

能力を利用して生やしたのであろう風の翼を身に付け、まるで天使のようだった

「お前の大切な『氷月杏』はなかなか愉快な奴だったぞ」

……口調は全然天使らしくなかったが……

アリスの声を聞いて、ベッドの上に座っていた少女は眉間にシワを寄せた

そして一言

「……アリス……貴女、勝手に彼の子に会いに行ってしまったのね。人の断りも無しに……ニコツ（微笑）」

少女の背後にはドス黒いオーラが滲み出でて、アリスを襲う

「取り敢えず……作り笑いは止めてくれ……怖いぞ」

「お節介ね。全く……で、ちゃんと渡してくれた？ 『本来』『氷月杏』が持っているはずのものを……」

「ああ、なんとか渡したぞ！」

少女の言葉にアリスは言葉を返す

ちょっと声が震えていたのは、少女の掛ける無言の圧力のせいだろうか……

少女はアリスの反応を見てやれやれというように『ふう』と息をついた

「なら良いけど……アリス」

「何だ？」

少女の問いかけににこやかに返すアリス

少女は少し躊躇いを見せた後、徐に口を開いた

「……もうわたしの事なんかほっといて、弟くんの所に帰っても大丈夫よ?」

「……ワタシがオマエを手放すと思うか?」

「……無理ね。(まる)」

「。(まる)まで言わなくていい」

お互いを見つめ合ってクスリと笑う

初めて出逢ったときから、二人はお互いに自分に近いものを感じていた

だからこそ、お互いが居なくなることには不安を感じているのかもしれない

アリスは宙を眺めつつ、少女に言う

「そうだな……『氷月杏』が『覚醒』して、『事件の第三者』を倒してくれたらお前と一緒に彼処に戻れるかもな……あの……微睡みに浸っているような日常にな」

少女はアリスに申し訳なさそうな表情を向ける

アリスは少女に近づき……壊れ物を扱うように……慰めるように少女の頭を撫でた

そして、自らもベッドの上に腰がけ、少女を抱き寄せる

少女はそのままアリスに身を任せ、小さく呟いた

「そうね……今は祈りましょう？ キョウが未来を変えてくれることを……」

二人の祈りを見守るように

月の光は二人を照らしていた……

第六章 巻き込まれてく運命^{さだめ}

（IN・屋上）

誰も居ない私立聖桜高校の屋上

風が舞い木の葉が飛んでゆく中其の子は居た

「そろそろ動き出さないとまずいかなあ（・・・）」

髪をツインテールのように頭の上の方で結び、アニメのキャラクタ
ーのコスプレに見える服装の女の子は一人、空を眺めつつ独り言を
呟く

「早くきょーくんを殺して、おーかちゃんをお姉さまに……じゃ
ないところちが殺されちゃう（>|<:）」

『どうやってきょーくんを殺そっかなあ』と空想する

惨殺が一番得意なんだよなあ

……胸を一回刺すだけでも、大輪の紅い花が咲いたみたいになって
綺麗だろうし

きょーくんは髪の色素が薄くて色白だから血の紅が映えるんだろう
なあ……

眠っている表情も良いけど、絶望に染まった表情で殺してあげたい彼の……傷一つ無い身体に、深く……抉るように酷く……

何処から出したのか女の子の片手には鋭く磨かれたカッターナイフが一本握られている

冷たい光を放つカッターナイフは、まるで女の子の心を写しているようで……

女の子の瞳には一切光が映っていなかった

いつの間にか、女の子の周りには膨大な量の闇が広まっている

女の子は虚空に向かって小さく呟く

「きょーくん。ときょーくんはどっちが先に死ぬんだろうねえ？」

周りに広まっていた闇は女の子を包み込み

存在ごと、此の世から消した……

〈IN・男子寮〉

「……立派だね……」

「そうですか？」

彼の後僕達は其のまま綾兎が住んでいる男子寮に向かい、今に至る……

一体何処からお金が入るのか、理事長やOBの財政力が凄いのかは分からないが、男子寮は女子寮に劣らず立派だった

友人として付き合い合っている幼馴染みの水無瀬は僕の隣に住んでるから、寮生活じゃないし……なんだかねで今まで一度も聖桜高校の男子寮には来たことがなかった

だから寮を見て吃驚した

外見は外国風のレンガ造りで中は近代風の造り

寮長さんの許可を貰い、寮の入り口から中に入ると内装は女子寮とあまり変わらなかった

……男子寮だからもつとむさ苦しい所だと思ってました……すみません

前に説明し忘れたけど、各々の寮は五階建ての構造で、二階が三年生・三階が二年生・四階が一年生と学校の校舎内と同じように学年で階が仕切られている

各々の学年の階には、個別の部屋以外に大浴場・談話室・食堂・ミーティングルーム等があるらしい……凄いなあ

一階は寮生が全員集まれる大きさの部屋と玄関で、五階がゲストルームだそうだ

僕は綾兎に男子寮の中を軽く案内してもらい、寮の入り口に居た癒しのマスコットキャラの猫さんを（野良猫が居着いたみたい……）撫でさせてもらってから綾兎の部屋に向かった

ん？

あれ……何か違和感を感じる……

「ね、ねえ綾兎」

「？　どうかしました？」

僕の問いに前を歩いて僕を案内してくれていた綾兎が振り返る

階段僕は立ち止まり、今居る階を確かめた

今は三階……つまり僕達と同じ二年生が暮らしている階

だけど綾兎は其の階を通りすぎ、上の階に行こうとしていた

「綾兎、三階過ぎてるよ？」

「あ……ボクの部屋がある階は三階ではなくて五階なんですよ……」

あははと苦笑する綾兎

あれ？ でも確か……

「五階つてゲストルームじゃないの？」

「そうなんですけど……ボクを含める十数人の生徒は五階で暮らしているんです。お陰で同学年の人とは殆んど関わりがなくて……」

という綾兎

「部屋が足りなかったとか？」

「いえ……そういうのではなくて……」

珍しく歯切れの悪い綾兎

一体何が……

僕が疑問符を浮かべていると、綾兎は「部屋に着いてから話します

ね」と言い僕達は先へと進んだ

階段を上がり五階に着くと、綾兎は通路を歩いて五百十二号室の前で止まる

此処が綾兎の部屋か

え？

焦げ茶色のシンプルなドアの脇には部屋の番号とネームプレート、呼び鈴そしてカードキーを通す機械

……そして、暗証番号を入力するパネルと指紋照合の機械が……あれ？

此処……学校の寮だよね？

こんなにセキュリティが付いてるなんて……何処のBIPの部屋ですか……？

「セキュリティが万全なので助かります あ、杏はちょっと後ろを向いててください」

「？ 良いけど……」

綾兎に促され、後ろを向く僕

どうして後ろを向かなきゃいけないのかなと思い横目で後ろを見る

ピッ、ピッピッピッ、ピーッ

あ……セキュリティの解除か……暗証番号とかは他人に見られたらいけないもんね

ガチャッ

「杏、もう大丈夫ですよ。今から十秒以内に入ってください」

「十秒以内!？」

綾兎に言われ慌てて扉の中に入る……セキュリティ凄すぎるよ……

「……おおーっ」

セキュリティ万全な扉を抜けた先には……マンションの一室に近い普通の部屋でした

白と焦げ茶色を基本としたＬＤＫのシンプルな部屋は間取りも良く広々としていて使いやすそうな造り

部屋の隅には観葉植物が置いてあり、初めて来た僕でも落ち着けそうだった

綾兎の部屋は一人部屋のようで、思ったよりも私物が少ない

台所の食器棚にはお皿などの食器は入っていたが、普段は使われていないみたいで……調理器具が見当たらないところを見ると、料理はしないのかもしれないな

「杏、冷たいお茶で良いですか？」

「あ、別に気を使わなくて大丈夫だよ？」

「でも話をするなら、飲み物とお菓子は必要ですよね」

綾兎は鼻歌を歌いながら、段ボールの中から徳用パックのお菓子を数種類取り出し、器に盛り付けていく……量的に明らかに二人分じゃない

そして鼻歌はいつの間にか歌に変わり、綾兎は歌い始めた

「はーるの、うらーらの、皆殺し」

……また歌詞を間違えて歌ってるよ……

いやあ、和むなあ……ちょっと恐いけど

綾兎は歌いながら備え付けの冷蔵庫から二リットルのペットボトルの緑茶を取り出し、氷を入れたグラスに注いでいく

六月下旬になった今日この頃

其の割には今年は空梅雨みたいで雨は殆んど降らず、変わりに暑い日差しが結構照り付けてくる……窓側の席なので日差しの眩しさで黒板が見えないことがしばしば

カーテン閉めると結構寒いし……省エネに協力しているらしく、教室にクーラーが付いてるのに付けてくれないのさ

昼間は暑いのに夕方になると結構冷えるので話の場所を綾兎の部屋にしたのは正解だった

別に僕の家でも良かったけれど、今日は朝にアリスが来てゴタゴタした後だったし、僕の家までは電車かバスじゃないと行けないので交通費がかかる

流石に綾兎に交通費を出させるわけにはいかないもんね

其れに能力を利用してアリスのように来られても困るしね

能力を使えば交通費が浮いて良いだろうなあ……

僕はリビングに設置してあるソファアに座り、ローテーブルの隣に鞆を置いた

室内の温度はちょうど良かった

夏服は動きやすい分不便なんです

「お待たせしました」

「ありがとう、綾兎」

台所から器に入れたお菓子とお茶を持ってきた綾兎からお茶の入ったグラスを受け取り、お礼を言う

「……あう」

綾兎は僕の言葉に照れたのか、少し顔を紅潮させていた

そして僕の隣に座り、持ってきたお菓子をもきゅもきゅと食べ始める

僕は綾兎の様子を見ながらくすりと微笑み、グラスに入ったお茶を少し飲んで喉を潤す

さて、そろそろ始めるか

コトンと音を立てグラスをローテーブルの上に置き、僕は隣の綾兎を見る

「綾兎……詳しくは語れないと思うけど、これから話すことを聞いてほしい……信じられない話だろうけど、全て本当にあったことから……」

「！……分かりました」

綾兎が同意してくれたことにほっとし、僕は話を始めた

私はなんでキョウにあんなことをしてしまったのだろう

只、一緒に居たかっただけなのに……

彼の頃わたしは、通っていた学園の人間関係に困っている最中で……少し鬱気味だったのかもしれない

そんなわたしを何時だってキョウは気遣ってくれた

当番だった家事を代わってくれたり、わたしの抱えている相談に乗ってくれたり……

わたしの抱えていた悩みは過去にキヨウも経験していたものだったから……

キヨウは優しくかった

わたしに尽くしてくれた

わたし達は唯一無二の存在

其のことがわたしの心の支えだった……

ある日、ちょっとしたことでキヨウとわたしが姉弟……つまり双子ではなく従姉妹だと知ったとき、わたしの心は揺らいだ

彼の家でわたしだけが他人

其れが辛かったの……

でもキヨウはそんなわたしに居場所を創ってくれた

『此処に居て良いんだよ』って言うてくれた

嬉しかった

凄く、嬉しかった

キヨウがわたしに居場所を創ってくれたお陰で、其のあとも普通に

過ごすことができた

普通の日常

普通の生活

毎日が楽しかった

其の内困っていた人間関係の問題も落ち着いてきて、学園での不安も消えた

其のことをキョウに伝えたら『良かったね』ってわたしを抱き締めてくれた

其れは少しくすぐったくって……暖かくて……

迂濶にも泣いてしまったわ

そう……彼の日も普通だった

学園に行つて、帰ってきてからキョウが作った夕食を食べて、其れから

……気が付いたらわたしは病院のベッドの上で

キヨウとは離ればなれになって いや、キヨウの母親 養母さんによつて引き離されていた

養母さんは『あれはキヨウが原因だから、もう二度とキヨウを貴女に近付けさせない』と言つていた

『其れは違つつ！ キヨウは悪くないの！！』

養母さんに言いたかつた

だけど、其れを言つたらキヨウが創つてくれた居場所を消されてしまふ氣がして恐かつた

言えなかつた

そう……彼の事件はキヨウは全然悪くなかつた

むしろ悪かつたのはわたしだった

だつて彼の事件は、わたしがキヨウの

「 で、今に至るんだ」

「……………」

すっかり氷が溶けきって薄まってしまったお茶を一気に飲み干し、最後の言葉を付け足した

「……綾兔……？」

過去に起きたことを殆んど話し終えた僕は、隣に座っている綾兔に声をかけた

「……………」

「……………」？

呼び掛けても、俯いたままビクともしない綾兔の顔を僕は除き込む

……そして固まった

「……………つきゅ〜」

「綾兔！？」

……綾兔は脳の情報収集量を超えてしまったらしく、グッタリしていた

「綾兔っ！！ 取り敢えずお茶飲んで落ち着こう？」

「……………はい……………」

僕は立ち上がってソファーに綾兎を横倒しにして、背中を支えつつローテーブルの上に放置してあったお茶の入ったグラスを取り、綾兎に渡し

ッルッ 「あ」

バチャッ 「にやわっ!？」

……氷によって内部を冷やされ、部屋の気温は二十度前後……

内部と外部の気温差によってグラスには水滴（ 空気（水蒸気）が冷やされ液体になる〃つまり結露）が付き、グラスは濡れている状態

僕はそんな事はお構いなしでグラスを持ったため、見事に手が滑り

「何するんですか、杏!！」

……綾兎の胸元にお茶をぶちまけました

「…………ごめん…………」

落としたグラスを手に取り、服を濡らしてしまったのは僕のせいなので、素直に謝ることにする

綾兎は濡れた部分をつまみ上げ、溜め息を着くと「仕方ないですね

……」と言つてソファから立ち上がった

着替えにでも行くのだろう

僕は綾兎を目で追いながらそんなことを考えた

しかし綾兎は、僕から少し離れたフローリングの床の上に立ち、濡れた部分に手をかざした

そして呟く

『再還』

綾兎の手から放たれた光に濡れた服の部分が包まれたかと思うも束の間、手を触れていた所から服に染み込んだお茶（氷が溶けたので薄まっている）がまるでシャボン玉のように浮かび上がり、お茶（氷が溶けたので 以降省略）が入っていたグラスの中に戻る

「おおっ」

形を持たない水が、操られているように僕が持っているグラスの中に収まっていく光景に僕は吃驚する

グラスの中に入ると同時にシャボン玉のような球体は元の姿に戻っていく

やがてちゃぽんと音を立てて、グラスの中はお茶（氷が 以降省略）で満たされた

同時に光は収まり、僕は持っていたグラスをローテーブルの上に戻した

……能力ってこういう使い方もあるのか……流石だな

「よし、これで染みにならなくて済みます」

「其だけの為に能力を使ったの!？」

僕は思わずつつこむ

そんな僕を横目で見ながら一言

「元は杏は溢したのがいけないんですからね!！」

「……すみませんでした」

折角僕の過去に何があったかを徹底的に話してあげたというのに、

綾兎の態度がちょっと酷いと思う

そう思うのは僕だけではないだろう……絶対

綾兎は僕がローテーブルにテーブルに戻したグラスを僕のグラスと一緒に台所に持っていき、中身を流しに捨てる

そして、中を軽く濯いだから冷蔵庫の中からオレンジジュースの入ったペットボトルを取り出し、グラスに注ぎ入れた

そしてリビングに持ってきて、コトンと僕の前に置く

……さっきのこともあったのか、氷は入れられていない……まあ良いか

僕はソファーに座り直し、言葉を待った

綾兎は自分の分のオレンジジュースに口をつけてから、ローテーブルにグラスを置き真っ直ぐな視線で僕を見る

ふざけなど一切ない、決意に満ちた瞳で

「『氷月杏』、貴方はどうして『生きていられた』のですか……？」

「……………さあ」

放たれた綾兎の言葉に僕はすつとぼける

綾兎はそんな僕の態度に不満を持ったのか、眉間に眉を寄せた

そして、更に言葉を放つ

「だって……………そんな過去を抱えていたら、普通の人間は此の世になんか……………」

「居られるはずないって？　でも僕は今生きている。其れに僕は只の人間では無いんだろ？　だったら有り得ない話じゃないさ」

「っ」

……………そう、余程の精神力がなかったら此の世には居なかった

其れは綾兎も理解している……………と思う

僕がどれだけ精神力を強く……………強いように思わせているのか……………

どうしてそうしなくてはいけなかったのか……………

綾兎は少し困惑した表情で僕を見た

『何かが変だ……………』そう思っているのが手に取るように分かった

「話を切り替えます……本宮桜果は今何処」

「死んだ」

「!？」

僕の言葉に驚愕する綾兎

其れでも僕は言葉を繋いだ

「詳しくは僕も知らないからはつきりとは分からないけど……母さん……いや理音さんは僕の事を「人殺し」って言ってたし……二年前の彼の事件以降に一度も桜果に会っていないからね」

「どうして……どうして否はそんな風に桜果さんに対して思うんですか!？ 実の双子ではなかったとしても従姉妹じゃないですか!？」

ありのままを話す僕を、綾兎は否定する

「……彼の日から僕は桜果の事を恨んでいるからかな」

「っ!？」

「家族とか関係ない、只個人的に『とある事』で桜果を恨んでいるから……だから桜果の事を捜そうなんて思わない。別に知ったってどうでも」

「杏っ!!」

パンッ

自分の事を他人事のように話していた僕の頬に何かが当たった

其れはじわじわと鈍い痛みに変わり、皮膚の下から熱が出てくる

……今、僕は何をされて

下を向いていた顔を上げると、綾兎の右手が見えた

一瞬の出来事だったためよく分からなかったが、綾兎が僕の頬を打ったのが分かった

「どうして貴方はそう　っ!？」

不意に僕を打った勢いのまま、話していた綾兎の言葉が途切れた
言葉を失ったと置き換えた方が分かりやすいだろう

綾兎の言葉が途切れた理由は分かる

さっきまで嫌なほどに笑顔を張り付けていた僕の顔が……造った表情が歪んだのを感じたから……

意識が混乱して視界から色が消える

二年前に見た時と同じように世界が灰色に染まって見えて……

でも、其れは仕方ない事なのかもしれないと思った

そう思うしかなかった……

綾兎の視線が僕に向いているのが分かる

僕は其れを拒絶する術を知らない

過去に囚われてずっと動けなかった僕なんか

急に鼻の奥ががツンツと痛くなつたと同時に、瞳奥から温かい何か
が溢れて頬を伝った……

「杏……」

「っ……」

綾兎が僕の名前を呼んだ

呼ばないでほしい

そんな優しい声で……温かな声で名前を呼ばないでほしい

僕が僕で居られなくなりそうで 怖いから

「ずっと辛かったんですね……」

「……う……っ」

目元から溢れた涙は、まるで堤防が決壊したかのように次から次へと溢れだし、どんどん頬を伝っていく

涙が綾兎に打たれた所に流れ、ジーンと滲みた

喉がヒリヒリと乾いていくも、目の前に置かれたオレンジジュースは飲む気になれず……そんな気力もなく……僕は止まることのない涙に只茫然としていた

僕だって桜果に会いたいと思っている

会って話したい

だけど、彼の事件の後……目覚めた時には僕はベッドの上で

真っ白な部屋の中、僕はベッドの上で横になって……身体のうちここに包帯が巻かれていた

他人事のように自分の身体を眺めていると

ガラッ 「……………」

扉が開く音がして、そちらに視線を向ける

恨みなら憎しみを瞳に宿した母さん……理音さんが入ってきて……

ツカツカとヒールを鳴らしながら僕の所にやって来て……

ガッッ 「っ!？」

僕の頬をボクサー顔負けのパンチで殴ったのだ

そして、ガシッと僕の襟首を掴み

「人殺しっ!!」

と罵ったのだ

其所で後から部屋に入ってきた父さんが理音さんを止めてくれたから、僕はこれ以上傷付かなくて助かった……と思いたかった

それ以降……理音さんと僕はお互いを避けるようになったのは言うまでもない

父さんは「杏はなんにも考えなくて良い」と言った

桜果の事を聞いたら、凄く悲しそうな顔をして……

桜果の事を唯一知っているのは理音さんだけで……

情報は何もなかった

だからこう思うことにした

『氷月……いや、本宮桜果は此の世から居なくなっただけ』って

彼の事件以降……僕は人の感情に敏感になってしまったため、必要以上に人と関わることを止めた

だけど、聖桜高校に入学して……『雪代綾兎』に出逢ってから……
自分はもう一度やり直せるんじゃないかと思うようになったんだ
桜果が居なくても、光に包まれているような……微睡みに浸ってい
るような此の世界で……

でも……

「やっぱり……無理なのかな……う……っ」

「無理……なんかじゃないですよ？」

「……？」

呟いた言葉に返事を返されて、僕は顔を上げる

綾兎は僕に申し訳ないような顔を向けた

「すみません……途中から杏の心を読んできました……杏、変わっ
ていくのは少しずつで良いんです。そう、花で例えてみると分かり
やすいかもですが、杏の心は種だと考えます。なにもしなければ種
は土にも埋もれることはなく、道に転がってプチッと踏まれて終わ
ります」

「……………例えば悪いような気が……………」

「黙って聞いてて下さい。……………だけど、世界から逃げようとして、種は土の中に埋まります。其れからは自分ではどうしようもないのです。……………ですが、誰かが光を与えてくれたら？ 水を掛けてくれたら？ 其れに答えてあげようって思いませんか……………？」

「……………」

「太陽の光がもつとほしい。もつとお水がほしい。芽を出して此処に在る（居る）って分かれば、答えてくれる？ もう少し大きく育てば？ 花を咲かせれば？ どうしたらボクを助けてくれた人たちは喜んでくれるかなあ……………って思っくんじやないんでしょうか？」

「……………そんなの……………綾兎の例えにすぎないんじや……………」

そもそも、此の世の中に僕と似たような境遇を送った人が何れくらい居るのだろうか？

其れなりに人数が居たら凄い事になるよ……………

うーんと考え込む僕（少しだけ涙は収まりました）

頭に疑問符を浮かべながら考え込む僕を見て、綾兎はクスツと笑った

「でも、杏にも居たんじやないですか？ そんな人が……………杏のお父さんも杏に此れ以上辛い思いをさせなくなかったでしょうし、今は水無瀬さんも睦月さんも……………其れにボクも居るんですよ？」

「あ……」

満面の笑みで言われ、ちょっとドキリとした

……いや、綾兎にドキツとした訳じゃないよ？

綾兎の言った言葉がなんと云うか……今までで一番心に響いた

付け足すように更に一言

「忘れないで下さい。杏の傍には何時だって杏の事を思ってくれて
いる人たちが居ることを……」

フワリと包み込むように僕を引き寄せる綾兎の身体はとても温かく
て……優しくて……

「綾兎……う……ありがとう……」

収まりかけていた涙がまたもや溢れだしてきた……

「杏……大丈夫なのですよ。ボクも……乗り越えられたのですから
貴方も……」

「綾兎も……？」

うっかり聞き返してしまった……綾兎の表情が一瞬揺らいた気がする
おずおずと綾兎を見上げると苦笑していた

「……そうですね。ボクも昔あったんですよ……でも、アリスのお陰でなんとかなったもんですね」

「アリス……結構いい人なんだね」

其れは今日、アリスに会ってみて少し……ほんの少しだけ思ったことだ

「時々振り回されて大変な姉ですけどね」

「会えなくて淋しい？」

ちよつと意地悪っぽく聞いてみる

「ええ……でも信じてますから」

「え？」

「彼の姉の事ですから、今頃樹海の中でもうっかり入って迷っているんだと思いますが……ボクは待ち続ける事にしました。帰ってくる場所を造ってあげるのがボクの役目ですから……」

ニコリと微笑み、窓の外に視線をやる綾兎

「例えが酷いのはスルーするけど……イチイチ突っ込むと疲れそう

だしね。……けど、悪くないな。誰だって一番に欲しいのは、安心できる場所なんだろうね」

そつ……まるで微睡みに浸っているような……安らげる場所

「杏……ですね　其れを造っていくのが僕たちの役目ですよ？」

「分かってるよ。あ、でも綾兎、一つ間違ってる」

「？　なんですか？」

綾兎の言葉に指摘をする

此の際だから、殆んど喋ってしまおう

「さっきのアリスの例えだけ……樹海じゃなくて……」「一般男子
高校生の部屋に勝手に不法侵入してえっちい本を漁り、大声で『寄
るな変態っ！』と閑静な住宅街の中で叫び……人の羽毛入りの枕
を裂いて台無しにして朝食を作らせ相手を遅刻に追いやっている」
が正解です。綾兎が深く追求すると、此の事を教えてくれた当事者
に何をされるか分からないから追求は無しの方角でお願いします」

「……何処から情報が入ったのか追求出来ないのが残念ですが……
杏……」「姉がご迷惑をお掛けして申し訳ございませんm（――）m
ペコリ」と一般男子高校生さんに伝えてください……彼のアリスら
しい行動といえますか……はぁ」

「分かった……伝えとく！」

話を聞いて呆れたように嘆息する綾兎を見て、僕は苦笑する

……ちゃんと伝わってるよ……綾兎

僕の心に……想いも全てね？

第六章　巻き込まれてく運命【さだめ】（後編）

第六章　巻き込まれてく運命【さだめ】（後編）

「……で、綾兎」

「なんですか？」

僕はおずおずと顔を上げ、綾兎を見つめる

綾兎はきよとした表情で不思議そうに僕を見る……うう……顔が近い

そして微妙な視線のぶつかりあいと沈黙が暫く続いた後、僕は少しずつ溜め込んでいた言葉を放った

「……いい加減、そろそろ放してくれないかな……涙は殆んど収まったからさ」

「えーっ」

「『えーっ』で、何其の反応……いや、なんというか……此のままだと危険なフラグが建つ気がする……状況的にお母さんにあやさされている子供みたいだし……うう」

「ぶーっ」

「ブーたれてもこればかりはねえ……ほら綾兎さん、放してくださいな？」

僕は綾兎の背中をばんばん叩き、優しく訴える

綾兎はボクの言葉を聞いて「……仕方ないですね」と呟き、僕を抱き締めていた腕を下ろした

僕は解放された身体を「んーっ」と上にぐにーっと伸ばした後、流した分の水分を補おうとローテーブルに放置していたオレンジジュースに手を伸ばし、喉を潤そうと口をつけ

「……杏の体温、温かったですう（ぽあん）」

「ぶはっ」

「……杏、汚いです」

嫌そうに顔をしかめる綾兎

……すみません、盛大に吹き出しました……確かに汚い……って

「綾兎……頼むから誤解を招くような発言はやめてよ……」

「……？　どういう事ですか？」

ローテーブルの上に備え付けてあったティッシュ箱を引き寄せ、溢したオレンジジュースを拭き、脇に置いてあったゴミ箱に捨てる

綾兎は自分の分のオレンジジュースを飲みながら疑問符を浮かべていた

「……天然で発言しているわりにはピンポイントに痛い所を突いてくるのか……」

「全て狙ってやっていることですけどね」

「っ！？ 駄目だ此の子、早くなんとかしないと」

ニヤリと怪しい笑みを浮かべた綾兎を横目で見て、思った事を其のまま口にした

綾兎がアリス同様に腹黒くなる前に何とかしないと……もう手遅れかも知れないけど

「昔から人に抱き締められるのが一番安心するんですよ　だから杏にも其の感覚をお裾分けしましたのです」

……言ってる事に同感できる部分もあるけれど、僕だったら恥ずかしくて口にできない事を述べる綾兎に、呆れを通り越して関心を覚える

只、『経験者』として一言忠告

「綾兎……性に飢えている人が聞いたらハグ所じゃ済まなくなるからね？」

「！　分かってます」

……そういう所はちゃんと分かって居るんだ

安心したよ……ま、経験者といっても僕の場合は只単に告白してきた相手が僕を女の子だと勘違いして、僕が男だと明かしたとたん逆ギレして襲いかかって来たただけだけど……腹部に一発蹴り入れて黙らせた

「確か迂濶に口にする……黒いスーツのヤクザさんたちに誘拐され、地下室に連れ込まれ四肢を拘束されて、一枚ずつ爪を剥がされていくんですね……怖いので気を付けます」

「そんな知識いったい何処からっ!？」

「アリスです」

サラリと述べられた意外な内容を聞いて、僕は今朝会った少女の顔を思いだす

手遅れなのは確実みたいだ……ゴソゴソ

「杏? あ、ポケットから一体何を　っ!？」

「丑の刻って確か午前二時だよね? 綾兎……」

時刻がうる覚えだったので一応綾兎に聞いてみる

「杏、五寸釘と藁人形持って何するんですか!? そして何処から調達したんですか!? そもそも制服のポケットに何でそんなものが!?!？」

「僕のポケットは異次元ポケットだからね」

「此処で明かされた新事実!？」

先日道端で拾った藁人形握っていたら綾兎に指摘された

だって住んでいるマンションの入り口に落ちていて、僕のものではなかったけど他の住民の方を怖がらせたくなかったし……捨てようとして制服のポケットに入れてすっかり忘れてた

「……ポケットが重いから鞆に移して帰りに神社で捨ててくるだけだよ?」

持ってても邪魔だし、怨念が宿ってる気がするから嫌だし……

「呪いですよね!? 危険を承知の上で……」

「綾兎……此の世には自分の身の危険を超えてまでやらなきゃいけない事があるんだよ?」

これを使って呪いをかけた人はそんな事は覚悟の上だっと思う……詳しくは知りたくない

マンションの入り口に落ちていたということは、住民さんの中に実行した人が、対象にされた人が居る可能性が高いわけだし……僕じゃないことを祈ります

其れに僕は未だ死にたくないのでも呪うつもりはない

アリスなら術祖返しとかできそうだし……できなくても勘でなんとかなりそうだ

「話の流れからして、呪いの相手はアリスですよ！？ ダメですよ！？ 其れだけは断固拒否なのです！！」

「……はあ。つまんない……」

「むきーっ！！ 遊び半分でないで下さい！」

ぜいぜいと息をはく綾兎を見て僕は満足する

此方は今朝アリスに散々弄ばれたんだから……弟の綾兎で遊んでも別に良いと思うんだ

朝食の分はお菓子とお茶でチャラになったけど、其れ以外はね……

特に羽毛入りの枕の分は………

羽毛入りの枕は僕の睡眠ライフには欠かせないもので……彼の枕は結構高かったんだよ

確か二千円位したかも……睡眠ライフを有意義に楽しむためには、

惜しみ無くお金を使います

「むづ……こうなったら見張らなきゃ行けませんね……杏」

「え？」

息を整えた綾兎がなにやら空想し始め、僕に声をかけた

此方は枕について考えていたため、綾兎が何を考えてるかは分からなくて……

「命令『今日は此の部屋に泊まること』です!!」

「……は？」

泊まり？ 何でそんなことに?? 今、突然巻き込まれたよね……

話についていけない僕を置いて、煌々とした表情で話を進める綾兎

「前に契約したときに言いましたよね? 『契約完了。此れより氷月杏は我が僕となる』って。だから杏は僕の下僕　つまり『犬』ですから、ボクは杏のご主人様なのですよ?　だから杏はボクの命令を聞くのです」

「アレって『綾兎の相方代理』って意味じゃなかったの!？」

今、驚愕の新事実が発覚しました……下僕か……辛いねえ

「……ん？ 此の部屋に泊まり??」

綾兎の言った言葉を反芻してみる

でも……良く良く考えてみると、今までの中で誰かの家（部屋？）に泊まったのって……水無瀬と睦月の所だけなんだよなあ

水無瀬の所は泊まりついてもお隣さんだから部屋の造りは変わらないし、睦月の時は原稿……彼の時は小説じゃなくて挿し絵で……パソコン処理じゃなかったから、睦月に散々トーンを切り貼りさせられて……フラフラの状態で電車に乗って家に着いて、疲れを取ろうとお風呂に入ったらトーンの削り滓が浮いてきた……良い思い出じゃないな

そう思うと、まともなお泊まりは初めてなのでちょっと楽しみかも……

ふと時計を確認すると、現在時刻は午後六時半で……

これからホームセンターに行って枕を買って帰る気にはならないし、明日は土曜日で学校は休みだし……前にバイトの先輩に『シフトを交換してくれないか?』と頼まれ、学校帰りにバイトをしたためシフトは入ってないし……

此の際だから、泊まりがてらに綾兎の苦手な数学（その他共々）でも教えてやるか

後二週間位で期末試験だしね

よっしゃっ、決めた

「分かった。今日は綾兎の部屋に泊まらせてもらっよ」

僕がそう言つと、綾兎はパアアツと顔を輝かせた

「わーいです 此の広い部屋に一人って結構つまんなかったんですよー 同学年とは違う階ですし……」

「そういえば、どうして綾兎と其の他十数人はゲストルームなの？」

「うっ」

男子寮に来てからずっと気になっていたことを聞くと、綾兎は顔を引きつらせた

……『部屋に入ってから教える』って言っていたから聞いて大丈夫なんだよね……？

「うう……其れはその……杏が此の『檻の中』に泊まるなら説明しておいた方が良いでしょう……」

「『檻の中』ってどういう事……？」

言葉の意味がイマイチ理解できない

「此れはゲストルームに住んでいる三年生の方から教えて頂いた例えなんですが……なんでも『一年生から三年生の男子』を『狼』だと考えると『ボクたち十数名』は『兎』にあたるそうです……其の意味は寮に入って直ぐに分かったんですが……杏ならボクの言っている事の意味が理解できますよね？」

「うん」

上目遣いで訴えてくる綾兎の言葉に即座に納得する僕

只でさえ男子寮と女子寮は結構離れていて……性に飢えているであろう男子が綾兎や僕といった『ちよつと可愛い美少年』……こほん、えつと『中性的』な人物が同じ檻の中（寮の事だろう）に居たら、手を出そうとする人も出るだろう

中には元々『そっち系』の人も居るだろうし……

偏差値のレベルも進学率も結構高く、生徒の意見を重んじている事を売りとしている此の学校でも、校則は緩めとはいえ……不純異性交遊もとい不純同性交遊は流石に不味い（あまりのイチャイチャぶりに黙認してOKになっているカップルも居るが……）

そういう事で問題が起きると責任を取らされるのは学校だし……評判は下がるだろう

先生達も最低限として、ゲストルームを用意したのだろう……面倒な事には関わりたくないだけかもしれないが

結局、学校は問題事は嫌いだろうし、できるだけ知らないふりをし

ている

そのくせ何故か恋愛に関しては密かに応援している所もある

変わった学校だよ。本当に……

ま、其所が気に入って此の学校に入学したのだけどね

ゲストルームが有るという事は、以前に同室の人同士でもいざこざがあつたのだろう

学校も事件はうやむやにしているが、此れ以上問題を増やさないためにセキュリティ万全な部屋を設置した

入学して、対象になりやすい人達を集めて隔離して……ちょっと嫌だなあ……

僕がもし寮に入っていたら、確実にゲストルーム送りだったのか……

氷月杏・過去に女の子に間違えられ、危ない目に遭わされた回数……およそ二十五回

毎回足蹴りで回避しています

そして、襲ってきた相手は次の日に必ず土下座しに来ます

…… 中学では『足蹴りの貴公子』という称号を授かりました

其の流れで一度授業でサッカーをして、シュートを決めたとたん突風が起こり…… キーパーがガクガク震えながら泣いてました

ボールの摩擦でネットが焼き切れたからです

其のボールがキーパーの頬をかすっただけ…… あれは確実にトラウマを植え付けたね

今でも時々水無瀬にサッカー部に誘われることもある…… 断ってるけど

……

…… あれ？ もしかして其の時点でもはや一般人じゃなかったのか？

過去の出来事に焦りを感じ、改めて中学生の時の自分を振り返ってみる

何でだろう…… さっきから冷や汗が止まらないんだけど……

……取り敢えず、迷シーン再生スタート！

中学生の僕。薄い茶色の髪が印象で学ランを着ている。外見が中性的な少年。良く女の子に間違えられる。勉強・運動能力が結構上の方で家事が特技……男女から共に人気があり、明るく前向きで純粋。

バレンタインデーには各学年の女子（時々『友チヨコだ』とか言われて男子から貰ったのもあったような……知識がある今は考えたくない）から義理チョコを沢山貰い（本命は流石に断りました）、ホワイトデーには何種類かのパウンドケーキを焼いて、一切れずつ切り分けてラッピングしたものを貰った人と水無瀬（なんか五月蠅かったから渡した）……後、余りを先生方（教頭・校長先生含む）に配ったりしてた

その頃は小説執筆の他にお菓子作りも趣味だったから、部活の部員にはよくクッキーとか焼いたのを持って行って皆で食べたり配ったりしていた

部室内にポットとティーカップと湯飲み・お皿とシルバーのセット（部員分＋先生分）……緑茶・紅茶などの茶葉を持ってきて棚の一部を占領し、顧問の先生に許可を貰うために先生をストーカーして浮気現場を抑え、脅したことがあったような……

「……う……（汗）」

ヤバイ……思い出していくと僕って凄く……危ない存在の気がする

……えっと、確か他にも……先生方の雑用をさりげなく引き受けつつ、保健委員をしていて文芸部部长……二つ名『足蹴りの貴公子』

……って

『中学生の僕って何者だよっ！？』

何処の漫画の主人公だ

もはや一般人じゃないじゃん……怖い……過去の自分が怖い

……あれ？　そういえば、先生とクラスメイトの陰謀で危うく生徒会長になりかけた記憶が……いや、もう考えないでおこう。うん

今では外見と趣味以外面影すらありません……

以上、迷シーン回想でした

此の記憶は即座に封印しよう！

……

………　いつその事、誰か此の辺の記憶を消してください（泣）

「杏……さっきから黙ったままですが……ひょっとしてボク、何か気にさわるような事言いました？」

「大丈夫、なんともないよ……うん」

「なら良いですけど……」

綾兎の気がそれた所で僕は話を変える

もう思い出したくない

「でも急に寮に泊まって大丈夫なの？ 話の内容を聞いてて、ゲストルームに泊まるのは結構不味いんじゃない……」

「杏なら大丈夫です 部屋には予備としての布団が一式ありますし、下着とかはお風呂には言っている間に備え付けの洗濯機で洗えば良いですし……服は僕のを貸しますよ。サイズには差はないですよな？ 杏、身長低いですし」

グサツとコンプレックスの部分を突かれた

「うつ……でも綾兎よりは高いよ？」

カチンッ

勢いで言い返したら、綾兎の方から妙な音が……ひょっとして、綾兎も気にしてた？

「むむっ、じゃあ何センチですか？ 僕は百六十二センチですが」

「え？ えっとその……百六十五センチ位……？」

思ったより差はなかった……綾兎ってキャラクター的に身長小さいってイメージがあるし、結構意外

「大して変わらないじゃないですか……じゃあサイズは平気ですね。別にムキにならなくて良いんですよ？（微笑）」

僕に向けられる綾兎の視線が痛い……何なんだよ

「うう……せめて後五センチは欲しかった……」

高校に入ってから何の因果かパツタリと身長が止まってしまった

牛乳を飲んだりして、カルシウムを摂取しても変化はなくて……もしかして遺伝か？ 父さん百七十位しかないし

水無瀬なんか小学校の時は僕と同じくらいだったくせに、中学からよきによき伸びて……今では百八十センチ後半なんじゃないか？ 彼の家系は陸さん（水無瀬のお父様）が身長高いし、水無瀬はサッカーをずっとやってるからだろうけれど……泣きたい

僕が項垂れていると、肩にポンツと綾兎の手が置かれた

僕を見て、ニコリと寂しげに微笑む綾兎

「落ち込まないで下さい。杏……其の事に関してはボクも同感です……う」

「だよね……」

二人して、明後日の方向を見やる

『神よ、僕に身長を……！』

心の中で、叶う事は恐らくないであろう願いを祈った

本当に現実は厳しいです……

「……それじゃ、寮長さんの所に宿泊届けを貰いに行きましょう」

「……だね」

ソファーから立ち上がった綾兎を追うように僕も立ち上がる

セキュリティ万全の此の部屋だから、出るときも急がなければいけない気がしたからだ

だから視線は扉の方に向いていたし、セキュリティ万全な部屋だったからこそ油断していたのかもしれない

僕も……そして綾兎も……

『「氷月杏。事の原点から考えるが、お前が闇に飲み込まれかけた所を綾兎が助けて、対の私の代わりにお前と契約したみたいだが……多分、闇は最初からお前自信を取り込む機会を狙っていたんじゃないか？」』

「っ!？」

ふと、今朝アリスが僕に言った事を思い出す

何故だかは分からない……急に頭の中で再生されたみたいで……

「杏……？ 顔が青ざめているんですけど……大丈夫ですか？」

「……へーきだよ」

僕の顔を伺う綾兎に心配をかけないように嘘をつく

どうしてだろう……さっきから嫌な予感がする

前に大きな『闇の世界の一部』に出会う直前もこんな感じがした

心の底から凍てつくような……

「杏、やっぱり体調が悪い」

ゾワッ

背中を逆撫でされた感覚

『違う……これは二年前と同じ!……!』

「逃げてっ!! あや」

「え」

咄嗟に出た言葉を口に出し、戸惑う綾兎を突き飛ばした

刹那

パリーンッ ドスッ

「っ!?! ……う……」

「杏!?!」

背後で窓ガラスが割れ、ガラス片が飛び散る

腕や頬をガラス片が切り裂いていく中、僕は茫然と立ち尽くし……

「…………カハッ…………っ!?!」

胃から何か熱いものが込み上げてきた

喉を焼くような熱さでおもわず咳き込む

ボタボタツと床に溢れた胃酸……だと思っていたものを視界に捉え、
僕は固まった

鼻をツンとかする甘酸っぱい鉄の匂い

口の端を伝っていく紅

身体を染め上げていく紅の液体

其れが自分から流れている事に気付くのに、何故か思考がなかなか
追いつかない

窓ガラスが割れたと同時に背中にぶつかった衝撃・音

それらは僕の背中から……腹部にかけて突き刺さっている『槍のよ
うなもの』が原因と分かったのは、身体から力が抜けてフローリン
グの床に崩れ落ちてからだった

ドサッ

「……………」あ……………」

身体を突き抜ける異物感に吐き気がする

「杏っ！！ くっ、『光の導く空へと照らせ！！』」

白い光に包まれて、長い黒髪の……元の姿に戻った綾兎を見つめる僕
綾兎は僕に駆け寄り、刺された部分に手をかざした

「今、傷を治し」

「させないよっ！！」

「「誰！？」^{です}」

僕と綾兎の音がハモリ、声のした方向を見やる……僕の声が掠れて
いたのは敢えてスルーしてください

綾兎は咄嗟に小さく呟き、『聖杖・クロスセリア』を出現させ、目
の前に構えた

「未だ生きてるなんて、思ったより強情なんだねえ……きょーくん
？」

パキッとガラスの欠片を踏みつつ、ベランダから室内に入ってくる少女

ツインテールのように頭の上の方で二つに結ばれた髪

幼い外見に見えるのは、少女の着ている服が制服ではなくてアニメキャラクターの魔法少女の服みたいにフリフリのヒラヒラだからだろうか……睦月に付き合ってるせいでコスプレに見えてしまう……泣きたい

少女の周りを『闇の世界の一部』が囲んでいたせいで、顔ははっきり見えなかったが……其れは僕がよく知る少女の声で……

「……閑崎……さん？」

「やつほ、きょーくん。そしてあやとくん……いや、『光の住民』さん？」

睦月の友達であり、僕達のクラスメイト……閑崎観柚が居た

瞳には一切光は写っておらず、口元だけがニヤリと笑っている

閑崎さんはてくてくと僕達の傍まで歩き、僕の目の前でしゃがみこむ

「きょーくん……いたい？」

「あ……た……」

『当たり前だ』と言ってやりたかったが……まずい……もう声を出す氣力がない

身体も動かないし……声がよく聞こえない……

「閑崎さん、貴方は一体　　っ、杏に触らないでくださいっ!!」

綾兎の声が微かに聞こえる

駄目だよ綾兎……早く……逃げて……

「『風華・レジエント!!』」

綾兎が唱えたと同時に、突風が舞い上がり閑崎さんを襲う

「うるさいなあ……『光の住民』さんは黙っててよお?」

「なっ」

「『再返』」

ドンッ強い衝撃波が生まれ、綾兎の技は跳ね返され……

ドカッ

「あ……」

「っ…………杏…………う」

「あはははっ、あやとくんよわーいつ（> <*）」

綾兎が後方の壁に叩きつけられ…………っ…………駄目だ、視界がぼやける

グイツと襟首を掴まれ、閑崎さんの顔を見上げる

喉が『ひゅーっ』と音を立て始めた

…………ヤバい…………ひょっとして僕…………瀕死状態なんじゃないか…………？

「本当すごいよね。でもさ、今きょくんのおなかに刺さってるこれを抜けば…………死ぬんじゃないかなあ？」

「っ」

確かテレビのサスペンスとかでよく観る光景

刺されたままで死ななくとも、刺したもの…………例えばナイフとかが栓の代わりをしている場合がある

傷口を切り裂いたとしても、ナイフの刃の部分がストッパーの役割をしているため、血は隙間からジワジワ漏れる位だが…………刺された直後に其れを引き抜いたら？

『……………僕、死亡フラグ立ったよ……………』

出血多量で失血死及びショック死

こんな状況でも、ある程度冷静に判断できる自分に新ためて恐怖を覚える

「きょーくん、コレは観柚のものだから返してね」

ズブッ

『槍のようなもの』の持ち主は閑崎さんだったらしい……………当たり前か
身体の中に埋めれたものは閑崎さんによって部造作に引き抜かれ

「杏っ、きょ……………いやあああっ!」

綾兎の女の子みたいな叫び声と共に、異物が抜かれた傷口は血液の
循環を再開し 視界を紅く染めた

腹部は燃えるように熱いのに、指先から冷たくなっていくのを感じ
ながら……………

「さよなら、きょーくん」

僕は意識を手放した……

第七章　過去の記憶、そして（前編）

駄目だ……まだ僕は死にたくない……

死ねない……死ぬわけにはいけない

二年前の彼の時と同じ様に、僕は心の底から普段信用しきってはいない神様らしき人物（あれって人なのか？）に強く願った

だけど自分の意思と裏腹に瞼は徐々に閉じていって……

同時に闇に飲みこまれていく感覚が身体を襲う

そんな中、意識の彼方で微かに鈴の音が聞こえた気がした……

キン

え……

『……め……ねっ』

………？

なんだろう……声？

『……本当はね、こんなことしたくないんだよ？』

……じゃあ、やらなくて良いんじゃないの？

『だけど観柚はきょーくんを殺さなきゃいけないの』

……何で僕なんだろう？

『だって観柚は』

突然聞こえた悲しげな少女の声

頭の中に響き渡っていく

言葉を返しても上手く噛み合わない……どうして

『……嗚呼……そういうことか』

ひょっとしたらこれは閑崎さんの想いなのかもしれない……

『ごめんね……本当にごめんね……』

閑崎さんの声が謝罪に変わる

謝らなくて良いんだよ

ずっと気が付かなくてごめんね……

彼女を苦しめていたのが何なのかは分からない

だけど、誰かが傍に居て楽になるのなら助けてあげたいと思う

……此の状況じゃ、もう無理だろうけど……

僕はいつぞやに投げ掛けた想いを……届かない言葉をもう一度投げ掛けた……

意識は……僕の存在は其処で途切れた……

第七章　過去の記憶、そして

「……う……？」

背中に当たる固い感触に違和感を覚え、僕は目を開けた

意識は未だ微睡んでいて、頭の中がもやもやしてる

「……？」

眠たい瞳を擦りつつ、視界を見渡すと

「……あ……？」

一面の黒

光など一切通さないような漆黒な闇

辺りは暗闇に包まれていた

背中に感じる感覚からして、どうやら少しの間眠っていたらしい……

「此处……何処だよ……」

覚醒してきた頭をフル回転に稼働させ、状況を確認するためにとりあえず身体を起こすと、指先がカツンツと音を立てた

床の様なモノに触れた（というより引っ搔いた？）感覚

……本当に此処……何処？

何処までも続く暗闇の中、僕は立ち上がり、周りを見渡す

『此処は僕の心の中かな……』

ふと、そんなことを思った

こんな場所見た事……いや、前にも此処に来た事があるような気がする

そう……一年前の『彼の後』に……

彼の時は此の中をフラフラと歩いていたら、元に戻れたけど……
…今回は無理な気がする

ふと身体を見下ろすと、刺された部分は見事塞がっていた

……うん、現実じゃないからかな？

しかし僕は辺りを見渡していた視線を……止め……直ぐ其の考えに
訂正をいれた

「……うわぁ……」

理由は……暗闇の先にお花畑と大きな川があつたからだ

しかもご丁寧に『幸せの集い所』天国』と書いてある看板がお花畑（確か桃源郷っていうんだよね）に刺さってる

其の周辺はキラキラと輝いていて……神々しいです

うん……つまり僕は生と死の狭間に居るんだね

納得 ……つて、おい！！

自らに突っ込みを入れながら、取り敢えず状況確認

誰か突っ込み役の人が居て欲しいです……いや別に此方に引きずり込むつもりはないけど……巻き込みたくないし

こほんっ ……ええと……現在、閑崎さんに刺されて意識を失い……僕は此処に居る

たぶんあっちに見える彼の川（三途の川？）を渡れば見事『死亡確定』だ

……いや、川を渡らなくてももしかしたら『死亡確定』かも。お花畑から『早く此方においでー』オーラが滲み出てるし

遠くに死んだ祖父が見えるよ……ごめん、未だそっちには行きたく

ないです

そもそも彼の状況で普通は生きていられるはずないし……ふう、失血死か

身体の内側……内蔵部分は熱を持っているのに手足の感覚が無くなり、貧血のせいでノイズが聞こえて……他の音は聞こえなくて……じわじわと身体の中から氷のように冷たくなっていく

刺された部分は痛いのに、叫ぶことすら許されない

そしてゆっくり意識が消えていく……………

あれは僕にとって『地獄』だった

二度とあんな思いはしたくない

……まあ、此处に居れば何も感じなくて済むだろうけど

もう……何も

『……綾兎……大丈夫かなあ』

僕を守ろうとして閑崎さんの攻撃を受けてしまった綾兎

『光の住民』とはいえど、まともに力を使えない状況だったし……
学校の寮内だったから尚更だし……

彼女が僕を狙っていたのなら、綾兎を巻き込んでしまった事になる

綾兎……ごめん

此処からじゃ伝わらないだろうけど、心の中で謝罪を入れる

どうか無事でありますように……

閑崎さんも……彼の子はもう……只の人間じゃない

たぶん『能力者』だ

綾兎が閑崎さんの力を知らなかったのを考えると、閑崎さんは『住民』ではない

そして……彼の力は『少し違う』

二年前に僕と桜果を襲ったものではない……と思う

閑崎さんが其の力を使わなかっただけかもだけど……

……はぁ……仕方ない、綾兔に話した事を踏まえて、僕ももう一度振り返ってみるか

今までの過去と……そして二年前の出来事を……

僕はもう一度瞳を閉じて、過去を再生した

「杏っ！ 杏っ！！」

ぐったりと床に伏せてる杏の身体をボクは揺さぶる

だけど……全く反応はなく……杏の身体はどんどん衰弱していき、呼吸は虫の息で……

腹部の傷口からドクドクと漏れる血は止まらなくて……今の状況じゃもう……っ

「ムダだよあやとくん、きょーくんは死ぬんだから……手を出さないでね？」

「っ」

「それに此処はもう観柚のけっかいの中……だれにもきづかれないできょーくんはしぬんだよう……あははっ」

笑いを含んだ言葉にカツと怒りを覚え、ボクは閑崎さんを睨み付けた
普段はそんな感情を誰かに向けることはない

でも……杏の事をこんな目に遭わせといて、其の態度は酷いと思う

「閑崎さん、どうして杏をっ!!」

そもそも杏が狙われる理由が分からない

『光の住民』や『闇の住民』がこっという事に巻き込まれるならまだ
納得がいく

特殊な力を持っているから恨みや妬みを買っるのは仕方ないことだ

『現実世界』でいうお祓いに近いことをしていますし………世界
の調和を保つために仕方がなくやっているんですが

だけど……杏の力は目覚めていない

だから杏がどんな力を持っているか、ボクでも分からないですし………

閑崎さんの力もどいう物だか分からない

『光』でも『闇』でもない特殊な力

彼女は何で……

……稀に僕たちと同じような力を持つ人間が『現実世界』で生まれることがある

其の人たちが亡くなる時に強く『生きたい』と願うと……『現実世界』から『消失』し、『光』か『闇』の『住民』になる

『住民』は其々の世界に十人ずつ居て、『光』の『住民』に対して『闇』の『住民』が対になるように存在する

ボクの場合はアリスが対で……今はアリスの代わりに杏が対になっている

だから契約といっても（仮）ですし、アリスとは『切れて』いない

カリン様とタクミ様は『観察対象』にしていますが……杏の存在は『不安定』だ

『……ああ、だから杏は狙われたのかもしれないですね………』

床に伏せてる杏の身体を起こし、抱えた状態で杏を見下ろす

既に意識はなく……死にかけている〃まだかるうじて生きている状況

？
……何かおかしい

普通の『人間』なら、刺された時にショック死してる可能性も高い
ですのに……

何でまだ生きて……いや、杏に死なれちゃ困るんですが……

ボクは視線を閑崎さんに向け、鋭く睨んだ

「あやとくん、そんなに睨まないでよ……観柚だって好きでこんな
ことしてる訳じゃ……」

「え……？」

好きでしている訳じゃない？

じゃあ何で彼女は杏を……

「ほんとうは観柚……だれも……」

閑崎さんはオドオドした態度をとる

其れは何処か挙動不審で……

「私の『観察対象』に手を出しといて、其の態度はないんじゃないのか？　なあ……閑崎観柚」

「「っ！？」」

閑崎さんとボクは声のする方に振り向く

其所には

「やあやあ、何かえらい事になってるなあ……此の修理費は一体誰が持つんだ？　おい」

「水城せんせ……？　っ！？　何で……観柚はだれも入れないようにつっかいを張ったのに……」

「あんな密度の結界、直ぐに壊せる。其れよりも……閑崎観柚、自分のした事の重大さが分かっているんだろうな？」

「っ」

カリン様の言葉を聞いた途端に顔を青ざめる閑崎さん

さつきとは態度が全然違う……状況が逆転した？

「其れと綾兎……早く氷月杏の傷を癒せ」

「っ、はいっ」

今、カリン様が閑崎さんの相手をしているのなら……その間に杏の傷を癒せる

「……風よ、水よ……我が力となり彼の者の傷を癒せ。『癒』」

詞を唱え杏の傷口に手をかざし、力を送る

『自然を操る能力』以外にも、ボクは『再生能力』を持っている

其の力を使って杏の傷を治そうとすると、少しずつだが傷は再生を始めた

けど 思ったよりも出血量が多い

『早く輸血しないと……失血死になるっ』

一度外に出た血液を体内に戻すことは出来るが、衛生上……無理だ

今の状況では血液を浄化出来ないし……そうだっ！！

「カリン様っ！！ タクミ様は！？」

声をかけたとたん、閑崎さんと対峙していたカリン様は、ハツとして……気まずそうな顔を向けた

「！ すまない綾兎。彼奴はバックアップに回っているから来れないんだ……」

「え……！？」

タクミ様の持つ再生能力や浄化能力はボクよりも優れている為、タクミ様なら杏を助けられると思っていた

だけど……タクミ様が此方に来れないということは、杏を助けられない

「あやとくん、きょーくんを助けちゃだめっ！！ じゃないと観柚は っ」

ドンッ

「うはっ……う……」

「綾兎っ！？ ……閑崎っ、もうやめるんだ！！」

気が逸れた隙に閑崎さんの攻撃をまた受けてしまった……かろうじて杏には影響しなかったのでほっとする

其の代わりに咄嗟に杏を庇ったため、背中に攻撃を受け……焼けるような痛みで身体に力を入れる事ができない

「くっ、『守』」

詞を放ち、自身と杏の周りに結界を張り、攻撃を凌ぐ

杏に攻撃出来なかったせいか、閑崎さんはガタガタと身体を震わせ……自身を抱き締めるようにして床に崩れる

顔は恐怖に歪み……何時もの面影はなかった

何に怯えているかは分からない

不意打ちを突いて杏に致命傷を与え……さっきまでボク等を傷付けることに躊躇いもなかったのに……

「いやだ……観柚……観柚はまだ……死にたくないよお……」

閑崎さんの頬を涙が伝った

『まだ死にたくない……』一体どういう事？

閑崎さん……そんなに震え上がるなんて……

「閑崎……お前を其所まで追い詰めたのは誰だ」

「っ」

カリン様の言葉を聞いて、ビクツと身体を震わす閑崎さん

カリン様の視線が鋭くなり、空間に重苦しい圧力が掛かる

そんな二人の様子をボクは眺めつつ杏の傷の再生に励む

何時もは観察・傍観者であるカリン様が前衛に出るのは珍しい事だ

現実世界では自分の教え子にあたる閑崎さんにも容赦しない

自分にとっての敵と見方の区別をつけいてる

『流石だな』と思った

ボクに『杏の傷を癒せ』と言ったということは杏を仲間だと思って
くれている 『今は』

其れを利用して、杏の身の安全を確保する事が今のボクに唯一出来る事だ

『こんな時にアリスが居てくれたら………』

杏には話していなかったが、『光の住民』と『闇の住民』は二人揃って初めて本来の『力』が出せる

アリス「片割れが居ない今の状態では、ボクは本来の力が出せない

のだ

杏は仮契約のままだし……死の縁に居る杏に此れ以上負担をかけた
ら殺してしまう

其れだけは避けたかった

『結局ボクは一人じゃ何も出来ないんですね……』

以前からカリン様とタクミ様……アリスには良く劣等感を抱いていた
彼の三人と比べると自分の力はあまりにも小さくて……

『強くなりたいのになれない……』

其れはボクに覚悟が足りないせいだろう

自分が持つ『決断力の甘さ』を捨て、前に進まなきゃいけないのに
……

『どうすればいいんだろう……』

杏には偉そうな事を言っておいて、まだ過去を引きずっているのは
ボクの方ではないのでしょうか……？

『ボクは最低です……』

もしかしたら、ボクは彼の時から前に進めていないのかもしれない
其れに力を使うということは、誰かを傷付ける恐れがある

人一倍其れを知ってるからこそ……強くなりたくても何処かで怯えていたのだ

そんな事を考えている間に傷の治療はあらかた終わったらしく、殆んど塞がっていた

此れなら傷跡も残らなくて済むかもしれない

小さい傷を癒しつっていると、杏の額から汗が滲み出ているのに気付いた

痛みを堪えたまま意識を失ったのだから結構無理をしたのだろう

血の飛沫が頬を濡らしていたので汗と共に拭いてやろうと、辺りを見渡す

ちょうど、結界の内部の空間に襲撃されたときに吹っ飛ばされたのであろう杏の通学鞆を発見し、血などが手に付いてないか確認してから勝手に中を開く

ポケットの中にハンカチが入っていなかったもので、もしかしたら鞆の中にあるのかもしれない

そう思った

二人の接戦（で合っているのかは分からない）を見つつ、結果を保ちながら鞆の中を探ると指先が布の感触を捉える

『ビンゴっ！！』と思いつつ其れを引き抜くとアイロンがかけてあり綺麗に折り畳まれているハンカチを取り出す

流石杏……そういう所は貴重面なんですネ

チャリッ

「？」

畳まれたハンカチを手にした時に不自然な重さを感じたら、ハンカチの間からネックレスのチェーンが垂れ下がっていた

『杏ってアクセサリーとか着けましたっけ？』と考えながらハンカチを開くと、中からアンティーク調な十字架の付いたネックレスが出てきた

古めかしい銀の十字架に細かい飾り彫りがされていて、真ん中に丸い半透明の石が付いている……見慣れないネックレス

チェーンは長めで腕に巻き付けられる位ある

『……もしかして、杏ってキリスト教の家系？』

宗教上なら持ってもおかしくないですね

雪代綾兎・杏の事について資料の中に書いてあった所をちゃんと読んでなかった

氷月杏・宗教は一応仏教

キリスト教ではありません

『折角だし、握らせときましょう』

傷は殆んど塞がっているも、何時死ぬか分からない状態に変わらない握らせという損はないだろうと思い、杏の右手に其れを握らせた

瞬間

キン 「っ!？」

金属がぶつかるような音と共に、十字架は突然光を放った

キラキラとした蒼白い光に辺りは包まれ
パリンツと音を立てて……………結果が崩れ落ちる

其れを見たカリン様と閑崎さんが硬直した

「綾兎……………今一体何をしたっ!？」

「あやとくんっ」

閑崎さんがボクに攻撃を向ける

しかし攻撃はボクにぶつかる直前にリンッと澄んだ鈴の音と共に…
…消滅した

まるで傍に在るモノを守ろうとするように………

「……杏………?」

恐る恐る杏を見る

まだ意識は戻ってなくて失血死寸前のはず……

「まさか……氷月杏は彼の……」

「カリン様……?」

驚いた表情で告げたカリン様

杏は……『何』?

誰もがそう思ったであろう其の時

「駄目……っ、いやぁ……もう時間がないのぉっ（>|<）き
やぁぁぁぁあっ……！」

ビクンツと閑崎さんの身体が動いた途端　一面の闇が彼女の
身体から放出され……ボクと杏、カリン様は闇に飲み込まれた

抵抗する間もなく闇は増幅し……

僕たちは『現実世界』から消えた

「キョウ、此方此方っ」

「待ってよ桜果^{おつか}……！」

住宅街からちよつと離れた緑溢れる広場

芝生よりも草花（悪く言うところ雑草）の繁殖の方が旺盛な為、広場というより草野原と行った方が良いかもしれない

其の場所を駆け回る二人と……一人

「杏、桜果っ！！俺を置いてくなーっ！！」

「嫌だ（よ）」

背後から待ってくれと言わんばかりに叫ぶ十夜（水無瀬の名前）に僕はお互いに顔を見合せ……ニヤリと含み笑いをした後、満面の表情で言葉を返してやった

更に先へ先へと走る僕達

「ちょっと、待って、置いてかないで　っ！！　ハッ、まさか俺だけハブリなのかっ！？　お願いだから待ってくれ　っ　いや、待ってください！！！！」

「えーっ」

僕はピタリと足を止め、顔をしかめる

「なに其の反応っ！？」

「はあ（ふう）……」

「だから何で其処で溜め息！？　あ……追い……付いた」

僕達に追い付き、ゼイゼイと息を吐く十夜

十 いや過去の記憶の様子だから水無瀬でも良いや。何か面倒くさい

回想再開

「息切れするなんて意外に体力ないよね」

「ランドセルを三つも持たされて走れば誰だってなるわっ!!」

僕が水無瀬の体力の無さを指摘すると、水無瀬は否定的な声を上げた
だって其れは

「じゃんけんで負けた水無瀬が悪い」

「俺のせいなのかっ!？」

身振り素振りがいちいち大袈裟な水無瀬を横目で見る

……そもそも負けた人がランドセルを持つというゲームを持ち掛けたのは水無瀬の方じゃないか

「十夜……わたしのランドセルに傷付けてないでしょうね？」

桜果……其の意見には僕も同感だけど、其れなら

「心配だったら持たせるなっ」

怒りが限界に達したらしく、思いっきり怒鳴られた

持たせた理由……僕がじゃんけんで勝ったからということもあるけど………其れ以前に

「「え？　だって重いじゃん（じゃない）」」

「こついう時は物凄く息がピッタリなんだなっ！！」

うん、全くだ

こついう時に桜果と双子だなと感じるんだ

流石水無瀬……分かってるじゃないか

「さてそろそろ帰ろうか……水無瀬、ランドセル返して？」

「『返して？』言っただったら預けなきゃ良いだろ」

水無瀬のお母さん（結依さん）にこんな所を見られたら、何て言わ

れるか分からない

だからいい加減返してもらおうと思ったんだけど……ゲームの言い出しっぺの奴に言われると頭に来るんだよね。うん

「水無瀬……（ニコッ）」

「作り笑いに不気味なプレッシャーをかけるなっ……ほらよ」

「わーい」

放り投げられたランドセルを両手でキャッチする

「ありがたみのない声で返事すんなっ」

「だって水無瀬だし」

「何其の態度!？」

ガンとショックを受ける水無瀬……気味の悪いハイテンションが鬱陶しいな

ランドセルを投げられて喜ぶ奴等居るのだろうか？

……居たら其の人は生粋の『DM』じゃないのか。喜び＝悦びで

そんな事を考えつつ、桜果のランドセルを受け取る

桜果に「はい」とランドセルを手渡すと桜果は「ありがとう」と受け取り、何やら考え込む

「……もしかしてこれが『ツンデレ理論』かしら？」

「何処でそんな言葉覚えたの！？」

双子の姉から驚くべき言葉が出ました！！

「ふう……悪いけど其れはキョウにも言えないわ。秘密秘密」

「……………はあ」

桜果の言葉を聞いて……僕は深い溜め息をついた

普通の日常

彼の中では……小さい時から僕達（水無瀬含む）の中では桜果が一番だったのかもしれない（色々な意味で）

僕と桜果は『双子』として育てられ、生まれた時から水無瀬とは幼なじみだった

幼稚園も同じ、小学校も同じ……水無瀬と僕達が一緒に登下校するのは、住んでいるマンションがちょうど学区の境に在り、小学校の規模が小さくて一学年に二クラス在れば良い方だったから

ま、一番の理由は通学路で同じ学年の生徒は僕達しか居なかったからだけだね

桜果は僕と水無瀬に混ざり、遊んでいた

しかし……其れは低学年の時までだった

流石に何時までも僕や水無瀬と一緒に居るのは、周りにとっても自分にとってもよくないことが分かったからだろう

水無瀬は少年サッカークラブに入った一方……僕は水無瀬と遊ぶ事も少なくなったので一人で居る事が増えた

桜果は友達を家に連れてくるようになり、『キョウは此方に来ないでね?』とか言うようになったし……僕は『仕方ないんだな』と思い、桜果が友達を連れてくる時は町の中心にある図書館に通った

其処では宿題をしたり、本を読んだりしていた

……時々、憂鬱な日々に浸りながら……ね

市内でそれなりに大きな図書館だったわりに、機能性は凄かった

見渡すかぎりに沢山の本があり、別室には勉強用の部屋や休憩室、大きなスクリーンで映画などが見れる構造になっていた

……小学校の後半は図書館で過ごしたようなものだ

学校の図書室では物足りなかったらしい……其の頃から僕は少しズレ始めていた気がする

凡人から違う方向にね

色んな本を読むようになってから暫くしてから……自分で物語を書く事が趣味になっていった……

暇さえあれば小説を書いているノートを取り出して、物語を綴っていた

其の反面、両親が仕事で忙しいこともあり、家事はベテランと言っているほど出来るようになったし、勉強も上位に居た

なんでだろう……知識を入れることは苦手はないからだろうか

そして、月日は流れ……僕達は小学校を卒業し、中学校に入学した

田舎だということもあり、僕達の周りの中学校は私立しかなくて……男女同じでは無かった

僕と水無瀬は神月学園。桜果は聖桜高校の側にある風見アンジェリカ女学院（中・高一貫のお嬢様学校）に進学した

中学には運良く文芸部があつて……僕は今まで書き貯めていた分を編集してから投稿したり……水無瀬はサッカー部の活動に励み……そんな日々を過ごしていた

男子校だったから、顔が中性的で身長の高い僕は何かと絡まれることが増えて、危ない目に合い始めたけど……全て足蹴りで倒したけ

どね

一方、桜果は桜果で小学校の時から続けているフルートを中学でも頑張っていた……はず

お互いに部活等で帰宅時間がまちまちだったので、休みの日以外は満足に話せなくなっていた

中学一年の春、両親に突然告げられた言葉で桜果は僕を拒絶した

自分だけが他人だと知ってしまったから……

桜果と僕は双子ではなく従姉だった

誕生日が同じだったため、双子として育てていたのだと両親が言った事に僕は驚いたのだ

僕は自分が此の家で『他人』だと思っていたのだから……

母さんは何時も桜果の事ばかり構っていて、僕は二の次だった

母親にとって息子よりは娘の方が可愛いに違いないし、僕の存在を拒絶する時があったからだ

別に其れは仕方がないことだったから理不尽だなんて思わない

だけど、自分の息子だったらもう少しだけ……僕を……『氷月杏』を見てほしいなと願っていた

でも、桜果が他人だった事で母さんが桜果を構っていた理由が分かった

桜果にとって……其の扱いが一番辛かった事には誰も気付けなかったんだ

桜果に拒絶されてから僕は変わった

少しでも桜果と話すキツカケがほしくて、色んな事を頑張った

まあ、頑張りすぎて熱を出して……桜果に看病してもらって……以前と同様に接することが出来るようになったんだけど……

誤解も解けて、お互いに目標を見つけ出した頃から両親の仕事は更に忙しくなって交代で家事をするようになった

……桜果の料理は某侍漫画の新八さんのお姉さん並みに酷かったので包丁を持たせるのは禁止だったけど

包丁が手から滑って吹っ飛び壁に突き刺さる……後数センチで僕の首の大動脈に突き刺さるところでした

桜果が泣きながら「キョウ、調理実習で赤点取ったわ（泣）」と来たときは学園に潜入して先生共々料理を教えて……止めさせました

先生は「仕方無い、従弟くんの実力で付けときます」とか言って、僕の実力でA評価になった事もあったりする……良いのかそれで

桜果の内申点を上げつつ……僕は何度も襲われかける度に足蹴りで

相手を黙らせているせいで、学校から両親の会社に連絡が行き、三者面談になることもしばしば

「正当防衛です」で大体は片付くのにには助かっています

月日は更に流れ、中学二年の冬、僕がコンクールに向けての小説執筆を進めている頃……桜果の様子がおかしくなっていた

始めは大した事は無かったんだけど……徐々に溜め息が増えて、笑顔が消えた

流石に気になったので『何かあったの？相談に乗るから』と告げたら、桜果は僕の顔を見て……鏡で自分の顔を見て溜め息をついたそして、少しずつ溜め込んでいた言葉を僕に吐き出していく

内容は人間関係の悩みらしくて……其れは僕が常にと行って良いほどの事だった

桜果って外見が儂げな少女って感じだし……性格もちよっときつい言い方の時もあるけど可愛いつて思えるし 従姉馬鹿

仕方ない事なのかもしれないんだけどさ

何で僕達って『同性』から告白されるんだろうね。本当に。

告白してきた先輩には桜果も満面の笑みを浮かべて断ったらいいんだけど……以来、学院内で会つと「桜果ちゃんっ！」って追いかけられ抱き締められるらしい

『高等部では別になるし、先輩も進学に向けてのテストがあるだろうから後少しの我慢だよ？』って言ったら『……そうね。その手が残っていたわ』と言って元気になったけどね

僕もしょっちゅうだもんなあ………人生を賭けています

やっと先生が事態を分かってくれたのが唯一の救いです

案の定、僕の感は的中したらしく一月下旬の頃には少し落ち着いたらしい

ほっと胸を撫で下ろし、僕に報告する桜果に笑顔で『良かったね』と言ってぎゅうつと抱き締めたら泣かれてしまいかかなり焦ったけどね……女性を急に抱き締めたらいけない事を学びました

そんなこんなで二月に入ろうとした頃、彼の事件は起きた

雪の降る寒い日

文芸部の活動も休みだったため、スーパーで買い物を済ませ早めに帰宅

母さんからメールで『今日は遅くなるから夕飯よろしく』と送られてきた…… ホワイトシチューが良いらしい

『相変わらず可愛い母さんだ』とか思いながら鍵を開けて家の中に入り、暖房を付けてから台所に向かう

使わない食材を冷蔵庫に押し込んでから、上着とコートを脱いでエプロンを着けて、早速夕食を作り始める

一度ホワイトシチューをルーから作ったら悲惨な事になったので市販のルーを使います

ルーを焦がしてブラウンシチューになったし…… 何時か再挑戦しよう

具材を炒めてから鍋に入れて煮込み、時々灰汁を掬う

圧力鍋で煮込むので、お肉が柔らかくなる

味が染み込みやすくなるし、その方が美味しくなるんだよねあ

グツグツ煮込んでる間に器にレタスを千切って、胡瓜の千切りと缶詰めのツナとコーンをのせる

夕食にはまだ早いので、ラップを掛けて冷蔵庫に閉まった

フランスパンにガーリックバターを塗って、パセリを散らしてからオーブンで焼いた

「ふう……」

段々料理の幅が広がってきたのは良いんだけど……将来家政夫になれるんじゃないかなあ

作ってる料理の内容が、男らしくないのが難点かもしれない

家庭科の調理実習で料理を作ると、一瞬で料理が無くなるのも此れが原因なのか？

ふむ……一度、男を磨いた方が良いのかもしれない

ピンポン

「？ 誰だろ……」

この時間だからもしかしたら水無瀬かな？

「はい、今行きまーす」

コンロの火を消して、元栓を確認してから玄関に向かう

スリッパで駆けるので、パタパタという音がちよつと五月蠅い

ガチャッ

スリッパから靴に履き替えて扉を開けた

「良かった、キョウが先に帰ってきて。家の鍵を部屋に置いたまま学校に行っちゃったから」

「次からは気を付けないとね。ほら、外は寒いから早く中に入りなさいな」

鍵を忘れたため、ドアを開ける事ができなかったらしい……寒いのでさっさと家の中に入れる

傘を玄関に置いて身震いをした桜果に急いで持ってきたタオルを差し出す

雪が溶けて濡れた髪を拭く桜果のコートを預かって、リビングに持っていく

ついでに、自分の上着とコートも脱衣場から持ってきたハンガーに掛けておいた

「桜果、身体冷やしちゃいけないから先にお風呂に入っちゃって？」

「分かったわ」

二人分のコートと上着にファ リーズを吹き掛けながら促した

ホワイトシチューを煮込んでる間にお風呂の準備をしないと良かった

此れで桜果が風邪を引く可能性が少し下がったかな？

「それにしてもいいにおい、夕飯は何かしら？」

「ホワイトシチューだよ。母さんの要望だしね」

着替えを持ってきた桜果が訪ねたのに対し、僕はにこやかに答えた

「母さん……なんだか可愛いらしいわね」

「全くだ」

嬉しそうに笑う桜果に癒されつつ同意

「じゃあ、先にお湯を頂くわね」

『るーるる』とオーケストラの曲……確かラウ、エルの『水の戯れ』を口ずさみながらお風呂場に向かっていく桜果

……あれってピアノ曲集だったような……まあいいや

桜果がお風呂に入っている間に、回収したスカートにアイロンを掛けてあげて、一緒に部屋干ししておく

ついでに乾燥機に押し込んでいった洗濯物にもアイロンを掛けて畳み、クローゼットに閉まった

ふむ、防虫剤がそろそろ切れるな……明日にでも買いに行くか

台所に戻ってシチューを煮込み、冷蔵庫に入れたサラダを取り出す
お皿やスプーンを並べてホワイトシチューをお皿によそったと同時に
桜果が来た

「美味しそうね」

「外は冷えたでしょ？ だから早めに食べちゃおっか」

「そうね、じゃあ早速」

「いただきます」

……とまあ、此処までは良かった

其の後に桜果の髪を乾かしてあげてから食器を片付けて、母さんの
分にラップを掛けて……父さんは外で食べてくるらしいと連絡が入
った

で、僕もお風呂に入った後にある事を思い出したんだ

『そつえば昨日の夜に結依さんから『焼きプリン』を貰ったよな
……』

後で桜果と一緒に食べるかと考えながらお風呂を出ると、脱衣場
には……何故か桜果が居た

「あはっ、ごめんね」

「ッ!？」

頬を染めながらバスタオルを差し出してくる桜果に……硬直した

慌ててバスタオルを奪い取り、身体に巻き付ける

「確か……鍵を掛けたよね？」

「鍵ごときにわたしが縛られると思う？」

「いつそのこと縛られていてくれっ!!……ハッ!？」

ヤバイ……旗から見たら絶対マズイことを口にした

「キョウ……この変態」

「っ!？」

……うん。思い出したくない過去まで引きずり出してしまった

彼の時に桜果が嬉しそだったのが気にかかります……忘れない

桜果の事を脱衣場から追い出してから急いで着替える

タオルを頭に被った状態で、脱衣場から出てくると、気まずそうな顔をした桜果が立っていた

……いや、此方も凄く気まずいんだけど……

取り敢えず無言で桜果を連行し、リビングのソファーに座らせた

「あの……桜果。さっきは何で……脱衣場に？」

喉の奥からなんとか声を絞りだした

桜果は明後日の方向に視線を向けながら

「キョウ……ごめんね？」

「……何が？」

さっき僕の裸を見てしまった事だろうか？

小学校に入るまでは一緒にお風呂に入って居た位だからなんともいえない……思春期真っ只中の僕としてはかなり複雑だけど

「いや……覗いた事じゃなくて……」

「覗かれてたの！？ しかも反省はないんだ」

「うん」

……最近、桜果が意地悪です（泣）

「じゃあ、一体何に対して謝ってるの？」

「うつ、其れは……そのう……」

チラッと一瞬だけ、別の方向に視線が向いたのを僕は見逃さなかった

視線の方向。冷蔵庫

……まさか、桜果……

ニコリと営業スマイルを浮かべた状態で桜果を見ると、ビクッと桜果が震え上がった

「ごめんねっ!! 今日朝、お腹が空いてたから……キョウの分の焼きプリ」

ガシャーンッ 「っ!?!」

不意に……突然、窓ガラスが割れた

風のない状況

なのに、ガラスの欠片は全て僕達に向かって飛んで

「桜果っ!!」 「いやあっ!!」

咄嗟に桜果の上に覆い被さり、欠片から桜果を庇う

ザシュツ 「っ」

腕や足に欠片が突き刺さる感覚

鈍い痛みが身体を蝕んでいき、紅が飛び散った

「キョウツ!!」

「……うあ」

「大丈夫!? 今誰か呼んでくるからっ!!」

欠片の勢いが収まってから、桜果は僕の下から這い出た

彼女は掠り傷で済んだ

僕の方が酷かった

「直ぐに っ!?!」

一瞬、桜果の表情が歪んだ

そして、次の行動は意外なものだった

ガシッ ギュッ

「…………え？」 「桜果っ!？」

桜果は僕の身体にのし掛かり 僕の首に両手を添えて力を入れた

「桜果っ、桜…………か」

「違うのキョウ、手が勝手に!!」

勝手に身体が動き、自分では止められないらしく 彼女の表情が
辛そうに見えた

「あっ…………うううっ…………いあ…………っ」

女の子の力にしては有り得ない力で首を締め上げてくる

まずい…………意識がもう…………っ

がくりと意識が落ちる感覚

「……ふふっ、これで邪魔者は消えた。この子はわたしのものだも
ん　だから消えて……氷月杏」

意識の端で、ノイズのような声が聞こえた気がした……………

その後、桜果はガラスの欠片で手首を切られて僕の隣で倒れていた
らしい……………

ガラスは割れていなく、刃物すらない状況

そんな中に僕達は倒れていたらしい

『らしい』というのは僕が水無瀬から聞いた内容だからだ

第一発見者が水無瀬だったから……………

『水無瀬には悪い事をしちゃったなあ』

桜果が見つかったら、二人で謝りに行くか……………って

『此处から出ない限り無理か……………』

でも、思い出してみても……彼の時僕達は……誰かに狙われていたのかもしれない

其の関係者が多分……閑崎さん

彼の時はよく分からなかったけど、もしかして桜果は『誰かに操られて僕を殺しかけた』んじゃないか？

其の時には一度僕は此処に来ているし

あつちの桃源郷もあつたような……流石に無かったか

アリスに言われた事

『多分、闇は最初からお前自信を取り込む機会を狙っていたんじゃないか？』と言う事が本当だとすると

今回の件は彼の事件の延長戦なのか？

狙われている理由は恐らく……綾兎に初めて言われた事

確か綾兎はこう言った

『実は貴方が『闇の世界』に居るって事がちょっとイレギュラーでして……困っているんですね』と……

僕の存在はイレギュラー

『有り得ない存在』

『闇の世界』……の『一部』

其れを見た……いや『視た』人は闇に魅せられるか死ぬ

僕は闇に魅せられた

だけど、綾兎によつて其れは無くなった

『闇の住民』に近い『非なる存在』

僕の存在って一体 何？

『 って、そんなのはどうでもよくて』

取り敢えず、早く此処から出たい

胸騒ぎがする

早く戻らないと大変な事になる気がする

……嗚呼もう

「大きな力が欲しい　っ！！」

誰も傷つけないで、大切な人を守る　そんな力が

墜ちたモノを救う力が

何も出来ない自分にもどかしさを感じ、叫ぶだけ叫んだ

其れだけが今出来る唯一の事だったから……………

だからね、次の展開には焦ったんだ

何も起きない事に溜め息を付いていたら、脳裏で声がした

『ふう…………仕方ない。其の願い叶えてしんぜよう』

「何か御告げされたっ！？」

中性的な声の響き…………男の人かな

其の声に戸惑った

途端、リンツと澄んだ鈴のような音と共に蒼白い光が溢れ……
驚きの声を出す間もなく……僕を飲み込んだ

うん、……新たなフラグが立ち上がりそうです。（まる）

第七章　過去の記憶、そして（中編）

「……………此处は……………？」

闇に飲み込まれた後

ボクは瞳を開けた

視界の先に広がる真つ暗な世界

全てが闇に覆われて、不安と恐怖が身体を蝕んでいく

杏が放つ光によって、かろうじて杏とカリン様は見えますが……………全員して飛ばされたんですね。準マスターの座を持つカリン様まで……………役立たずなのです！

『……………そういえば閑崎さんは何処でしょう……………』

身体を起こし、キョロキョロと辺りを見渡しても、漆黒の闇が広がるばかりで……………彼女の姿は見当たらなかった

視力は良いハズなんですけど……………【今】はボクたち以外の気配はない

「おい綾兎、無事か？」

「カリン様……此方はなんとか……うつ！？」

カリン様の声に反応した途端、ズキンツと閑崎さんの攻撃を受けた所が痛んだ

背中 of 痛みに顔を歪ませいると、何故かカリン様はボクの前にストンツと座り直した

そして少し何かを考えた後　カリン様はボクの瞳をジッと見つめ、口を開く

「綾兎……今から服を脱いで上半身を私に晒し出せっ！！　今だからこそ、サービスシーンを入れるんだっ」

「っ／／／　突然真顔で何を言い出すんですかっ！！」

教師に予想外の事を言われました

そして、言われた内容があまりにもボクの予想を上回った事だったので……卑猥な内容だったので恥ずかしさで死ねるんじゃないかと思いました

まあ、ボクは……一回死んでますが……もう死にたくないです

此の人、本当に空気が読めない

「四十九パーセントは冗談だが？」

「……残りの五十一パーセントはなんなんですかっ」

ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべながら言ってくるカリン様に言い返す

まあ、大体は予測できますが……

「ふむ……其れは趣味だな」

「趣味なんですか………はあ。（まる）」

何故か溜めてから告げられた言葉に嘆息し、ザザッと後ずさる事にする

此の人が自分の上司だと考えたくない……もはや拒絶反応ですね。これ

「おい、今から一パーセントの考えの中の行動をするぞ。傷を治してやるからサッサと脱げ。お前……自分の傷は治せないんだろ？」

氷月杏の傷を治すのにかなりの力を使っただろうしな」

「う」

相変わらず感は鋭い。其れ以外は駄目駄目ですのに……

「だからサツサと脱げ」

「っ／＼／ 其れは断言なんですな……くっ……分かりました」

渋々服を脱ぎ始める事にする。逆らったら何をされるか分かりませ
んしね

住民の制服＝聖服。ボクの場合はモノトーンのシンプルな服装……
黒が殆ど地の木の服の裾に白いラインが入っていたり……ネクタ
イはアリスが勝手に変えたので可愛い水色だったりします。も
う慣れました

上着のコートがちょっと長めで隙間から半ズボンとロングブーツが
チラリと見える。過去にアリスに『絶対領域を無くすなっ』と言わ
れ、ズボンの裾を少しだけ切られました

おかげで膝がちよっぴり見えます……動きやすくなったので良いん
ですが……良く考えたらアリスに好き勝手やられていましたね

長いコートさえ脱いでしまえば中は無難なブラウスなので脱ぎ着は
結構楽 あ

「あの……カリン様」

「何だ？ 服が脱げないなら私が脱がしてやるが」

「其れだけは勘弁です」

「じゃあ、何が不満なんだ？」

背中に謎の冷や汗をかきながら、ボクは脳が感知した信号を文章にして口に出した

「いえ……その……貴女位の力の持ち主だったら服の上からでも傷を治せるんじゃない？」

「ちっ」

「舌打ちですか！？」

此処に皮を被った変態の狼さんがいらっしやいました！ ボクは今来た道をリターンしたいですっ！！

「まあまあ、……ええじゃないか」

「ひうつ!？」

棒読みのセリフを口にし、暗く瞳を光らせたカリン様の手付きが…
…何かいやらしい

手をワキワキさせていますっ!!

慌てて服を着直し始めたボクにゆっくり近付いて（迫って）くるカリン様

上司からセクハラを受ける部下の気持ちが今なら分かります

はっ、むしろ『光の世界』は一種の秘密結社なのではないのでしょうか？

思いがけない謎が解かれそうであって、何時の間にか移動したカリン様に押し倒されましたっ

身動きが取れません（泣）!!

「ちよっ、カリン様っ!？今はそんな事をしている場合じゃ……」

『その通りだよ、あやとくん』

「「っ!?!」」

頭の中に直に響く声

其れと別にヒタヒタと響き渡る音

音は段々大きくなっていき

ボクたちの傍でピタリと止まる

「なっ!?!」 「っ!?!」

音のする方向に視線を向けていたボクたちは

言葉を失った

目の前に居る少女

頭の上の方で結ばれていた髪は片方だけリボンがほどけていて……
ビリビリに切り裂かれたセーラー服を身に纏い……頭や身体のおち
こちからは血が流れている

胸……ちょうど心臓の場所の辺りには大きな血痕が付いていた

【其れ】はボクたちのよく知る閑崎さん……だった『ヒト』

『死んで』から『闇に魅せられた』モノ

つまり『閑崎観柚という存在』は

「此の世には『もう居てはならない存在』だった　のか」

「!？」

カリン様の言葉の意味を理解したボク

『うるさいなあ……今の状況分かって言ってるのかなあ？』

彼女の放つその言葉に背筋がゾクリとする

彼女の瞳は絶望に染まっていた

そう、閑崎観柚は『誰かに殺された』んだ

で、成仏出来なくて此の世をさまよっていた間に闇に魅せられた

彼女は捕まった

其れも……恐らく『闇の世界の一部』の『欠片』の影響を受けたものに………

『此処は観柚の中だもん。だから逃げられないよう………』

「閑崎さんの中……『闇の欠片』が創った世界……」

『ふうん、あやとくんって意外に目敏いんだ。でもね……観柚のタイムリミットはもう来ちゃった……だから』

表情を歪ませ、瞳を細める閑崎さん

瞳がキュッと引き締まると同時にボクは本能的に身を引いた

『だからね……あやとくんも水城せんせいも……死んじゃえっ!!』

「閑崎さんっ!?!」

シュッと彼女の手にはカッターナイフが現れ、刃先が虚空を切り裂く

其所はさつきまでボクが居た所だった

「閑崎さんっ、止めて下さいっ!!」

ボクは叫んだ

閑崎さんはギュッと両手でカッターナイフを握り直し、ボクに向けて構える

そして、ポツリポツリと言葉を放った

『あやとくん、『光の住民』のきみには分からないだろうけど、観柚は死にたくなかった!! ちゃんと勉強して、普通の生活を送ってたのっ!! なのに……学校の帰り道に……知らない高校生位の人が突然やって来て……突然カッターナイフで観柚の身体を切り裂いた……『痛い、痛いよう』って傷を手で押さえながら訴えても……叫んでも……誰も来ないような公園で押し倒されて……何度も……何度も刺されたのぉ……相手はそんな観柚を見て笑っていた……歪な笑みを浮かべてたのっ!!』

「え……………」

『観柚の家は教会だったから、観柚はかみさまを信仰してたっけど……どんなに願っても最後まで誰も助けに来なかった。身体中を切り裂り裂かれて、胸を抉られて観柚は殺されたのぉ……パパもママも観柚が死んだ後に車で崖から投身した……観柚はそんなこと望んでなかった。二人には観柚の分まで生きていてほしかった……傍で何度も叫んでも……『死なないでっ!!』と言っても、二人には聞こえてなかったのぉ……二人は観柚のお骨と一緒に海の藻屑になった……なのに観柚だけは教会に取り残された……だって教

会には見えない結界みたいなのが貼ってあって出れなかった……ずっと独りだったなあ』

「閑崎さん……………」

彼女の過去は確かに重い。辛い産物だ

それは彼女の姿を見れば、人目で分かる

襲われ殺され……家族を失い、一人だけ残る

でも、彼女は知らない

ボクたち『光の住民』と『闇の住民』は、一度死んでいるって事を

……………

『ずっとずっと独りだった。でもね、ある日観柚を外へ出してくれた人が居た……その人は観柚に膨大な力と身体を与えてくれた……嬉しかったあゝ、おかげで観柚を殺したヒトをあっさり殺すことができたもん　だからね……その人の望みのために観柚は存在して

』

「そんなの間違っていますっ!!」

咄嗟に口に出た言葉にボク自信が戸惑う

二人がボクの声に驚いている中、ボクは彼女に想いをぶつけた

「閑崎さんっ、確かに貴女の人生は酷いものだったと思います。だけど……自分殺した相手を殺してまで、貴女は新しい人生を手に入れたかつたんですか！？ 其れじゃ、貴女も貴女を殺した人と【同じ人殺し】です！！」

『あやとくに観柚の何が分かるのよっ！！』

ザシュツ 「っ」

閑崎さんのカッターナイフがボクの腕を切り裂き、空間に紅い蝶が舞った

『あやとくんや、水城せんせーは良いよっ！！』『住民』として生きられるんだからっ！！』

「閑崎さんっ！！」

パンッ

空間に乾いた音が響く

其れは……ボクが閑崎さんの頬を叩いた音だった

込み上げてくる怒り

其れは閑崎さんに対して……………いや、自分に対しての怒り

『イッターい。何するのよう』

ブチッ

解いてはならないパンドラの箱

閑崎さんの言葉がボクのストッパーを…………壊した

「……………何も知らないのはそっちじゃないですかっ！！
誰が好きで『光の住民』なんかになったと思ってるんだっ！！！」

『何！？』『綾兎っ！？』『駄目だっ！！！』

カリン様がボクの腕をつかんで止めようとする

それを振り払う

抑えられない怒りが力に変換され、『聖杖・クロスセリア』が光を放つ。

其れは弧を描くように……いや、光の矢となって彼女に向けられていた

「『住民』という枷はボクたちには一番の【地獄】なんだっ!」

只、ボクは『死にたくない』と願っただけだった

生前に……魂に込められていた『力』のせいで

成仏する事も、生まれ変わる事も出来ないまま……『住民』という役割を果たさなければいけない

其れは一種の……【出口の無い牢獄】だ

ボクは閑崎さんに向けて、光の矢を放つ

『やあっ!』 ドウッ

戸惑った閑崎さんに矢は見事刺さり……彼女の中に宿っていた闇を浄化させ始めた

その光景を眺めていると……少しだけ怒りが収まってきた

「……閑崎さん、生きたい気持ちはボクたちには分かります。だけ

ど……本当は、『死んだ』事を受け止めた方が……『楽』なんです
よ……」

『あやとくん……？』

閑崎さんの瞳に僅かに光が戻る

そう……いつそのこと、受け止めてしまえば『楽』になれたんだ

誰も……『大切な人』を巻き込まずに済んだ……

閑崎さんの身体に刺さった矢は一応光の塊なので、本人自身を貫いていない

まるで某エクソシストさんの剣みたいですね

だけど……彼女の中に宿っていた闇は想像以上のモノだった

空間から出れない

閑崎さんも何か違和感を感じているみたいで……さっきから頭

の上に『?』のマークが浮かんでいるように見える

杏の光はそのままなのに……本人は目覚めませんし

すやすや眠ってますし。貧血で起きられないのかもしれませんがね

さて、どうすれば……

『ねえ、あやとくん。観柚は何処から間違っちゃったんだろうね……』

……

「お前に身体と力を与えた奴に会ってからだろ」

『「いやいや、水城せんせい（貴女）に聞いてない（です）から」』

「……うう……」

話に割り込んで来たカリン様に二人でつつこむ

あ……、カリン様がへこんだ

『ま、あってるんだけどね』

「ですね」

「お前ら……私をからかいたただけだろ……」

『「まあね（ですね）」』

「……………っ」

二人でカリン様から答える気力すら奪ってやった

ちよつと満足。何時も弄られていますからねえ

『ごめんね。あやとくんときよーくんを巻き込んだじゃって……』

「其れは杏が目覚めてから言っただけて下さい」

しゅんつと謝る閑崎さんにボクは言う

此の件は杏が一番の被害者ですね……………

『……………そうだね。だけでもう無理なの。』

「……………無理ってどういう事ですか？」

なんとなく……………いや、ほぼ確信的に分かっている事だけど……………
閑崎さんに疑問を投げ掛けた

閑崎さんは辛そうに……………そして何処か諦めた表情を浮かべ、小さく
呟いた

『ごめんなさい。観柚はきょーくんを殺せなかったから、お姉さまに捨てられちゃったみたい……………タイムリミットも過ぎちゃったから、力が暴走してる……………だからもう此の闇の世界からは出られないやあ……………』

「「っ!?!」」

閑崎さんの言葉にボクたちは言葉を失い……………全てを理解し諦めた

闇の牢獄

此処でのボクたちはもう【籠の中の鳥状態】だった

「……………う……………?」

瞳を開けると、僕は……………真っ白な空間に居た

『……いや、違う……』

真っ白な花が咲き誇る……純白な世界に飛ばされた

思い出すは謎の声

僕が桃源郷の近くで「大きな力が欲しい」といかにも中二病（そういえば中二病って具体的に何？ いや、詳しくは知りたくないけど）的な発言をした所、

『ふう……仕方ない。其の願い叶えてしんぜよう』

といかにも仙人みたいな人にお告げされました

多少は驚いたけど……もう慣れました

綾兎に出会ってから、毎日が波瀾万丈だったから………

「……さて、声の主でも探しに行くか」

中性的な声の持ち主に飛ばされたんだろうから、この辺に居るはずなんだけど……おかしいな

「……………まさか新たなフラグって『もう良いんじゃない？ じゃあ来世にGOーっ！』って意味じゃないよねっ！？」

避けていた桃源郷はもしかして此処だったのかもしれない

タイムリミット……………来ちゃったんだね

此処まで来ちゃったらもう『現実世界』に戻れないだろうし

綾兎、ゴメン てへっ

「……………はあ」

自己嫌悪に陥り始める

性格上の問題か、せめて刺された後の処理（病院に行くとか……………止血するとか……………）をしたかった

父さん……………吃驚するんだろうなあ

そして遺品の整理をして「……………えっちい本は無いのか」って探し出すのだろう

父さん、ごめんなさい。興味ないので買いません

「それはそうと……………此処って足場が悪いなあ」

此処に来てから足から妙な感触が伝わってくる

ぐにぐにとしていて、ふかふかの畑の土を踏んだような……………

……………あ、そういえば知っています？

ふかふかの土の所は、実は栄養が豊富でミミズさんが耕しているんですよ。ミミズさんが悪いものを食べてくれるので草花や野菜がよく育ちます

天国の土壌も、夏にアスファルトの上でのたうち回って死んで（干からびて？）いったミミズさんが耕しているのかな……………

ミミズさん、成仏しろよ……………

僕の想いがミミズさんに伝わっている事を願います

「……………流石に気付いたよな。そろそろ退いてくれ」

「綾兎……………僕こと氷月杏・享年十七歳は空の上から見守って居るから……………アディオス!!」

「フラグ立てなくて良いから退いてくれっ」

「うわっ!？」

急に足元の地面が揺れ、慌てて離れる ん？

辺りに生い茂る花でよく見えなかったけど……え……人？

其所はさっきまで僕が居た場所で………あれ？

………空想で全く気付かなかったけど、もしかして僕……声の主
踏んでた？

ダラダラとかき始める汗。冷や汗が止まらない

「ふう……氷月杏……お前は意外に酷いやつなんだな………最低
だ」

「うつ………すみません」

僕が悪い事が確かなので謝っておく

声の主は『全く……』とブツブツ呟きながら、服に付いた汚れを払
っていた

其れにしても……………綺麗な人だ

中性的な声の主……………長い髪の一部を細い布で縛り、思わず見とれてしまふ凛々しい顔。女の子だったら絶対惚れているような……………そんな青年

只……………瞳の色が凄く綺麗な深い蒼。髪の色が銀色という人間離れした色素の持ち主だった

そんな彼に見とれつつ、頭に浮かんだ疑問を投げ掛けてみた

「……………もしかして、貴方が僕を呼んだんですか……………」

「うむ。そうだ。我が名は昂月【たかつき】。夜の支配者だ」

「『夜の支配者』……………」

光の世界や闇の世界、住民については綾兎から聞いたことがあるが、昂月と名乗った青年が言った言葉は初めて耳にするもので……………内心、『まだ能力者っぽいのが存在するのか』と考えた

質問の続きをする

「昂月……………貴方は何故僕を……………」

夜の支配者さんに知り合いは居なかったはずだけど……………最近、厄介事に巻き込まれるからなあ

面倒な事じゃなければ良いな

昂月（何となくだけど此の人に敬語を使うのは身体が拒絶しているので呼び捨て……何でだろう）はそんな僕を見ながら……フツと意味ありげな表情を浮かべる

そして、いかにもナルシストの人のように『ビシッ！』とポーズを決める……事無く（つまらない）、さらりと述べた

「其れは氷月杏……お前が『夜の支配者の次期当主』に選ばれたからだ」

「……………はい？」

あの……………其れは一体どういう事でしょうか……………？

微妙な表情を見て察したのか、徐に説明を始めた

「簡単に言つとだな、『二年前の事件』でちょっと予定が狂っていた。本来はお前が十六歳になった時に能力が開花するはずだったが、『闇の欠片』が散らばっている状態だった事と我の力が不足していた為、お前に干渉できなかったんだ」

自分の事を『我^{われ}』っていう人を初めて見ました

顔は良いのに……残念

昂月の話を聞いてると、どうやら僕は『夜の支配者』として覚醒するはずだったらしい。だけど、事件の影響で出来なかった

まあ、干渉されなくて良かったけど

「今のホツとしたような表情に嫌悪感を覚えたんだが……話の続きをする。覚醒前の『夜の支配者』は光と闇に強く惹かれやすい。だが、『闇の住民』の姫が言っていたように、お前は誰かに狙われているみたいだ」

惹かれやすいとなると、僕のせいで桜果は……

分かっていた事とはいえ、結構辛いなあ……

『闇の住民』の姫ってアリスの事かなあ……あれは姫っていうより……純情乙女かと思うんだけど

「で、ついでに言うと……我もそろそろこの立場から解放されたい、だから氷月杏……次はお前の」

「断る」

「……は？」

今、ややこしい事を押し付けられそうになった

今まで散々振り回されといて、そんなものになりたいなんて思っ
けないじゃないか

「……おい、今がどんなに危険な状態か分かって居るのか？」

「いや、全然。むしろ……さっきの説明では理解できません」

声に重みを乗せて話されると、なんだか叱られてるみたいだ

でも………僕は悪くない

将来『夜の支配者』になることが僕の宿命だとしても……『ならな
い』という選択肢もあるはずだ

まして急に押し付けられて、誰が引き受けるのだろう

「ふむ……仕方がない。愚かな少年の為に交換条件を出してや
」

「貴方……最低ですね」

「うぐっ!？」

ジロリと昂月を見る

昂月はダラダラと冷や汗をかきはじめていた……結構分かりやすいなあ

「我と契約すれば、もう一度生き返れるぞ？ 後の事は知らんがな」

「……………」

無言のまま、くるりと昂月に背中を向け、辺りを見渡す

お、さっき見えたお花畑がある

とりあえずあっちに行くか

「さて……お前、死ぬ気か？」

ガシッと肩を掴まれ、身動きが取れなくなる。さっさと放して欲しい。

冷めた視線を彼に向けつつ、僕は思うままに言う

「自分のせいで他人を巻き込んですごすご戻っていけると思えますか？ 僕は周りから向けられる視線に耐えられなくて自殺しますよ？」

「うっ」

どうやらこれも正論だったみたいだ

更に付け足す

「人間って一度死を決意すると、それ以上に恐いものは無くなるし、このイベントは終了したいし」

「今、凄く引つ掛かる言葉を聞いたが……おい、氷月杏。お前は自分の人生をなんだと思っているんだ」

掴まれた肩に力を入れて痛い……あれ？ 痛みを感じる

それは一旦置いといて、僕は無理やり昂月の手を振り払い、思うがままに口にする

「そんなの決まってるじゃないですか」

「なんだ。分かっているなら良いんだ」

「

「色んなフラグ満載のゲーム!!」

僕は昂月に向き直ってはつきりと断言してから、くるりと振り返ってお花畑へ近付いていく

「……………なんというか、お前痛い奴だな」

「五月蠅い」

……………僕はスタスタとお花畑に向かう事にする。いや、自分でもこの考え方はどうかと思うんだけどさ

なんというか……………最近、非日常すぎて自分がゲームの主人公に思えてきたんだよ……………

「あっちに行ったって今の状況は変わらない。ただ消えるだけ……………それでもいいのか？」

「……………」

背後から掛けられる声が、心にグサリと刺さる

「現に雪代綾兎と水城果鈴、閑崎観柚は大変な事になっているんだか」

「なっ!?!」

ガバッと振り返り、思わず昂月を見る

ねえ……僕が死んでから何があったんだよ………って

「何であっち（現実世界）の状況が分かるんですか!？」

「ん？ 嗚呼……この鏡を使えばな。彼方を視る事が出来る」

八角形の鏡を見ながら話す昂月の鏡を瞬時に奪い取り、鏡を見る

真つ暗な空間の中に三人と僕の身体（あれ？ 傷が無くなってる…
…そしてなんか光ってるっ!？）写っていた

「だってさっき、『闇の欠片』が散らばっている状態だった事と
我の力が不足していた為、お前に干渉できなかったんだ」とか言っ
ていたじゃないですかっ!？ 干渉出来ないのなら『現実世界』は
見えなかったんじゃない……」

思うがままに話すと、昂月はさらりと述べる

「それは鏡を割ってしまつて修理に いや、何でもない」

どうしよう………鏡の角で頭を割ってあげたい

プルプルと震える手で鏡を握りしめ………昂月の頭に向かって投
げた

「「あ」「

それは昂月をかわし、ヒューッと弧を描いて……………花畑に埋もれた

「……………さて」

うん、見なかったことにしよう。ミラーチョップが出来なかったのが残念だけど……………

覗きつて犯罪だよなあ……………

「お前、自分が何をしたか分かっているのか!？」

「それよりも……………はあ」

犯罪をしてしまった事に罪悪感を感じつつ……………ふと、ある事を考える

これならもしかしたら……………

「溜め息をつきたいのは此方だっ!！」

「これから僕の出す条件の全てを受け入れてくれるのだったら、貴方の要望を聞いてあげます」

「なっ」

思ったままの事を断言してみる

此方が出す条件を昂月が納得するのなら……此方が上に立つ事ができる

「……………やけに素直だな。気持ち悪い」

「五月蠅い。さつさと元の世界に帰せ、この役立たず」

ザサツと三メートル位引いた昂月に更に言葉を付け足す（罵るの方向があっているような……別にいいや）

「お前って、我に対してだけ性格悪くないか？」

「……………フッ」

「その、人を下に見る態度は直した方が」

「五月蠅い。今から条件を言うので、一回で覚えてください」

余計な発言はさせない

常に此方が指揮を握る

これで、中学時代の先生の弱味を握って脅したときのように、僕が昂月を支配する……！！

……………

……………あれ？　なんだか此方が悪者に思っただけ………気のせい

だよな？

「嗚呼……お前の周りの奴等にこの場面を見せてやりたい……」

「尚、条件を受け入れなかった場合……さつさとあの世に行きます」

選択肢を消した答えを言う

そんな事を皆に言われる前に、いつそのこと、昂月を消してやりたい

「選択肢の余地ない……仕方ない。条件を呑んでやる」

「分かりました。その条件は」

第七章　過去の記憶、そして（後編）

「はあ……………どうでしょうか」

『だね』

「……………そのわりにはお前達は落ち着いてるな」

取り敢えず地面（？）にぺたんと座り、杏の汗をハンカチで拭ってあげながら会話。

『「だって暇（だからですから）」』

「……………今時の子供は……………」

「今時ではないですけどね。死んでますし」

「……………はあ」

嘆息しながら僕たちを見るカリン様

此処で年齢の話をするのは……………やめときましょう

それよりも、

「カリン様はタクミ様に会えなくなってもいいんですか？」

「そんなわけないだろっ！！ 私は彼奴に逢えなくなるのは……その……う……」

ああ……純情乙女が此処に居ました

『「はふう」
」』

「そこっ、ニヤニヤしながら此方を見るなっ！！」

『「え」
』

ツンデレ具合が可愛いから観察してたのに……残念

「この短期間でよく意気投合できたな……」

『それは……ねえ？』

「ですね」

本当によく此処まで意気投合できましたよ……教師と生徒という関係は生徒の方が立場が上の気がするの……何故でしょう

この場合は只単に『カリン様を弄りたい』だけですが……

「……二人とも消してやりたい……」

『「やれるものならやってみろっ（だね）（です）」
』

「……………早く出たい」

ズーンツとカリン様がへこんだ……………

弄られて、自分が勝てないと落ち込む辺りの仕草に、タクミ様は惹かれたのではないのでしょうか

あの人はカリン様に対して忠犬な部分がありますから……………時々共感できるんですけどね

アリスってカリン様に似ているから……………

ジーツとカリン様を見つめる

「ん？ どうした。私に惚れたのか？？」

「黙っていればマトモなのに……………残念な方ですね」

「お前って、段々氷月杏に似てきた気がする。毒舌なんか真似なくたって良いんだぞ？」

「杏は人生の見本ですから」

「お前の方が年上だろ」

「……………にこり（微笑）」

「……………何気に気にしていたんだな。年齢問題」

んー、ボクと杏では最低五十位離れていますからね。それを言ったらカリン様なんかおばさん通り越しておばあさん様に見まれましたっ!? え……あれ?

今、カリ

「……………そういえば、さっきから息苦しくないですか?」

肺と喉に違和感を感じる

まるで、山の上に来たような息苦しさが身体を襲う

『そうだね……観柚もさっきから息が……あ、そうだ。実体化モードを解除すれば大丈夫かも』

闇がある程度身体から抜けてから、身体の状態を学園に通っている時のように戻した彼女は、自分を実体化させていた力を解こうと小さく詞を呟く

だけど

バンッ 『やつ!?!?』

「閑崎さん!?!?」

闇に身体を弾かれた彼女を慌てて支える

『うう……………力を全部闇に吸われたみたいで無理だったよう』

「じゃあ、僕たちも……」

「ああ……このままいくと確実に死ぬ……いや、私達は死んでるから次は【消滅】するな」

「そんなっ!!」

『光の住民』と『闇の住民』は、本来実体を持っていない

だが『現実世界』に来るために、特別に実体を持つことが許される簡単にいうと某死神漫画の黒髪の死神が現世の学校に通っている時の状態だ

………僕たちは閑崎さんの実体化に近いですが……

自分の肉体を全てのものから認識され、接触を可能にただけ

一度目の死は身体の死。二度目の死は……魂の焼失

其れは……生まれ変わることもなく、此の世から消える事を意味している

「そうになると、氷月杏は一度に二回死ぬ事になるな……可哀想に」

「『可哀想』と言っておきながらニヤニヤしているのは何故ですか……」

まるで実験の検体を見るように杏を眺める

あつ……今、僅かに杏の身体が震えましたっ！！　まさか……本能的に察知した！？

カリン様は、人差し指で杏の頬をつつき、にんまりしながら言葉を続ける

「死んだら無理矢理此方側に引き込んでやろうと思ってな。今、此方は人手不足だしな」

「……【消滅】したらそれは無理ですよ？」

「……………はあ。本当に残念だ」

グリグリと頬を指で弄られる

日焼けを知らない少女のような顔を弄るのは凄く楽しそうです

見つめつつ、ふと考える

確かに、『二年前の闇の災厄』の影響で『闇の世界』は崩壊し、『光の住民』の殆んどが片割れを失った

対の十人（正確には二十人）のおよそ半分が消えた事になる

それ以前に何人かが『転生』したため、ボクが知っている限りでも数える程しか居ない

カリン様とタクミ様は『現実世界』の指揮をその上に居る『正マスタ』から指示を得て行っている

其れをボクたちが動いて解決するのが仕事だ

『現実世界』の中に散らばっている住民達。

【仮契約】をして、杏は『闇の住民』の代役になっていますが……
……十字架の光といい、彼はなんなのか分からない

「そういえば、先程杏が結界を壊したときに貴方が言った『まさか……
氷月杏は彼の……』とは一体どういう意味ですか？」

「ああ……それはだな。暇潰しに読んでいた古い文献に、氷月杏がさつきしたような事について書いてあったんだ」

『「え？」』

閑崎さん共々、疑問符を浮かべる

「私も興味を持った内容でついつい暗記をしてしまったんだが……
……まさか実在するとは思わなかった。これから話すな？ 『それは、光の住民の世界……つまり光の世界の存在が揺らいだとき』」

人間界に一人の聖者が生まれるという予言が降された

住民の偉い方々は自分の世界の力にしようと、我先に予言の場所を訪れた

月の照らされた海の中

聖なる海に蒼白い光を放つ球体が浮かんでいた

その球体の中には赤子がおり、すやすやと眠っていた

住民達は赤子を自分の力にしたいがために争い……多くの血が流れた
住民達が争いに集中している間に赤子は球体の中で瞬く間に成長し
……球体を割って外に出て、人間に被害が及ばないように結界を張
った

どんな攻撃を受けようと結界は攻撃を浄化させた

そして代表の二つの世界の住民を殴り、事を収めさせた

その赤子だったものは自分で居場所を創った

光でもなく闇でもない者

「性別は分からないが……その者は力を次の世代に写していく。私達に似ているだろう?」

「確かに……」

言われてみればそうかもしれない。

「力の格は私よりも上だろうがな。その場に私が居たらどうだったか分からないがな」

「そんな事を言ったら、タクミ様は悲しみますよ? 今だって心配していると思いますし」

「だよな……タクミ……会いたいぞ」

ぷるぷると身体を震わせ、涙を堪えるカリン様

そんな彼女を見つつ……閑崎さんと溜め息をつく

杏の力で此所から出ればなあとは思っていますが、傷を塞いだとはいえど……失血死寸前の身に何が出来るとのさろう

彼の存在で誰かを救えるのなら……僕たち住民も救われるのさろうか

でも、あくまで伝説の存在だ

本当に存在しているのなら

『僕たちが死ぬのを救ってくれたはずです……』

暗い牢獄の中でも、生きる事が出来たのなら……

閑崎さんも同じ事を思ったらしい

俯いてますが、何処か辛そうに見えた

殺された時のカッターナイフを持ってさ迷っていた位だ。生への執着があってもおかしくないですね

そんなことを考えているうちに息苦しさが悪化してきました……そろそろ不味いですね

まるで気管支を押し潰していくような苦しさは……自身が死んだときの苦しさに似ていて

カリン様も閑崎さんも、息苦しさで顔を歪ませていた

『アリス姉さん……傍に居られなくてごめんなさい……』

瞳を伏せ、心の中で念じた瞬間

キンッ 「『っ！？』」

蒼白い光が、辺りを包み込んだ

く直前・異世界にてく

「む。お前の出した条件は凄いいものばかりだが……確かに了承した」

「おお……了承するなんて太っ腹なんですね」

昂月に提案した条件を全て述べたところ、意外にあっさりと聞いてくれた

「でも、本当に良いのか。特に………最後のは」

確認とばかりに聞いてくる昂月

僕は彼を直視し、告げる

「構わないよ。その条件は保険の様なものだし。さあ、さっさと力を下さい。そして元の世界に返せ」

「お前さ……我の事をどう思っている」

「え？ 下僕」

「……………もういい。私の近くに来い。力を解放してやる」

「分かりました」

「其所は素直なん すみません、今振り上げた拳を下ろすなよ？」

若干昂月が震えていた

拳を納め、昂月の傍に立つ

思った以上に弄りがいがある人だった

「いいから大人しくして、一步も動くな」

「む」

「目を閉じる」

「……………分かった」

ぎゅっと目を閉じる。真っ白だった世界が黒く見えた

「……………まあいい、始めるか」

ひたりと僕の額に指先を当ててくる昂月

頭の中で鈴の音が響いた

いや、鈴の音というより澄んだ金属音の様に聞こえた

「彼の者の中に眠る力よ。闇の変換を移行し、真の力となれ」

額に当てられた指先から、ピリツと痺れるような感覚が流れ込んでくる

前に綾兎に変換されたときとは違い、全身に冷たく心地よい何かが巡る

其れは何処か懐かしく……今まで眠っていた何かが目覚めたという感覚がする

ずっと……体内に眠っていた力

僕が使える 力っ！！

「後は自分で出来るだろう」

額に当てられた指先を外される

「もう瞳を開けていい」

「……もう、終わったの？」

恐る恐る瞳を開け って

「身体が光ってるっ！？」

僕の身体が蒼白く光っていた

力が目覚めたからなのだろうか

「さあ、体内に感じる想いのまま動け。座すれば力は想うままに働く」

「其れだけで良いの？」

「力は鍵で制御しろよ？ 闇の住民の姫に貰ったものがあるだろう？ 使い方は魂が憶えているからな」

「鍵……？」

闇の住民の姫「アリスに貰った（というか渡された）もの。

鎖の長い銀の十字架。

本能で分かる……あれが鍵。

「あくまで体内の力を目覚めさせたただだから、それ以降は自分で解放しろ。鍵を使いこなせ。鍵こそが己の力の媒介だ」

「其れくらい分かっています」

昂月の『ちよつと上から態度』が気に入らなくて少し剥れる

「じゃあ、意識を身体に飛ばすぞ」

「条件 忘れないで下さいね」

「ああ……あ、氷月杏。ちょっと待て」

「？ なんです つ！？」

ふいに頬に伸ばされた昂月の手が 僕の頬を引っ張った

ぐにぐにと弄られる頬

「その高いプライドをさっさと崩せ。だから『ツンデレ氷月』とか呼ばれるんだぞ」

「うるふあいつ、ふおほひいなふおせわだっ！！（五月蠅いつ、大きなお世話だっ！！）」

頬を弄られているせいで、上手く反論出来ない

「其所が可愛いところでもあるんだがな」

「？」

フツと苦笑する昂月に違和感を覚える

「さあ、飛ばすぞっ！！ 『転移』」

身体から放たれる光が増幅し、僕自身を包み込む。

キラキラと輝く蒼白い光はまるで満月の光のようだった

「氷月杏。もしお前が」

「

「……………ありがとうございます」

光に包まれて消える直前、昂月が僕に言った言葉

途中から聞き取れなかったが、恐らく最後の条件だろう

彼に礼を言ったのは、彼に背負わせてしまっただ

他の誰かに頼めない願い

昂月だから許せた事

本当は彼にも背負わせたくなかった事

でも、力を持つと事実を知ったと同時に決めた事だから……………

さあ、皆を助けよう

僕の 力で

「行っただか……………」

真っ白い花が咲き誇る空間

『月の果て』に一人残る

氷月杏の投げた鏡を探し、見つける

鏡は傷一つ付いていない

其れを見ながら……ぽつりと呟いた

「氷月杏……お前は我と別の路を歩むといい」

鏡の中では閑崎観柚の造り出した空間が蒼白く光輝いていた

「魂に受け継がれるんだな。『夜の支配者』は『自分よりも他人を大事にする』という事が……私が前代の『夜の支配者』に言った条件をお前も言っただな……」

鏡を力で拡大させ、別の空間を映す

生命の母なる海を……

満月が空に浮かび、水面を照らすのをただただ眺めながら、瞳を閉じ……詞に力を乗せた

「氷月杏……彼に幸多くなる事を」

瞳を開けると、辺りは蒼白い光で照らされていた

其れは僕自身が放つ光

身体が宙に浮いている

「杏……？」

名前を呼ばれてくるりと振り返ると、横たわった綾兎達が居た

「綾兎……僕の傷を治してくれてありがとう。助かったよ」

「いえ……あの、杏……貴方は一体……？」

僕の今の状況に驚きを隠せない表情をする綾兎

「その説明は後です。取り敢えず今は」

光で照らされているとはいえ、闇に閉ざされた空間の中に居ることには変わらない……それでも

「此処から出るっ……！」

キン 「っ!？」

いつの間にか握っていた十字架が、僕の心に反応したかの様に強い光を放つ

僕は両手を前につきだし、十字架を包み込んだ

キン キン

十字架に付いている鎖が音をたてる

僕は瞳を伏せ、昂月が言っていたことを思い出す

「あくまで体内の力を目覚めさせたただだから、それ以降は自分で解放しろ。鍵を使いこなせ。鍵こそが己の力の媒介だ」

そう昂月は言っていた

でも、その前に予兆があった

綾兎に連れられて祠の封印に行ったときに脳裏に浮かんだものと詞闇に溶けゆく光のおぼかげ

逆に考えると、光を闇が包み込んでいるようにも見えた

其れは片方だけでは成り立たなくて、二つの意味があったんだ

「……『闇よ……光を支える糧となれっ』」

あの時の詞はまだ完全じゃなかった

ドクンッ

脳裏に浮かんだ詞

昂月は「魂が憶えている」と言った

その意味が 少しだけ分かった気がする

想いを乗せて詞を唱える

『闇よ光を支える糧となり、光よ闇を照らす道標となれ。我、夜の
遺伝子を継ぎし契約者・氷月杏の名の元に【絆の鍵】よ。我が想い
に答えよっ!!』

ドクンッと僕の鼓動に合わせて鍵が震える

辺りを照らしていた蒼白い光が鍵に集まり、十字架の中心に付けられていた半透明の石に吸い込まれた

だけど其れは一瞬のこと

鍵は蒼白い光を放ち、僕自身を包み込む

身体中を力が巡り、自分が変わっていくのを感じた

『解』

口がその詞を言ったと同時に鍵は姿を変え
柄が長めの剣と
なった

「夜剣・蒼月」

キンツと光るその剣の名は、無意識に口から出たもの

魂が覚えている 僕の相棒

蒼月を手に取り、構えてみる

……ん？

なんか服装まで変わった気がするんだけど気のせいだよな？

制服のデザインが何となく違うような……深く考えると、僕自身が魔法少女（少年……？）になったみたいで嫌なので、此の件は

スルーしよう

『きょーくん……？　だよね？』

ぽかんとした表情で僕を見る閑崎さん

其れは水城先生も綾兎も同様で………

「ええ、氷月杏ですよ？　って、あれ？　水城先生？？　……………
貴女が居て、何で此処から出れないんですか……………」

「うぐっ」

だらだらと冷や汗をかき始める水城先生

「……………って、何で私が居て無理なんだ……………とか言っただんだ？」

「だって、水城先生って綾兎の上司じゃないですか。其れも結構上の。聞いたときに綾兎が可哀想だと思いました……………僕の上の人も変人で変態ですけどね」

「聞いた？　綾兎にか？？」

「ボク……………其所まで話しましたっけ？」

怪訝そうに僕を見てくる二人……………情報源がアリスだったような……………

「やだな、綾兎。話した内容は忘れちゃ駄目だよ？」

「そうなんですか……………疑ってすみませんでした」

めつとたしなめると綾兎がしゅんつと頂垂れた

綾兎……ごめん。自分の姉が情報を曝したんだよ？

其れはさておき

「閑崎さん……此の世界を創った力の源は何？」

彼女は僕を見て、ビクツと震えた……怖がらせてしまったかもなあ
……

『……此処は観柚の中なの。心に広がった闇で創られた世界に、お姉さまから貰った力を注ぎ込んだモノ。出口は観柚にしか開けない……だけど、力が暴走してしまつて、主導権が観柚じゃ無くなつてしまつたみたいで………』

「嗚呼、じゃあ閑崎さんの心の闇を浄化」

『綾兎くんがやってくれたんだけど、もう此の空間は観柚のモノでは無くなつてしまつたから……無理だよ』

最後の方の言葉が小さくなっていく……彼女の瞳には涙が光っていた

『きょーくん、巻き込んだやつてごめんね……痛かったよね……？
苦しかったよね………？』

「確かに痛かったけど……悪いのは閑崎さんじゃないし。その、『お姉さま』が閑崎さんに力を与えたんでしょ？」

『う、うん……………でもっ!!』

「全然悪くなかった訳ではないから、罪は償わなくちゃいけないけど……………まあ、いざとなったら其所に居る二人が何とかしてくれるよ」

「勝手に決めつけ（るな）（ないでくださいっ）!!」

なんか二人が怒っていた

『そ、そうだね……………うん、難しい事は二人に任せよう』

「その息だよ、閑崎さん」

『うんっ!!』

「おわっ!？」

にこやかに頷く閑崎さん

テンションが上がったのか、持っていたカッターナイフごと腕を振り回す

怖かったので後方にジャンプ

ほっと息を付くと、閑崎さんが顔をしかめていた

『何で離れるのよう……………』

「危ないからっ!!」一回刺されてるからカッターナイフ自体にト

ラウマ持つてるしっ!!」

睦月の原稿を手伝いさせられるたびにカッターナイフを持つしかないのか……………それ以前に料理するときに思い出さないと良いな

『これは『お姉さま』に貰った大事なモノなのっ!! 此れで観柚は実体化してるの』

…………え? 今何て??

「…………閑崎さん、其れを『お姉さま』に貰ったの?」

『そうだよ。だから観柚が使えるのはこのカッターナイフだけだもん。観柚自体は闇に惹かれやすいだったみたいだし。周りの闇を逆に使って攻撃したりしていたからね』

「そのカッターナイフこそが力の源……………?」

『そうなるかもね』

納得した。カッターナイフが……………もしかしたら

「閑崎さん…………カッターナイフを渡してもらえるかな。たぶん其れがこの空間の核」

『「「えっ(なっ)!!?」」』

驚愕する三人

でも、これ以外核と呼べる物は無い

『核なら仕方ないね……きょーくんの好きなようにするといいいよ』

「意外にあっさり渡された……………良いの？」

思ったよりあっさり事が進んだことに吃驚する

そんな僕を見ながら閑崎さんは苦笑した

『いやあ、最近女の子がカッターナイフを振り回すのは危ないと思つてたの。実体化解けたって別に構わないもん』

閑崎さんの言葉を聞いて、夕方の睦月の行動を思い出す

担当さんに向けてスタングレネードを投げていたし……………桜果は桜果で料理でダークマター作るし……………女の子は怖いです

「じゃあ、貰います。たぶんこれを破壊すれば良いんだけど……………水城先生や綾兎は破壊できる？」

神崎さんから鈍色に光るカッターナイフを預かり（内心は冷や汗かいている……………これが槍状になって僕の身体に刺さったのか……………今すぐ消したい）、二人に話を振る

「「^{アリス}相方が居ないと無理だな（です）」」

其れほど膨大な力が必要なようだ

僕も力が目覚めたばかりだけど、破壊できるかな……………

ふと、ある考えが脳裏に浮かんだ

カッターナイフの刃をしまい、床に置く

次に蒼月を違う物質に変えるイメージを試みる

蒼月は僕の想いを其のまま象ったもの

なら、もしかしたら……………

案の定、蒼月は淡い光を放ち……………足首から爪先にかけてのサポーターが変わる

「なんだ氷月、そんなの造ってどうするんだ？」

怪訝そうに僕を見つめる水城先生

僕はサポーターを足に装着し、軽く足を振る

そして、勢いが着いた状態で足を振り上げ

カッターナイフの上に降り下ろした

パリンッ

砕け散るカッターナイフ

踵には鈍痛が来るだろうと思っていた割にそんな感覚は無く、【夜の支配者】の力が凄いいものと改めて知った

『……（ガタガタガタ）』

三人が僕を見て震えていた

そんなに怖かったかな………カッターナイフを振り回す少女や、三角定規やシャープペンシルを武器にする【光の住民】さん達の方が怖い

よし、此処はスルーしよう

砕けた闇が辺りに散らばる

三人が震えて役に立たないので、思うがままに事を進める

「『浄』」

瞬時に蒼月を剣の形に戻し、詞を呟く

詞に反応するように蒼月が浄化の光を出した

閑崎さんの心で出来た闇の空間は、蒼月から放たれる光に溶け込む

ように薄れて消えた

光が徐々に増幅していき、辺りが真っ白になる

眩しさに目を伏せ、一瞬身体が浮く

其れは束の間の事で、次に目を開いた時には見覚えのある……綾兎の部屋居た

「戻れたのか……？」

水城先生が辺りを見回す

閑崎さんと綾兎も、少しの間呆然としていたけど、戻れたと分かってホッとしてる

硝子片が散らばっているけど、そのままの状態になっているのだから仕方がないんだけど

ま、水城先生とかがなんとかしてくれるだろうで、

「閑崎さん……これからどうするの？」

『……うん、どうしよう……』

しゅんっと俯く閑崎さん

カッターナイフが砕かれたから実体化が解け、半透明な状態で宙に

浮いている

変身（というか力を解放）して地面から数センチ上をさまざつている
僕達も人のことは言えないけどね

「カリン様、閑崎さんを雇いませんか？」

「『へ（え）？』」

綾兎の不意打ちの発言に驚く僕達

「今回の件で二年前の件に閑崎さんを上の方が敵側なのは分かりましたし。人質　いえ、閑崎さんの力を伸ばして人手不足を補いましょう」

「何気に黒い（な）（ね）、綾兎^{くん}」

キラキラと目を輝かせながら言う綾兎に、ほぼ同時に返す僕達

『でも、観柚のしたことを考えると……………良いのかな』

自分を殺した相手を倒して、僕を殺しかけて……………だけど、どちらも仕方ない事だと思う……………よね？

「閑崎さん」

『きょーくん？』

「……………今までは感情で動いていたんだから、此れからは閑崎さんの好きにすれば良いと思う」

『っ……っん!』

嬉しさで涙を浮かべる閑崎さん

瞳から溢れる涙がポロポロ落ちる

暫し考えてから閑崎さんは水城先生に向き直り、深々と頭を下げる

『水城せんせい、これからお願いします』

「うむ、存分に使えるがよい………まあ、閑崎は闇の力の方が使
いやすいだろうから、師匠はタクミだろうなあ」

『……なんか言い方が酷い』

「あ、責任は私と綾兎が取ることになるな。綾兎……後は任せた」

「カリン様、一方的に押し付けしないで下さいっ!」

『酷いよおっ!!!』

二人で水城先生に言い分を訴える

その光景を眺めつつ僕は

キーン

……あれ？

体内を巡っていた何かがふいに止まる

急に視界が歪み、身体から力が抜ける

瞳が徐々に閉じていく……………嗚呼、そういえば失血死しかけたんだっけ……………

キン

耳許でそんな音が響いたと同時に意識が遠ざかる

瞳が閉じる瞬間に、三人が慌てて駆け寄ってきた気がした

ごめん、ちょっと眠いんだ

少し休ませて……………ガクリ

最終章「日常リターンズ」とっておくけど、やっぱり世界は理不尽だと思

何もない静かな一時。

そんな当たり前の事が平和だということを今まで忘れていたのかも
しれない。

普通の生活。

普通の出来事。

朝のニュースでやっていた事件などの起きる確率は殆んど無い。

異質なものなどこの世には存在しないのだから……

そんな事を思いつつ、日々の生活を少しだけ退屈に思っていた
とか数カ月前までは考えていたけど、

『結局は日常が一番幸せなんだよなあ』

そんなことを考えつつ、僕は瞳を開けた。

眩い光が差し込む部屋。

ぽかぽかと暖かいベッドの上。

久々にぐっすり寝れたらしく、気分は爽快だ。

そして、身体を動かし起き上がる。

七月に入ろうとしている月曜日の朝。

来週には期末テストが待っている。

梅雨晴れたようで今日は見事な快晴だ。

「さて……と」

僕は思考を一時中断してベッドから降り、んーっと身体を伸ばす。

「……………ん……………」

……あ、起こしちゃったか。悪いことしたな。

僕は隣で寝ていた綾兎に掛け布団を掛け直し、着替えることにする。

綾兎はぬくぬくと僕の掛け布団にくるまり、天使の寝顔という表情で寝て……………え？

「……………杏の体温、すごく暖かいですう……………みゅ……………すうすう……………」

……………意味深な綾兎の発言に固まる僕。

「杏……………そんなと……………んっ」

「…………おい」

三日前に起きたこと・そして昨日起きたことを頭の中で高速再生させてから、綾兎に手を出してないことを確認……………いや、大丈夫のはず。無意識に何もしていない……………はず。

綾兎から視線を反らし、いつぞやにアリスにしたように、背を向けて着替え始める。

室内を綾兎の吐息と僕の脱衣時の衣擦れ音が響き渡る……………なんだろう。

なにもしてないのに申し訳ない気持ちになる。

ネクタイを結び、ベストを羽織る。布ベストだから動きやすいし見た目も上品に見えるから助かる。

水城先生の計らいか、閑崎さんに刺されて破けた代わりの物が自宅に届いた。

隣で寝ていた綾兎は……………僕の傷を完全に修復するために、付きつきりで居てくれたらしい。

「……………うにゅ……………」

「……………ははっ」

ある程度支度が整い、鞆の中に必要な教材を入れて部屋を出ることにする。

綾兎にはもう少し休んでもらって、手作りの朝食をご馳走しよう。

メニューを考えながら台所に向かう。

……………ま、昨日もご馳走したんだけどね。

綾兎の部屋で意識を無くした僕は、二日後に目覚めた。
やはり失血死寸前だったそうなの。

次からは気を付けます。
もう痛い思いはしたくないし。

八つ切りの食パンを取りだし、スクランブルエッグとハムとレタスを挟んだサンドイッチを作る。
昨夜のご馳走の生野菜を刻んであっさりとしたスープを作り、甘さ控えめのオレンジジュースとヨーグルトに缶詰の黄桃の身を乗せたものを付ける。

お弁当は作らないで、購買でパンを買うことにしよう。

鞆を取りに行くついでに綾兎を起こし、制服に着替えさせてから台所に連れていく。

朝食の七割方は綾兎が食べてくれた。流石『糖分の妖精』の称号を受け取っただけのことはある。

洗い物をシンクに置いてある桶の中に入れて浸け置きし、僕達は家を出た。

よく考えてみると、綾兎と登校するのは初めてだ。

電車に乗って、三駅先で降りる。

降りてから何時もの通学路を歩いている間、僕達は今後についての話をした。

僕が倒れてから、水城先生の相方にあたる神城先生の自宅に連れていかれ、溢れた血液を浄化して体内に戻してくれたらしい……………相変わらず凄い技術だ。

神城先生にはお礼を言わなければいけないな。

で、残りの小さい傷等を綾兎が治してくれた。

只、胸元（丁度鎖骨の真ん中くらい）に十字架に翼をつけたような痣が出来ていた。

綾兎達にも似たような痣があるらしいので気にしないことにしよう。

着替えや水泳の時に指摘されたらどうするかと綾兎に聞いたら、「一般の人間には視えないから安心してください」と言われた。

確実に一般の人間から道を踏み外していることに関しては、ちゃんと考える必要があるな。

閑崎観柚さんは水城先生と神城先生に連れられ、【光の世界】を保っている【正マスター】さんに会って、神城先生の元で【闇の住民・見習い】として、修行をすることになった。

元々閑崎さんは、『魂を実体化させ人間に見せていた存在』で、突然現れても問題がないように、周りの人々の記憶に閑崎観柚という人物を溶け込ませていた。

其れを周りに居た人々の記憶から抜き取り、本来のそうあるべきだったように閑崎さんの存在した形跡を消した。

閑崎さんは『此のまま観柚が【現実世界】に居ても力にはなれないし…………… だったら力を付けて、今度は誰かを守るようになりたいなあ』と瞳に涙を浮かべながら言っていた。

綺麗に笑い、水城先生達に連れられて【現実世界】を後にした。

無を有に歪ませたのが、閑崎さんが言っていた『お姉様』で、【闇の世界】と【闇の住民達】を消し去った首謀者だ。

つまり、綾兎や水城先生達にとっては敵になる。

僕にとってもだ。

僕の従姉の桜果を傷つけた相手。

其れが一体どういう相手なのかは分からないが、敵を倒すためには僕の持つ【夜の支配者】の力を強める必要があるだろう。

【現・夜の支配者】の昂月に出した条件の一つにより、夢を通じて昂月に力の使い方を教えてもらうことになっている。

条件の二つ目には、【夜の支配者】について、水城先生と綾兎に詳しく話す事を約束させた。

此のまま行くと【夜の支配者】はどちらに味方として付くのが分からないと共に、【危険分子】にされてしまう可能性が高い。

伝える方法は、僕を通してになるらしい。

僕が思うに昂月は、綾兎達が言っている【正マスター】のように、世界を保つためにその場から動くことが出来ないのだう。

だからこそ、次に力を継ぐ僕の力を目覚めさせたのだ……………

「杏」

「綾兎？」

不意に隣を歩いていた綾兎が僕の名前を呼ぶ。

足を止めた綾兎は少し考えた後、口を開く。

「杏は桜果さんの事を死んだ事にして考えているみたいですが……………」

「ああ、その事が。綾兎が気にする事じゃないんだけど……………」

「そうなんですが……………、杏」

何かを言おうと迷っていた綾兎が考えを纏め、僕の瞳を見て言った。

「はつきりとは言えないんですが、ボクは桜果さんは死んでいないと思います。水城先生も言っていました」

「……そっか」

苦笑を浮かべる僕。

だけど、綾兎の言葉には優しさという想いが伝わってきた。

僕は 思うがままの言葉を口にした。

「一寸だけ……綾兎がそう言うのなら、一寸だけ思ってみようかなあ。桜果が生きているって。何処かで 元気に過ごして居るってさ」

「杏……」

安堵の表情を浮かべる綾兎。

「何時か綾兎に会わせてあげたいよ。そして弄られてしまえ」

「満面の笑みで居るところ悪いのですが、弄られたくはないですっ。アリスだけでも手一杯だというのに」

綾兎が全力で拒否していた。

……… まあ、桜果はなんというか…… 睦月とはまた違った18禁キヤラなんだよなあ。

お風呂覗いたりするし。他人にやってないか不安を感じつつ………
… 僕だけ弄ってる気もする。

水無瀬とは何故か犬猿の仲だし……… 僕と水無瀬と桜果だと、桜果が一番上の気がするよ。

そうそう、桜果にも二つ名のような称号が付いていたっけ。

確か

「杏、おっはよっ
」

ガバッ 「わっ
」

「にゅふふ。はぐう
」

背後からぎゅうぎゅうつと僕を抱きしめてくる睦月に思わず嘆息。

「睦月おはよー」

「天宮さん、おはようです」

「あ、やっぱり綾兎くんと一緒になんだ」にゆふふ」

ニヤニヤと僕達を見る睦月。

何でだろうと考えた途端に思いがけない言葉を呟いた。

「ふふつ、次の主人公は綾兎くんにしよう……杏はそうだなあ……
……鬼畜攻めかな？」

「「却下っ（です）！！」」

二人で却下する。どうして僕が巻き込まれるんだ。

「えゝ、良いじゃない。減るもんじゃないし」

「人の心を確実に削り取って、睦月は何をしたいんだっ！！」

「だって私の趣味だし……あ、そうだ」

会話を途中で中断し、ゴソゴソと鞆の中を漁る睦月。

話をそらされ複雑な心境に至りながら、取り敢えずさっさと学校に向かうことにする。

睦月は僕にがっしりと抱きついた状態で「あれでもないこれでもない……」と鞆の中を漁り続ける。

綾兎が微笑みを浮かべながら……まるで「ボクはこの方達と他

人ですよ？」と言わんばかりに半歩分後ろを歩いてる。

ギロツと睨んだら顔を背けた……さっきまでのゆるゆるとした空気を見事ぶち壊した天宮睦月………これも一種の才能なのだろうか。

「やっと見つかった。じゃじゃーん」

「「？」「」

折り畳まれた紙を取りだし、瞬時に僕達に向き直る睦月。

勢いに押され、僕達は立ち止まる。

「　　って、これ何？」

「開けば分かるよ、にゅふふふふ」

がさごそと紙を開く。

僕の後ろからひよこつと除く綾兎………どうやら中に書かれていることが気になるらしい。

………睦月の謎の笑みに不気味というか………恐怖を感じる。

ピンっと伸ばした紙の一番上に書かれた言葉に目が行った。

「……………書籍人気ランキング？」

「マーカー引いたところ読んで」

「？ ええと……………」

言われるままに桃色の蛍光マーカーが引いてある部分を読んでみる。
マーカーは表の上の方に引かれて

「…………一位・著作天宮睦月『僕たちの想いは……………』………ってお
いっ……！」

「なに？ ……あ、そうだ。明日祝賀パーティーがあるから学校休
むから。ノート宜しく」

「そうなんだ。おめでとうございます。ノート了解しました
じゃなくてっ、何であるBLが一位なのっ！？」

「私を書いたから」

得意気に胸を張る睦月。

軽く読ませてもらったただけなので詳しくは覚えてないが、BLを書
いたのは今回が初めてらしい。

内容も……………まあ、キスやデート位だったから大したことないら
しい。

だけど、初めて書いたジャンルで一位を取るとは……………流石だと思
った。

だけど、確かこの話のキャラクターモデルは確か……………僕と水無
瀬だ。

これは確実に……………マズイ。

「あ、あはは……です」

睦月に小説を読まされた綾兎は、『御愁傷様』とばかりに苦笑した。

僕は……『何時か睦月の担当さんと飲みに行ったらトコトン愚痴りあうぞ』と心に決める。

こうなったらもう……諦めるしかないな。

「今度皆でご飯食べに行こ。私が奢ってあげる　あ、綾兎くんは程々が条件だけど」

「……！」

にこりと笑みを浮かべる睦月が珍しく大人に見えた。

……ま、モデル料だと考えるか。

食べ物に行ったついでにゲームセンターのクレインゲームで欲しがってた初音　クのフィギュアでもとってやろう。

話しているうちに僕達は学校に着き、下駄箱で上履きに履き替える。

履き替える直前に睦月が鞆から紙袋を取り出していた。

「紙袋………何に使うの？」

「こういう結果が周りに広まってる日には、手紙が入っていたりするのよね」

ニヤリと含み笑いしながらカパツと自分の下駄箱の扉を開ける。

一人分の下駄箱は結構大きくて、運動靴と上履き……後、冬になった場合のブーツを入れるスペースがある。

冬季女子限定の使用方法なので、それ以外の時は折り畳み傘を入れるスペースになる。

『手紙などを入れるときは雨天時以外はブーツのスペースに入れるように』と昔の生徒会長さんが決めたらしく、人気がある生徒はそのスペースに手紙や差し入れを入れられるらしい。

前にも話した通り、天宮睦月という存在は周りから好かれやすい人材なので、時折何かしらが入っていたりする。

ガチャッ

「……あれ、珍しい。手紙三枚と手作りクッキーだけだ」

「……………珍しいね」

下駄箱に手作りクッキーを入れるのは衛生的にどうかと思うけど。

「これじゃ、紙袋使わないかあ……………」

手紙と手作りクッキーを鞆に入れ、持ってきた紙袋を下駄箱に押し込む睦月。

「二人とも、早く行きましょう?」

僕達が話している間に靴を履き替えたらしい。

「ま、夕方には増えているかもしれないし」

「かもね」

ちよつと拗ね気味の睦月に苦笑しつつ、僕も下駄箱の扉を開き上履きを

ドサアアアッ

「「「……………は（え）？」」」

下駄箱の容量には合わないであろう量の手紙が流れてきた。

紙の洪水と言わんばかりに溢れた手紙を慌ててかき集める。

「……………杏……………、紙袋使う？」

下駄箱にしまい込んだ紙袋を差し出す睦月。

目以外笑ってないのですが（汗）

「あ、ありがとう睦月」

紙袋を広げ、手紙を中に入れる。

「と、取り敢えず教室に向かいましょう。手紙は教室で読みましょう?」

困惑した表情の綾兎がその場を仕切り、僕達は教室に向かうことになった。

………両手で抱えるほどに膨れ上がっていた紙袋を持った僕が注目を浴びていた事实は………抹消できないものかな………

「「「おはよー（です）」」」

ガラスと教室の扉を開け、三人同時に挨拶する。

「あ、おはよー……水無瀬ー、相方が登場したぞ」

「?」

クラスメイトの一人が僕達を
特に僕を見て水無瀬に声をかけた。

「杏ー、後そつちに居るであろう天宮と雪代、ちよつと来い」

今日は何故かクラスメイトの殆んどが、僕の幼なじみの水無瀬の机を囲っている。

だから水無瀬から僕達は見えないらしい。

僕達はクラスメイトに間を開けてもらいながら、水無瀬の所に向かう。

水無瀬に向かい合う位置に行き

「おは……どうしたの一体」

「はよ……お前もか」

水無瀬の机の上には大量の手紙。

量は僕が抱えてるのと同じくらいだった。

水無瀬と共に額を押さえて嘆息。

ニヤニヤする睦月と苦笑気味の綾兎の視線が痛かった。

「もしかして……おい杏、お前の手紙一枚寄越せ」

「え？ ええと……はい」

ガサツと紙袋の中から適当にチョイスしたすみれ色の便箋を取り、

水無瀬に渡す。

僕の手から無造作に奪い取った封筒を破き勝手に開く。

「……………やっぱりな」

「何が？」

文面を軽く目で追い、呆れたように僕に手紙を押し付ける水無瀬。

「読んでみる杏。この件は確実に天宮が原因だ」

はあ……………と嘆息する水無瀬の行動に疑問符を浮かべつつ、手紙を読
んでみる。

手紙にはこう書かれていた。

『水無瀬さんとお幸せに きゃっ／／／』

「うわぁ……………」

思わずドン引きする僕。

今日は授業に出ないで帰りたくなった。

だけど、期末テストを前にして帰るのはちょっと……………ね。

こういうときに自分の性格を恨みます。

「俺の手紙と大差ないな。天宮、資料がわりに持って帰れ」

「えー、何で私が……あ、でも、手紙でそう書かれているってことは………周りも望んでいるんじゃないかな？ にゅふふ」

睦月の含み笑いがなんとなくウザい。

「天宮………少しは反省しろよ」

「そうですよ………杏が水無瀬さんと付き合っわけないじゃないですかっ」

「うぐっ」

「？ どうしたの水無瀬？」

思わず水無瀬が漏らした言葉に綾兎が追い討ちをかける。

綾兎の言葉を聞いて、ほんの一瞬だけ水無瀬が傷ついたような表情をしたのは………スルーしよう。

水無瀬とはただの幼馴染みで、別に付き合ったりはしていないんだし………べ、別に水無瀬が誰を好きになっただって気にしないんだからねっ。

……ん？ 今言った内容………なんかツンデレっぽいな。僕のキャラとして軸がぶれてた気がするので心の奥に封印する事にする。

「取り敢えず精神的に多大なダメージを受けそうだけど、自分の席で仕分けしてみるよ」

水無瀬から手紙を返してもらい、自分の机に向かう……といっても水無瀬の席は睦月の反対隣　つまり睦月の隣の席（後ろから二番目の窓側の席）に座っている僕の二つ隣になるわけだ。

で、綾兎の席は僕の後ろだから、自然と何時ものメンバーが集まってしまう。

綾兎以外はくじ引きだったんだけどなあ……………偶然もあるものだ。

……あ、某次元の魔女さんが言ってたけど、『この世に偶然はない。あるのは必然』なんだっけ。

こういう非日常も僕の人生の中で必然的に起こるものなのかな……

……

ふと窓の外を見ると、緑溢れる並木道と登校してくる生徒達が見える。

そのほとんどが夏服を着ているのが、非日常の日々が数カ月経ったことを僕に感じさせた。

窓から視線を戻し、鞆の中身を机の中に押し込んでから、紙袋の中身を机の上に乗せる。

そして手紙を一枚ずつ確認して……少しずつ気力が奪われていった

……………

内容が軽いものから凄まじいものまで混ざっていて、脳内が歪んだ桃色で染まってしまうそうだ。

「杏……………頑張れです」

「もうやだ……………帰りたい」

中身を確認した手紙は紙袋に投げ入れていく。

ざっと五十枚はありそうな手紙が、徐々に机の上から紙袋に移動していく。

「……………あれ？　そういえば、水無瀬の後ろに机と椅子が置かれてるんだけど……………誰の席だったわけ？」

「「っ」「」

「？」

水無瀬の後ろに座っていたのは閑崎さんだった。

閑崎さん親友だった睦月の記憶からも消されてしまったのが分かる。

仕方なかった事とはいえ……………なんだかやるせない。

「そ、そういえばボクの隣……………睦月さんの後ろにも机が置かれてますね。先週まで無かったと思うんですが」

「あれ？　本当だ……………何でだろう……………」

「あ、なんか転校生が来るらしいぞ」

綾兎達の会話に、僕と同様に手紙に目を通してた水無瀬が反応する。

確かに先週までは無かった……………あれ？

他にも行方不明者が出たのだろうか。

……………最近は考えが変になってきたな……………人間をやめた訳じゃないけれど、この考えは危ないよね。自重。

「え、でも水無瀬、何で知ってるの？」

「サッカー部の奴等が言ってたんだよ……………で、杏。サッカー部に入らないか？」

成る程。そして然り気無く勧誘してきやがった。しかも、「サッカー部に入らないか」の所で白い歯を輝かせやがった。

実際に見ると、結構気持ち悪いものなんだな……………

「幽霊部員以外にはならないから」

「む……………杏が居れば、全国大会も狙えるのに」

部活入ったら、バイト出来ないし……………それ以前に

「その前にレッドカードを出されるよ……………」

「だよなあ……………」

生温かい視線で僕を見てくる水無瀬。ウザイ。

確か高校の体育ではサッカーはやってないので（高一の時の球技祭はバスケットだし）、高校のクラスメイトには殆んど知られてない（同じ中学から来た生徒は水無瀬以外は他のクラスだし）。

だから、僕達の話聞いて二人がキョトンとしているや……………」

と思いながら二人に視線を向ける

「水無瀬が杏に熱い視線を向けてる……………にゅっふ」

「杏はやっぱり……………うう」

……………おい。

相変わらずの非常識満載のメンバーを放置し、手紙を広げて読む作業に戻る。

テンションをダダ下げながら読んでいき、封筒も残り一枚になった。

淡い桃色の封筒に、桜の花と葉っぱが書かれている。

……………あれ？ 何処かで見たことあるような気が……………」

ガラッ 「プリーズスタンドアップッ!!」

「「「なっ！？（僕含むクラスメイト一同）」」」

「そして、私を讃える。愚民どもめ」

「……………はあ」

水城先生のよく分からない発言がクラス内に響く。取り敢えず嘆息。

そして、それに反応するクラスメイト一同（僕含む）でも、流石に慣れてきたのか突っ込みはしないようだ。

「ただ単に、目立ちただけだが？ 氷月」

「心読まれたっ！？」

流石綾兎の上司。可笑しな人だ。

「氷月のばーか」

「……………」

ムツとした表情で、拗ねたように暴言を吐く水城先生。頭に來たけど此所は無視しよう。

先生自身も今がホームルーム前の時間だと思い出したらしく、ドア付近から教卓の脇に移動し、胸を強調するように腕を組ながら徐に

語り始める。

「とまあ、氷月が突っ込みを入れてくれないのはとても苛つくが、朝のホームルームを始めるぞ」

「……やれやれ」

某SOS団の突っ込み担当みたいな返事をする水無瀬。

僕は封筒の柄を眺めながら、何時何処で同じのを見たのかを考える。

「突然だが、このクラスに二人転校生が来ることになった」

「「「おおーっ（クラスメイト一同）」」」

『転校生』と言う言葉を聞いて、クラス内が騒がしくなる。最早知っている情報だったので無視。

ま、二人も居るとは思わなかったけど。

「こういう時の杏の態度がツンデレみたいなんだよね。いかにも『そんなの知ってるけど何か？』って感じがツンツンしてて……知らないときはメツチャ喜ぶ」

隣で睦月がブツブツ言っていた。

「ということは、ボクの隣と水無瀬さんの後ろの空いてる席に転校生さん達が……仲良くなれるでしょうか？」

少し不安気味な表情をする綾兎。

「一般人から多少ずれてればこのクラスでやっていけるよ。綾兎はまあ……………弄られないように注意が必要かもね」

「あう…………アリス以外に弄られたくないです」

しゅんって落ち込んでいく綾兎。

ああ…………見えない耳が見える気がする。

「…………あれ？　ということは、杏は僕のことを弄っているんですか？」

「…………それは秘密」

ごめん、正直いうとかなり弄ってる。

「杏、一体どういうこと」

ガッツ　ガッツ「あたっ」

不意に額に何かが勢いよく当たった。痛い……………。

カッンツと机の上に落ちたそれは…………黒板に使う丸い磁石。

綾兎も同様に攻撃を受けたらしく、恐る恐る二人で前を見る。

「氷月、雪代。私のホームルームを妨害するとはいい度胸だな。おい。」

片手で磁石を弄びながら、額に怒りマークを浮かべた水城先生が告げた。

どうやら話しているうちに声が大きくなっていったようだ。

「そこまではしゃぎたいんだったら、二人には転校生達の面倒を見てもらおうか。お前ら暇そうだし。」

「理不尽だっ（です）！！」

二人して抗議する。

見ず知らずの転校生の面倒を見るなんて面倒くさい。
放課後は仕事があるのに……はぁ。

「私も今日転校生が来るのを知ったんだ。ま、お前らならなんとかなるだろう……まぁ、頑張れや」

最後が投げやりだったのが気になったけど。

「というわけで、おい、案内役が決まったから入っていいぞー。」

扉を開けて廊下に声をかける水城先生。

「……頑張ろう、綾兎」

「……はいなのです」

小声でやり取りをする。

「お、二人とも何処だ？ あ……… いたいた。ホームルームもあまり時間がないからさっさと入って自己紹介しろ。……… 緊張？ そんなの知るか。髪型？ …… おー、なかなか似合ってるじゃないか」

……… とうやら一人は水城先生の知り合いのようだ。

「じゃ、美少女二人の登場だ」

あ、転校生は二人とも女の子なん

「待たせたな、諸君」

「入って早々の一言目がそれってどうなのかしら………」

「……… へ（え）？」

声の主を見たとなん、僕は固まった。

真っ白なサラサラロングヘアを黒のリボンでポニーテールに結んだ……… 気の強そうな……… 紅い瞳の女の子。

黒板に「**緋皇亜梨栖**^{ひおうありす}」と書いた少女は……… 綾兎と瓜二つの顔をした
というか、行方不明になっていたアリスだった。

さつき水城先生と話してたのはアリスだったようだ。

「よっ、久しぶりだな。綾兔」

「アリス姉さんっ!？」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべるアリス。

後ろで綾兔が固まっていた。

いや……………それよりも…………

その後に続いて入ってきた彼女が問題だった。

ふんわりとした長い髪に白のレースのついた茶色のリボンをつけ、
落ち着いた様子がまるでお姫様のよう。

眉目形が僕にそっくりな彼女は、アリス同様に黒板に名前を書く。

水無瀬は気付いたのか、青ざめた表情で「何であいつが……………」
呟いたのが遠くに聞こえた。

クラスメイト一同が起きている事態に着いていけず静観している状態
で、隣の席の睦月でさえ「え、あの子…………あれ？」と瞳を瞬かせ
ていた。

彼女が最後の字を書き、カツンツとチョークを置き、手についた粉
を払った。

「じゃあ自己紹介だな、えっとワタシ【緋皇亜梨栖】と」

「【本宮桜果】です。宜しく願いするわ」

にこりと笑みを浮かべる桜果。

そうだ、思い出した。

手元に残っていた封筒。

それは桜果が使っていたものと 同じものだった。

震える手で便箋を抜き出し、開く。

『キョウへ。転校することにしたわ。これから宜しく願いするわ』

「……………嘘だろ……………」

「「ということで、弟共々宜しく（な）（ね）っ」「」

「……………はあ」

僕は視点を窓の外へ向け、空を眺める。

日常に退屈を覚えていたけれど……………今はあの日常が懐かしいな

と思う。

そして、現状を更に上回る

非日常が。

扉を開けた。

幾重の運命が……繋がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3003i/>

絆～僕と君を結ぶ鎖～

2011年9月8日19時27分発行